

神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

ディケンズとユーレイニア慈善

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2022-06-17 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: Konishi, Chizuru メールアドレス: 所属:
URL	https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/2630

This work is licensed under a Creative Commons
Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0
International License.



ディケンズとユーレイニア慈善

小西 千鶴

目 次

序 章	1-18
第 一 章 ユーレイニア・コテッジ (Urania Cottage, 1847-1862)	19-41
1. 運命的な出会いー意志の共有	22-26
2. ユーレイニア施設創設に向けてー異なる思惑	26-39
第 二 章 『ドンビー父子』 (<i>Dombey and Son</i> , 1846-48)	42-71
1. 危うい旧世代	44-48
2. 主従関係と世代交代	49-56
3. 女性の力	56-70
第 三 章 『ディヴィッド・コパフィールド』 (<i>David Copperfield</i> , 1849-50)	72-101
1. 女性たちの海外移住	74-90
1) 現地の状況	74-84
2) ディケンズのオーストラリア	84-92
2. 困窮と海外移住	92-100
第 四 章 『荒涼館』 (<i>Bleak House</i> , 1852-53)	102-123
1. デドロック夫人の過去	103-110
2. ユーレイニア慈善におけるディケンズとクーツ	110-119
3. ディケンズの揺らぎ	119-123
第 五 章 『ハード・タイムズ』 (<i>Hard Times</i> , 1854)	124-148
1. 大衆の学校教育に向けて	125-135

2. 息子の教育とユーレイニア・コテッジの訓練	135-147
1) 息子の教育	135-141
2) ユーレイニア・コテッジの訓練	141-147
 第 六 章 『リトル・ドリット』(<i>Little Dorrit</i> , 1855-57)	149-174
1. 慈善の変容 - 『荒涼館』から『リトル・ドリット』へ	150-157
1) 『リトル・ドリット』- 「見せかけ」の善意	150-152
2) 『リトル・ドリット』- 一方的な善意	152-154
3) 『荒涼館』- 慈善と家庭放棄	154-157
2. 慈善における視点の変化	157-173
1) 相対する視点	157-163
2) 視点の揺らぎ	163-173
 終 章	175-180
 引 用 文 献	181-193

序 章

チャールズ・ディケンズ (Charles Dickens) はイギリス 19 世紀の作家として名声を博する人物であるが、じつは、慈善家としても生涯を通して精力的な活動を行った人物である。ノリス・ポープ (Norris Pope) によると、ディケンズの支援は、病院や療養所だけでも 13 ヶ所におよび、彼の銀行口座からは少なくとも 43 ヶ所への慈善金の送付が確認されているという (10)。ディケンズが支援していた施設名や団体名を見ると、「孤児」、「小児」、「難病患者」、「貧民」や「労働者」といった人々が彼の慈善の対象となっており、「教育」、「病」、「衛生」、「住居」など、それらの人々の生存や生活に欠くことのできない様々な分野を支援していたことがうかがえる。¹ また、単なる資金の援助以外にもディケンズは自作の朗読会やパブリックスピーチの場を通して労働者の啓発や慈善事業の振興などに寄与する活発な支援活動を展開していた。²

¹ 孤児が一定の技術を身に付けることを支援する the Orphan Working School、小児の病改善を目指す the Hospital for Sick Children、難病患者たちのための the Royal Hospital for Incurables、貧民の教育を支援する the Poor Man's Guardian Society、ロンドン地区に住む人々の生活および労働環境の改善を目指す the Metropolitan Sanitary Association、ロンドン地区に住む人々の住居の改善を目指す the Metropolitan Improvement Association、労働者の教育を支援する Mechanics' institutes、成人の教育を支援する Adult education、貧民への食事を提供する Soup kitchen、海外移住を支援する Emigration schemes、健康と公衆衛生の改善への支援 Health and Sanitary bodies、住居の改善を支援する Model dwellings association、そして人々の娯楽を支援する Recreational societies など、じつに数多くの支援に携わり、さらには障害者や退職した俳優たちや作家たちへの救済や年金支給のための基金を立ち上げた (Pope 10-11)。

² 朗読会に関しては、Collins 編集の *The Public Readings [of] Charles Dickens* を、パブリックスピーチに関しては、Fielding 編集の *The Speeches of Charles Dickens; A Complete Edition*

たとえばポーブは、ディケンズの社会貢献は、時代の偉大な慈善家と称され、その告別式には 2 百人近い代表者が慈善および宗教団体から参列したといわれるシャフツベリー伯爵 (Anthony Ashley-Cooper, 7th Earl of Shaftesbury) のそれに匹敵するとまでは言えないとしながらも、その働きは称賛に値するものだと述べている (11)。また、同時代の作家ウィリアム・メイクピース・サッカレー (William Makepeace Thackeray) は、ディケンズの善意を “Thankfully, I take my share of the feast of love and kindness, which this gentle, and generous, and charitable soul has contributed to the happiness of the world.” (Collins 353) と讃えている。これらのディケンズの善意は個人的な道徳心からくるものなのだろうか。

1842 年 2 月 1 日ボストンの晩餐会に招待されたときに、作家はこうした慈善の意義について次のように語っている。

I believe that to lay one's hand upon some one of those rejected ones whom the world has too long forgotten, and too often misused, and to say to the proudest and most thoughtless, these creatures have the same elements and capacities of goodness as yourselves, they are moulded in the same form, and made of the same clay; and though ten times worse than you, may, in having retained anything of their original nature amidst the trials and distresses of their condition, be really ten times better. I believe that to do this is to pursue a worthy and not useless avocation. (Fielding 19)

を参照。

社会の底辺にいる弱者たちを自分たちと同じ資質を持つ人間として対等な立場に立ち、彼らに手を差し伸べることこそ意義ある務めであるとディケンズは表明しているのであるが、作家が彼らに特別な思いを抱いているかのように見受けられるのは、数々の試練や逆境に遭いながらも生きる意志を失わずにいるといった作家自身の境遇と関係するからではないだろうか。

ディケンズが、少年期のころに体験した辛い日々はよく知られている。下級役人の息子として生まれたディケンズは、海軍経理部に所属する父親の転勤によって10歳でロンドンに上京した後、生活が困窮して教育が中断され靴墨工場で働き始める。さらに、浪費癖があって借金を重ねた父親の負債の返済が滞り、父が監獄生活を強いられると、ディケンズは家族から離れてたった一人下宿して、テムズ河沿いにある靴墨工場（Warren's Blacking）や父や家族が住むマーシャルシー債務者監獄（Marshalsea Prison）とリトル・カレッジ・ストリート（Little College Street）にある下宿先との間を行き来する孤独の日々だった。³

この転落の日々について、ディケンズは友人ジョン・フォスター（John Foster）に“being utterly neglected and hopeless [...], so help me God!”と、神に縋ることしか出来なかった苦境を打ち明けている。そして、このような状況下に置かれた子どもが、“a little robber”あるいは“a little vagabond”に堕ちることなど、いとも簡単なことだっただろうと振り返ってもいる（Foster 33-37）。ディケンズ少年は、月

³ リトル・カレッジ・ストリートの下宿先では複数の子どもたちと寝床を共有していた。日曜日になると姉ファニーと待ち合わせてマーシャルシー監獄まで通っていた（Johnson 35）。

曜日の朝から土曜日の夜まで労働者階級の子どもたちにまじって靴墨工場で働き、こうした少年時代の記憶に苛まれる作家の辛い胸中は妻にさえ打ち明けることはなかったという (Foster 49)。このような作家の体験が、先に述べたスピーチにおける社会的弱者に対する姿勢に反映されていると考えられる。

この時期のディケンズの足跡をたどってみると興味深い事実が見えてくる。それは、就労先の靴墨工場を拠点にマーシャルシー債務者監獄と下宿先の間でディケンズ少年の行動範囲がじつに広範囲に及んでいたことである。とすれば、そのことはまた彼が目にしていた光景の多さも物語る。先ず、勤務地の靴墨工場は、後に転居するものの、当初はロンドン中心部ウエストミンスターにあるターミナル駅チャリング・クロス (Charing Cross) から南へ下ったテムズ河沿いのハンガーフォード・ステアズ (Hungerford Stairs) に所在していた。そこは、ディケンズの記憶からも、“a crazy, tumbledown old house, [...], and literally overrun with rats.” (Foster 31) と、かなり不衛生だったようだ。そこから昼食や買い物へは、コベント・ガーデン (Covent Garden)、ドルリー・レーン (Drury Lane)、トテナム・コート・ロード (Tottenham-court-road)、ストランド (Strand) など、数々の通りに出かけていた (Foster 33-37)。⁴ じっさい、この界隈からブラックフライアーズ橋 (Blackfriars Bridge) を渡ってテムズ河の南にあるマーシャルシー監獄に至るディケンズ少年の足跡をたどると、大人の足でも優に 1 時間は超えるほ

⁴ 当時のこの界隈の様子は、Thomson の *Street life in London* に詳しく、数々の写真のイラストが人々の暮らしぶりを生々しく伝えている。

どの道のりとなる。⁵

しばらくすると、ディケンズは家族のいるマーシャルシーから近い所にあるサザーク（Southwark）のラント・ストリート（Lant-street）に転居した。概してテムズ河の南側は、19 世紀後半に貧困の社会調査を行いその度合いを色分けしたチャールズ・ブース（Charles Booth）の地図に、「黒：最下層の労働者、浮浪者、準犯罪者ら不穏分子が密集して住んでいる」、「ダークブルー：極貧」「青：標準的な貧困」と、貧困の色合いが濃い場所として記録されている（ワイズ 256-57）。ディケンズの移り住んだ界限には見世物小屋や帽子の製造所など、雑多な通りの様子がうかがえて、作家はその情景を“a wretched kind”と呼んでいる（Foster 41）。⁶

果たして、少年期にこのような体験を持つことはどのような意味を持ち、どのような社会意識を抱くようになるのだろうか。ディケンズ少年が靴墨工場から解放され教育を取り戻したのは 1824 年になってからのことである。2 年ほどの就学期間を経て、ディケンズは 15 歳で弁護士事務所の事務員として働き始める。その間に彼は速記（法）の習得にも励み、その技術を身に付けるとフリーランスの記者へと転向する。そして、法曹界であるドクターズ・コモンズ（Doctors’

⁵ テムズ河の南北に架かるウォータールー橋（Waterloo Bridge）は、当時売春婦たちの自殺の名所でもあった（Paxman 131）。この橋は靴墨工場近辺のハンガーフォード橋（Hungerford Bridge）とマーシャルシー債務者監獄近辺のブラックフライアーズ橋の間に架かっていてマーシャルシー債務者監獄へ向かう道中にあった。

⁶ ブースは、独自の社会的階層区分を考案し、イースト・エンドの住民 90 万 9 千人を 8 つのカテゴリーに分類し、後に色分けした。1886 年に着手した社会調査プロジェクトは、後に全 17 巻からなる『ロンドン民衆の生活と労働』として結実した（ワイズ 241-73）。

Commons) や英国議会 (the House of Parliament) ではその技術を発揮して経験を積んだ。その後も『ミラー・オブ・パーリアメント』誌 (*The Mirror of Parliament*) や夕刊紙『ツルー・サン』 (*The True Sun*) など、ジャーナリズムの業界に携わり、ついにモーニング・クロニクル社 (*The Morning Chronicle*) では、ようやく“steady and full employment” (Wilson 77) を手にしたという。こうして見てみると、学業を終えてから本格的に小説家としての道を歩み出す 1836 年刊行の『ピクウィック・ペーパーズ』 (*Pickwick Papers*) まで、ディケンズは、じつに 9 年間ほどにわたって法律、政治、そしてジャーナリズムと、それぞれの業界に (速) 記者としての経験を積み、足場を着実に固めていったことがわかる。にも拘らず、彼は作家へと転向した、何故だろう。

アンガス・ウィルソン (Angus Wilson) は、『荒涼館』の「大法官裁判所」や『リドル・ドリット』の「迂言省」など、作品中に登場する法曹界や英国議会の描写には“contempt” (63) が示される場合が多いと指摘する。というのも、ディケンズ自身がそれらに従事していた頃に抱いた印象ではないかと述べ、“his anxieties made him speak as though he might be forced to change his occupation” (74) と説明する。確かに、自ら貧困の体験をしたディケンズにとって、法律家や議員たちが交わす社会問題における方策や改善策など、作家が彼らの見解に違和感を抱いていたとしても不思議ではない。

当時の貧しい子どもたちの実情をチャールズ・オズボーン (Charles Churchill Osborne) は次のように残している。

In London alone there were some 30,000 homeless children, and this number represented but a small proportion of the boys and girls who, in the most depraved surroundings, were being trained in nothing but crime. (*Osborne Papers*, Vol. VII, Add. MS. 46406B, f. 7)

ディケンズ自身も一步間違えれば強盗を働いたかもしれないと告白していたように、じっさい貧困によって幼気な子どもが数多く犯罪に巻き込まれていたわけで、ディケンズは貧困と犯罪の連鎖の実態を作品『オリヴァー・トウィスト』(*Oliver Twist*, 1837-39)で赤裸々に描いて、世間に知らしめた。物語では、救貧院の無慈悲な実態と窃盗団の頭フェイギン (Fagin) によって貶められてゆく子どもたちの転落が生々しく映し出される一方で、ブラウンロー (Brownlow) のような紳士の個人的な善意が「救済」として描かれていた。政治でもなく法律でもない、この個人的な「善意」こそが、自らの体験をもとに描き出したディケンズの貧困あるいは社会問題に対する大事な視点だったのだろう。冒頭で紹介した作家の慈善の数々はそれを物語るようでもある。とすれば、問題を浮き彫りにして、それに対する自身の見解を自由に述べられる、そんな小説の世界をディケンズは選択したということだろうか。

じつは、作品『オリヴァー・トウィスト』は作家を一躍有名にただけではなかった。この連載が終了すると、このような視点から貧困を描いた作家に興味を抱いた資産家で慈善家のアンジェラ・バーデット=クーツ (Angela Burdett-Coutts)

からディケンズは招待を受けたのである。クーツはディケンズとの初対面の折の彼の印象を、“a man of letters”というより“a man of action”だったと語って、快活で活気に満ちた表情とその真剣な眼差しからは表裏のない気質を感じ取ったという (Patterson 151)。⁷ その後、二人の交流は友人として築かれてゆき、ポーブが“he regularly supplied Miss Coutts with advice and guidance on a number of her philanthropic projects.” (10) というように、「慈善」を通してその絆は強く結ばれてゆく。⁸

二人で熱心に取り組んだ慈善には、先ず貧民の子どもたちへの教育があげられる。この慈善はディケンズが 1843 年 9 月にカムデンのロンドン自治区の南東フィールド・レーン (Field Lane, 現 Farringdon Road) に所在した貧民学校 (Field Lane School) を訪問し、そこで目にした子どもたちの状況に衝撃を受けたことに始まる。ここでは 70 名ほどの子どもたちが在席していて、その様子をディケンズは『オリヴァー・トウィスト』のフェイギンの住処にたとえ、“so shocking as the dire neglect of soul and body exhibited in these children.” (*Letters* 3: 562) とクーツに伝え、あまりの悲惨さに慈善がうまく功を成すかどうかは言えないと断りつつも、“I deem it an experiment most worthy of your charitable hand.” (*Letters* 3: 563-64) とクーツの協力を依頼した。クーツは大きな資金を

⁷ クーツは著者 Clara Burdett-Patterson の大叔母にあたる。

⁸ Edgar Johnson は、“he had discharged many of the more important and confidential duties of a private secretary and almoner, investigated the appeals of begging-letter writers, brought to her attention many cases of distress, advised her upon many of her charitable enterprises, laid down the plans for their operation, and even supervised some of them, [...]” (310) とクーツへ協力したディケンズの総体的な働きを概要している。

提供することでその改善に努め、1844年の終わりごろまでにはすでに20校の貧民学校が、ディケンズが名付けた「貧民学校組合」(the Ragged School Union)のもとに組織されて、2百人からのボランティアの教師が集まり、2千人ほどの子どもたちがこの恩恵を受けた (*Osborne Papers*, Vol. VII, Add. MS. 46406B, f. 10)。

次に貧困者たちの「住居」の提供があげられる。この慈善もディケンズからクーツに持ち掛けたもので、スラム街の大きな地域を買い取りそこに住宅を建てて住めるように整えた。コロンビア・スクエア・プロジェクト (Columbia Square Project) と呼ばれるもので、ロンドンのイースト・エンドのノバ・スコティア・ガーデンズ (Nova Scotia Gardens) に4棟の住居 (the Columbia Square apartments) が建設された。プロジェクト発端の1852年1月から調査、着工、完成と、時間は掛かったものの1862年に開設されて2百世帯ほどが移り住んだ (Johnson 192, Pope 239)。

そして、二人がもっとも長く密接に取り組んだ慈善事業が、売春婦たちの更生施設ユーレイニア・コテッジ (Urania Cottage) の設立と運営である。この慈善はじつはクーツから切り出したものである。というのも、クーツは、毎夜彼女の屋敷の前で若い女性たちが身を崩してゆく姿に心を痛めていたからである (Orton 132)。当時は、児童買春も児童が12歳以上であれば合法であり、特に児童買春は市場性が高く蔓延していたと言われている (Paxman 149-50)。⁹ ディケンズ少

⁹ ディケンズはそのような少女たちを『骨董屋』(*The Old Curiosity Shop*, 1840-41) で半狂

年が買い物などに利用していたストランドも売春の悪名高き中心地だった (Paxman 127)。しかし、この話題は禁忌であり、とりわけエリート層のなか、いやミドルクラスのなかでさえ売春婦の現実を覆いかくそうとする気運があったという (Orton 132, Harrison 127)。ところが、そんな彼らの体裁を暴くかのよう、ディケンズの『オリヴァー・トウィスト』では貧困から盗賊の仲間引き摺り込まれ、売春婦へと堕ちてゆく無力な女性の生き様がナンシー (Nancy) という登場人物の形で衝撃的に描かれていたのである。ジョン・ハリソン (John Fletcher Clews Harrison) によると、ヴィクトリア朝において売春婦を公然と取り上げるような勇気ある小説家はいなかったという (148)。さらにハリソンは、ディケンズ自身が後に出版された版の序文において、ナンシーが売春婦であることを敢えて公表せずとも、ヴィクトリアの紳士たちには彼女が売春婦であることは明白だったという (148)。ここにクーツが目撃していた現実があったわけである。

ディケンズは事実を伝えることの意義を自身が編集する『ハウスホールド・ワーズ』誌 (*Household Words*) において次のように語っている。“Why do we talk about such horrible things? Because they exist, and their existence should be clearly known.” (HW 225) ¹⁰ これは、工場でひどい状態で働かされている子どもたちが

乱になった籠の小鳥や路上で萎れた花などを用い、比喩的な形で描いている (11)。

¹⁰ 『ハウスホールド・ワーズ』誌 (*Household Words*) は、1850年3月に出版が開始された。本論文内では、頁表記において HW と略語を用いる。当該記事は、“Ground in the Mill.” April 22, 1854, 224-27.

大きなケガを負って死に至っても、安全対策の改善に努めようとしない政府と工場長への告発として語ったものであるが、改善をもたらすためには、先ず覆い隠されている事実を、それがいかにおぞましいものであらうと明らかにすることが重要であるとする作家の意向が示されたものであらう。子どもたちもナンシーも、彼らは貧困の被害者であり搾取されて死を迎える犠牲者でありながら、社会は貧困や売春婦たちを厭うのである。¹¹ この不条理を自らも似たような体験をしたディケンズが正そうと試みたとしても不思議ではないし、自ら歩いて情報を収集するというディケンズのジャーナリスティックとも言うべき作風は、そうした作家の姿勢を物語るものだ。¹²

このように、作品をとおして社会の不条理を取り上げる作家にとってユーレイニアの慈善は特別な意味を持っていたはずである。なぜなら、更生施設の運営を通してディケンズは当事者である彼女たちから直接話を聞くことが出来るからである。1846年の春、クーツからの申し出をディケンズが快諾し、施設の開設に向けた準備にすぐに取り掛かった背後には、こうした彼自身の作家としての興味が潜んでいたとも考えられる。

¹¹ 貧困は個人の責任からという根強い偏見があり、貧困者も、自らに過失はなく支援に値する者 (the deserving poor) と、働ける身体でありながら働こうとしない、よって支援に値しない者 (the undeserving poor) に区別されていた (Orton 148)。

¹² たとえば、ディケンズは 1844 年 5 月 6 日に処刑された Mary Furley の裁判を傍聴していた。Furley は救貧院でのひどい仕打ちから逃げ出して幼子とともにテムズ河に身を投げたものの、本人は助かり幼子が死んだため殺人罪で死刑宣告を受けた。ディケンズは Furley を貧困の被害者ではなく加害者として処分した裁判所の非情な裁定に怒りを覚え、その不条理を作品『鐘の音』(The Chimes, 1844) で取り上げた (Paxman 131)。

じっさい、時同じくして連載が開始された『ドンビー父子』(*Dombey and Son*, 1846-1848)では、かつて『オリヴァー・トウィスト』で描いた売春婦ナンシーの不幸を彷彿とさせるかのように、搾取され犠牲的な死を遂げる売春婦アリス(Alice)が流刑地から戻ってきたという設定で登場し、作家が再び売春婦の問題に視点を注ぎ始めたことがうかがえる。その後の作品においても、ユーレイニアの女性たちをモデルとする人物たちが『デイヴィッド・コパフィールド』(*David Copperfield*, 1849-50)や『リトル・ドリット』(*Little Dorrit*, 1855-57)に登場しているし、『ドンビー父子』において提示される、長男の夭逝によって唯一残された娘が一族の後継者となるという可能性には、若干23歳で大きな遺産を手にした女相続人クーツの影を見ることが出来る。他にも、『荒涼館』(*Bleak House*, 1852-53)では堕ちた女性の問題を取り上げ、『ハード・タイムズ』(*Hard Times*, 1854)では批判される教育システムの背後に更生プログラムの影響が見られる。そして、ユーレイニアの慈善事業を退く前に書かれた『リトル・ドリット』では、慈善そのものが孕む問題点が登場人物たちを通して問い直されてゆく。このように、ユーレイニアでの出来事が副筋としてだけでなく、時には主軸として物語に取り入れられているのである。

本論文は、ディケンズがユーレイニア・コテッジに携わった1846年から1857年までに執筆、連載された小説を中心に、作家のこの慈善活動への関わりがどのような社会意識を作家にもたらしたのかを作品から読み解こうとするものである。刑務所から出所した売春婦たちの更生とその社会復帰を図るための保護施

設であるユーレイニアが、ディケンズ小説に与えた影響については数々の批評家がすでに論じてきている。たとえば、マイケル・スレイター (Michael Slater) は、物語で示される堕ちた女性の贖罪は、作家がユーレイニアの女性たちに込めた思いであると述べ (345)、トム・ウィニーフィリス (Tom Winnifrith) は、一度堕ちてしまった女性はかつての清純さを取り戻すことは出来ないが、彼女たちをその泥沼から助けることは可能だとする内容を物語で描くことによって、ディケンズがユーレイニアの意義を示したと述べる (95)。同様に、ポープは物語の結末に見られる堕ちた女性たちのハッピーエンド的な海外移住はユーレイニアでの海外移住策を意識したものと指摘している (186-187)。また、ユーレイニアに入所した女性たちの履歴や入所中あるいは出所後の人生についての詳細な記録は、1853 年 4 月 23 日付け『ハウスホールド・ワーズ』誌に掲載された記事 “Home for Homeless Women” (HW 169-75) に公開された入居者たちの情報をもとに、パメラ・ジェーンズ (Pamera Janes) が小冊子に、また武井暁子 (Akiko Takei) は論文の形で纏めている。¹³ なかでも代表的なのは、ジェニー・ハートリー (Jenny Hartley) であって、彼女は *Charles Dickens and the House of Fallen Women* (2009) においてユーレイニアの女性たちがディケンズ作品に及ぼした影響を、入居者の事情や状況だけでなく施設のスタッフの構成に至るまで詳細な記録を用いて説得的に論じ、入居者たちの情報を、その子孫に至るまで丹念に追いつけ

¹³ Janes は、*Shepherd's Bush.... The Dickens Connection* を参照。武井は「慈善活動家としてのディケンズユーレイニア・コテージへの評価」『ディケンズ・フェロウシップ日本支部年報』第 30 号 183-200 を参照。

ている。

ユーレイニアでは、ロンドンのミドルセックス矯正院 (the Middlesex House of Correction) とブライドウェル監獄 (Bridewell Prison, Tothill Field) から出所する 10 代半ばから 20 代半ばまでの若い受刑者たちを対象に引き受けていた。彼女たちの境遇や堕ちた事情はさまざまであるが (HW 169-75)、ディケンズは “prostitutes” とは呼ばず、“shame” や “ill-treated” (HW 173-175)、“evil courses” (Letters 5:28) などを用いて表し、総称して “Fallen Women” (Johnson 98) と呼んでいる。したがって、本論文では、職業的な身売りを行う、作品中の登場人物たちについては「売春婦」あるいは「堕ちた女性」と表し、婚姻前、婚姻後に関わらず、貞操を失った女性たちについては「堕ちた女性」と称している。

先行研究からも明らかなように、ディケンズ小説におけるユーレイニアの影響を探る批評の焦点は、主に売春婦たちが作家にどのような影響を及ぼしたかという点に置かれている。しかし、この保護施設創設の発案者で事業の資金提供者であるクーツとディケンズの間の協力関係やその中で生み出された意見の対立、あるいはユーレイニアの運営方法に関する議論がディケンズに与えた影響については、ほとんど論じられていない。なぜならば、クーツの手紙やメモなど直筆のものが数少なく、ロンドンのバーンズ (Barnes, London) にあるウィリアム・バーデット=クーツ (William Burdett-Coutts) 家に所蔵されているものがほとんどで、そのほとんどが公開されていないし、閲覧可能となっている資料も未だ出版はされていないからである。しかも、彼女の秘書を務めたオズボーンが、彼

女の筆跡を“mysterious hieroglyphics, which she found it impossible to read herself.”

(*Osborne Papers*, Vol. IV, Add. MS. 46405A, f. 153) と書き残しているように、その文書自体、判読が困難で筆耕人や秘書の手には負えないものだったことも影響しているだろう。¹⁴ よって、本論文で扱うテーマに関する資料は未だ十分とはいえないものの、クーツ側の資料としては、伝記のほかに、大英図書館に「原稿」(Manuscripts)として所蔵されている *Osborne Papers* を参照した。この *Osborne Papers* は、オズボーンがクーツとのやりとりに加え、当時のクーツをめぐる状況の記録や、クーツに関連した資料を彼女の伝記を書く準備としてまとめたものである。1792 年から 1922 年にわたる資料や記録が含まれ、冊子の形に綴じられて、参照番号として Add MS 46402 Vol. I から Add MS 46408 Vol. IX までがそれぞれに振られている。なかでも、本論文ではクーツの母方にあたるクーツ家と父方のバーデット家の家族の歴史や、クーツの幼少期から若齢期に至るまでの成長記録が主に記されている Add MS 46405A Vol. IV (ff. 224) と、クーツのさまざまな慈善活動について、オズボーンが直接耳にしたり手紙に記されたりしたクーツの言葉や思いを引用また書き写したものが主に記されている Add MS 46406B Vol. VII (ff. 266) を、クーツ側の資料として参照、引用に用いた。本論文内で引用した場合には、それぞれの参照番号に加えて原稿に振られているフ

¹⁴ オズボーンは、“the Baroness expressed herself in conversation, she wrote with difficulty. Composition was a labour to her. She took infinite pains in framing her many important letters to the press.” (*Osborne Papers*, Vol. IV, Add. MS. 46405A, f. 153) とも述べている。これらのことから、書くことはクーツにとって困難なことだったことがうかがえる。

オリオ番号 (f., ff.) を記している。また、ディケンズ側の資料としては、ディケンズからクーツへ送られた約 280 通の手紙を中心に、クーツのガバナネスであったハナ・メレディス (Hannah Meredith) 宛のものや後にメレディスの夫となるウィリアム・ブラウン (William Brown) 宛ての手紙も含めて、ディケンズがどのような意図をもってこの慈善に賛同し、自身の方針を築き貫こうとしたのかを検討することとした。そして、それらの伝記的な資料をもとに、作品の分析、あるいは比較考察を行った。

第一章では、本論の礎石となるディケンズとクーツの出会いからユーレイニア・コテッジ設立にいたるまでの歴史を辿る。二人の境遇の違いや思惑の相違が唯一無二の施設造りへと発展した経緯と、慈善に対する両者の方向性をクーツの側の資料やディケンズの書簡、伝記、エッセイなどの解説を通して跡付ける。そして、第二章からは、ディケンズがユーレイニア・コテッジの設立と運営に関わった期間に執筆刊行された長編小説を執筆時代順に取り上げながら、その慈善事業での経験が、彼の作品や思想にどのような影響をもたらしたのかを考察する。第二章の『ドンビー父子』では、男子の家督相続を固持するドンビー家のお家騒動を背景に、旧弊な主人ドンビーと彼を脇で支える、あるいは彼と対立する女性たちの力に注目する。女性が体現する新たな力にどのようにうまく折り合いをつけられるのかが問われるこの物語を、ユーレイニア慈善の資金提供者クーツとの間で生じていた作家の立場の一種の投影と見て、伝記的事実との関連に注目しながら考察を行う。第三章の『デイヴィッド・コパフィールド』では、

主人公デイヴィッドの成長に寄り添う二組の家族の苦難に注目する。堕ちた女性となったエミリーやマーサ、さらにはデイヴィッドの父親代わりであったミコーバーがオーストラリアへ移住する結末と、ユーレイニアで実施されていた海外移住、そして当時のオーストラリアの状況を照らし合わせながら、楽観的すぎると評される物語の結末の意義を考察する。第四章の『荒涼館』では、罪の子の烙印を負う主人公エスタの贖罪の可能性を売春婦の更生を目指したユーレイニアの運営方針との関わりに注目して考察する。ヴィクトリア社会において、贖罪を通して幸福な未来を手にすることは許されるのだろうか。『荒涼館』は二人の対照的な語り手が交互に物語を語るという特異な形を持つ。この物語に設定されている二人の語り手に、ユーレイニア慈善におけるディケンズとクーツの見解がそれぞれ投影されていることを読み取りながら、贖罪の意義と可能性について考察する。第五章『ハード・タイムズ』では、事実一辺倒の教育システムに焦点をあてる。人生で必要なものは事実だけと公言する校長の支配下で教育を受けた子どもたちに対する教育の弊害はどのように出てくるのだろうか。ディケンズが親として自身の子どもに対して勧めていた教育と、自らが考案し施行していたユーレイニアの更生プログラムを物語の教育システムとを照らし合わせながら考察し、ユーレイニア慈善における教育の意義を考える。第六章の『リトル・ドリット』では、紳士たちの施す慈善が実を結んでいない点に注目する。この側面を、ユーレイニア慈善におけるクーツとディケンズの、それぞれの慈善の在り方とそこに潜む作家の矛盾や幻滅などと比較しながら、入居者たち

の手紙をもとに二人の慈善の効果について分析し、ディケンズがユーレイニア慈善から撤退した理由を考察する。

このように、本論文では、ディケンズがユーレイニア慈善に関わった時期に書かれた『ドンビー父子』から『リトル・ドリット』に至るそれぞれの作品を、ユーレイニア慈善との関わりを通して執筆年代順に検討することで、個々の作品の特質や社会的なテーマの発展を追い、慈善活動が作家の社会意識のみならず、創作活動にもたらした可能性とその限界を明らかにしたい。

第一章

ユーレイニア・コテッジ (Urania Cottage, 1847-1862)

—— ディケンズとクーツの慈善 ——

エドウィン・チャドウィック (Edwin Chadwick) が公衆衛生の改革を推し進めていた 19 世紀中ごろ、英国社会は売春婦たちを脅威とみなしていた。売春は、当時違法ではなかったが、折しも衛生問題が叫ばれていた時期でもあり、医者であり医療文献の著者でもあったウィリアム・アクトン (William Acton) によると、売春婦たちは“Un-English”で“Un-Christian” (5) だと敵対視する偏見が社会に蔓延っていたという。¹ 彼女たちは、政治的側面からは性病の蔓延が軍の弱体化につながり大英帝国の後退を招くと問題視され、道徳的側面からは自身の体をお金にするというのは最悪、最低の行為だと忌み嫌われていた。1785 年には、その数はロンドンだけで約 5 万人から約 8 万人と発表された。²

* 本章は、『神戸市外国語大学研究科論集』第 18 号 (2015 年) に掲載された論文「Urania Cottage —ディケンズとクーツの慈善—」を補正、加筆したものである。

¹ 1824 年の浮浪者取締法 (The Vagrancy Act) や 1839 年の首都警察法 (the Metropolitan Police Act) から、売春は路上生活や迷惑行為として取り締まりが行われた (Weeks 104)。

² Thames Police Court に治安判事として着任した Patrick Colquhoun がロンドンの売春婦を約 5 万人としたのに対し、The Bishop of Exeter と A Society for the Protection of Young Females による調査では約 8 万人だった。じつは、これらの数字は包括的なものではなく、たとえば、生活苦から不定期に売春をする場合は含まれず語弊を招きかねないことも当時から指摘されていた (Acton 15)。アクトンはさらに、思春期を過ぎた女性たちの 12 人に 1 人が“the path of virtue”から外れていることを、1851 年のイギリスとウェールズの未婚女性の数と生まれた子どもの数から算出し紹介している (18)。Jeffrey Weeks は、当時『ウエストミンスター・レビュー』誌 (*Westminster Review*) が、売春婦の数を国全体で 5 万人から 36 万 8 千人の間

そのような状況下にあつて、売春婦の更生施設の第一号となったロンドン・マグダレン・ホスピタル (London Magdalen Hospital) は、1758 年に社会改革者として有名だったジョナス・ハンウェイ (Jonas Hanway) とロバート・ディングリー (Robert Dingley) が中心となって設立した施設で、その根底には、売春婦たちは貧困の被害者であり回復可能といった視座を持ち、設立当初より温情方針が説かれた。³ 設立後 3 年間で 300 人近くが入居し、半世紀後に入居者は 3,865 人にまで達した。その他、1787 年にはロック・アサイラム (Lock Asylum)、1807 年にはロンドン女性刑務所 (London Female Penitentiary)、1829 年には、マリタイム・ペニテント避難所 (Maritime Penitent Refuge)、そして 1835 年には、若い女性たちの保護と子どもの売春防止のためのロンドン協会 (London Society for the Protection of Young Females and Prevention of Juvenile Prostitution) など、売春婦の更生施設は次々と設立され (Mahood 75)、1856 年には 60 施設、1900 年までには 300 以上の女性の避難所が国内に存在したという (Finnegan 8, Prochaska 188)。この増加は、売春がすでに社会問題として当時のイギリスで表面化していたことを示す。

一方で、こうした施設の運営は多くの場合が人々の慈善、つまりチャリティに依っていた。チャリティには資金繰りといった切実な問題が常につきまとう。施

で掲載したことを紹介している (105)。

³ 病院には、“In their work, as in every other circumstance, the utmost care and delicacy, humanity and tenderness will be observed, that this establishment may not be thought a house of correction, but a safe treat from their distressful circumstances.” (*Magdalen* 2) と掲げられていた。

設の存続には「寄付金」が欠かせず、資金を生み出すためには、売春婦への敵意を取り除き彼女たちを感傷的な対象に仕立てて、人々の同情と思いやりを募ることが肝心だった (Bristow 67)。じっさい、売春婦たちの更生に携わり施設の運営に影響力のあったスティーブソン・マックギル (Stevenson MacGill) は、彼女たちの忌まわしくて衝撃的な事実は周知される必要などなく、市民は哀れみだけを寄せればよいと主張していた (Mahood 56-57)。なぜならば、市民の哀れみを得られず、施設が資金繰りに詰まると、それまで供給してきたことは廃止されるよりないからだ。ロンドン・マグダレン・ホスピタルも 1790 年代になると福音主義者の影響も重なって職業訓練は廃止され、入所者たちは最も利益率の高いとされた「洗濯」に従事することになった (Walkowitz 221)⁴ が、このような移行は、慈善が当事者の利益を真に考えるという本来あるべき当事者とのつながりを断ち切って、偽善へと化してゆく境目を象徴的に表している。

当時多くつくられた売春婦たちの慈善施設のなかで、作家チャールズ・ディケンズと資産家で慈善家のアンジェラ・バーデット＝クーツ (Angela Burdett-Coutts) が設立したユーレイニア・コテッジ (Urania Cottage) は、特異な存在と言える。先ず、発案者で財源を担うクーツは、当時ロンドンで最も有力な銀行のひとつであったクーツ銀行 (Coutts & Co) の後継者で、準男爵のサー・フランシス・バー

⁴ 18 世紀に広がった啓蒙運動では、「白」が完璧で汚れのない象徴的な色として用いられた。フランス革命やアメリカ独立運動を支持し、奴隷廃止運動に積極的に携わった Josiah Wedgwood は、白の陶磁器を家庭内に普及させることで人々の啓蒙を図った。これらを背景に「洗濯」は“cleansing ritual”として神聖化された (Bristow 71)。

デット（Sir Francis Burdett, 5th Baronet）を父に持つ歴代領主の家柄であった。一方のディケンズは、ロンドンを実際に歩き、社会の現状や時代の風潮をつかみとる現実感覚を携えた作家として、すでに高い名声を築いていた。この二人が手を結ぶことで、資金繰りの心配なく、売春婦たちへの現実的な対応が期待できたのである。

本章では、二人の出会いからユーレイニアの設立に至るまでの経緯を追い、更生施設の設立をめぐるディケンズとクーツの協力関係とその背後に存在した両者の対立に焦点をあてる。そして、二人の境遇に基づく相違がこの施設にそれまでの売春婦保護施設にはない「更生施設」としての特質を生み出したことを、社会的背景に沿って明らかにしてゆきたい。

1. 運命的な出会い－意志の共有

二人の出会いについて、ディケンズは自分の生まれた日は金曜日で、何か大切なことはいつも金曜日に起こることから、金曜日であったことにちがいないと確信している（*Letters* 8: 432）。⁵ ここでは、敢えてディケンズがクーツ銀行に1837年11月に口座を開設したことから顧みたい。当時、ロンドンではロスチャイルド銀行（N M Rothschild & Sons Bank）、ベアリングス銀行（Barings Bank）や

⁵ 二人の出会いについて、Edgar Johnson は、ディケンズが未だ報道記者として働いていた1835年ごろ、夫妻でクーツ家に招待されたと記している（3）。一方、Clara Burdett-Patterson は、1839年の初め頃までクーツはディケンズにおそらく会ってはいなかっただろうと記している（142）。このように異なる記述が見受けられるのは、ディケンズ自身が「金曜日」と、曜日だけ主張してそれ以外は覚えていないため（*Letters* 8: 432）。

ドラモンズ銀行（Drummonds Bank）なども、クーツ銀行と肩を並べていた。このような選択枠のなかで、クーツ銀行をディケンズが選んだのは何故か。

ディケンズが、少年期のころに体験した辛い日々は序章にて述べたとおりであるが少し掘り下げて見てゆきたい。ディケンズが働いていた靴墨工場は、当時は、未だ設立者で靴墨の製法を発明、開発したジョナサン・ウォレン（Jonathan Warren）の名称で営まれていた。設立当初は、兄弟でパートナーシップを結んでいたが、それぞれに独立し、次の世代ではライバル会社となった。ジョナサンの甥にあたるロバートが経営するロバート・ウォレン（Robert Warren）は、大きな成功をおさめ、当時はとても有名だった。⁶ このロバート・ウォレンの工場は、ストランド 30 番地（30 Strand, London）に所在しており、そこからベッドフォード通り（Bedford Street）を通って、ディケンズが働いていた工場、チャンドス通り 3 番地（3 Chandos Street）にたどりつく。これらストランド、ベッドフォードとチャンドスは隣接しており、徒歩だと 5 分から 10 分ほどだろう。後に、ディケンズは、トラウマからか、このロバート・ウォレン工場からは靴墨の匂いが漂うので反対側の道をあえて通ったという。⁷ クーツ銀行は、じつはこのロバート・ウォレン工場に隣接するストランド 59 番地に所在していた。1692 年にスコットランドの金細工職人だったジョン・キャンベル（John Cambell）が創設し、

⁶ ディケンズにこの靴墨工場の話が持ち込まれたのは、家族の知人で軍の医者であった Dr Matthew Lamert(e)の息子 James Lamert(e)の紹介による。ディケンズは、液状の靴墨が入ったボトルのラベル貼りをしていた。当時のディケンズの靴墨工場の足跡は Foster の“Hard Experiences in Boyhood 1822-4” *The Life of Charles Dickens* (27-50) を参照。

⁷ Ibid.

設立当初から三王冠印 (Three Crowns) のロゴマークを掲げる王族ゆかりの銀行である。銀行へ出入りする紳士たちやこの三王冠印のロゴは、ディケンズの視野に必ずや入っていただろう。生活が一転し絶望的な状態にあったディケンズにとって、クーツ銀行へ出入りする紳士たちの姿は憧れではなかったか。

加えて、このクーツという女性も、長子相続制が当然の社会にあって、23 歳にして祖母のセント・オルバンズ公爵夫人 (Duchess of St Albans) から大きな財を譲り受け、女性でありながら公的な領域で発言権を持つといった当時男性にのみ与えられた特権をも共有する極めてめずらしい存在であった。小説家としてこれまで多くの個性豊かなキャラクターたちを次々に生み出してきたディケンズにとって、このような運命を背負った女性との出会いは、彼の創作にも大きな刺激を与えたと考えられる。じっさい、クーツ家に深く関わる女性たちも、ディケンズ作品に登場して、新たな女性像の造型に寄与している。⁸

他方、急進派の政治家であったクーツの父バーデット卿は、議会報道記者として下院の傍聴席にいたかつてのディケンズの姿を覚えていた (Patterson 142)。クーツ自身のディケンズとの交友は、1839 年から 41 年ごろ、銀行の共同経営者の一人であるエドワード・マジョリバンクス (Edward Marjoribanks) を介して始まったが、⁹ クーツの姪のクララ・バーデット=パターソン (Clara Burdett-Patterson)

⁸ たとえば、『ドンビー父子』(1846-48) の主人ドンビーに身分や性差を超えて率直に意見する元気な Susan Nipper は、クーツ家のメイドでありながらその才を発揮し、クーツの祖父である Thomas Coutts の最初の妻となった Susan Starkie の外見や性格の特徴までよく似た造型である。Starkie は、クーツ銀行の発展に大きく貢献した女性でもある (Healey 98)。

⁹ クーツの伝記を書いた Diana Orton によると、この口座開設からディケンズを顧客に迎え

によれば、この頃のクーツの手紙は、ディケンズに対して“My dear Sir”という呼称を用い、未だ形式的だった。¹⁰ その後、徐々に親交を深めてゆき、二人の親密性は 1846 年ごろには固まっていたという (142)。これは、ユーレイニア慈善設立へ向けて動き出した時期でもある。クーツ親子は、ディケンズの作品が随分なお気に入り、とくに『オリヴァー・トウィスト』(*Oliver Twist*) はディケンズとクーツ家をつなぐ懸け橋でもあった。バーデット卿は 1834 年施行の新救貧法 (Poor Law Amendment Act) を、富裕層と貧困層との格差を広げ、雇用主と労働者の関係を悪化させる悪法と見て激しく異を唱えた。この思いは娘にも引き継がれ、彼女も生涯にわたって「院外給付」を廃止したこの改正法に反発を示した (*Osborne Papers*, Vol. VII, Add. MS. 46406B, f. 141)。新救貧法は、「与えると働かない」、つまり、貧困の原因は与えることにこそあるという主張をその根底に持つ (Orton 152)。この新救貧法に、ディケンズもまた反発し、救貧院で生まれた少年を主人公とする作品『オリヴァー・トウィスト』で、救貧院の院内救済のみと定めたこの法を非難したのであった。ここに、クーツ親子は、新救貧法以前の慈悲の姿、つまり富裕層と貧困層の本来的な「つながり」の形をみたのだろう。

たことを共同経営者の Edward Marjoribanks がクーツに報告し二人の交流が開始された (Orton 59)。

¹⁰ House 他編集の *The Letters of Charles Dickens* によると、二人の交流を示す最も古い記録に、1839 年 7 月 1 日付の手紙がある。これはディケンズがクーツからの招待を断った形式的な短い返信 (*Letters* 1: 559) で、同月内の次の招待では形式的な短い返信を持って受けている (*Letters* 1: 566)。このことから二人は面識を持ったことが示唆されるが、その後も招待状と返信といった形式的なやりとりが続き、じっさいに個人的な手紙として記録されているのは 1841 年 1 月 18 日付けのものからである (*Letters* 2: 188-189)。

じっさい、クーツは、1846 年春、ディケンズに更生施設の創設を提案する際、身を持ち崩してしまった若い女性たちが身を寄せることのできる避難所のような“*Asylum*”を設立したいと、作者自身の作品に用いられた言葉遣いを巧みに持ち出している (*Letters* 4: 552)。この“*Asylum*”という表現は、『オリヴァー・トウィスト』でブラウンロー氏が売春婦のナンシーに助けを申し出た際に提案する“*quiet asylum or some foreign country*” (388) を思い起こさせるからだ。自らが考案した慈善の形を示すのに、売春婦が登場するディケンズの作品『オリヴァー・トウィスト』に言及することは、クーツにとって、互いをつなぐ絆の確認の意図があったのではないか。生涯の出会いとなる二人の慈善の幕開けはここから始まった。

2. ユーレイニア施設創設に向けて－異なる思惑

クーツから更生施設の設立と運営に関する依頼を受けたディケンズは、施設の設立には惜しめない協力を表明しているものの、5月26日付の返信によると、じつはクーツが考案した施設の基本的な概念には同調していない。

I do not think it would be necessary, in the first instance at all events, to build a house for the *Asylum*. There are many houses, either in London or in the immediate neighbourhood, that could be altered for the purpose. (*Letters* 4: 552)

注意したいのが、クーツが提示した堕ちた女性たちの“*Asylum*”としての施設と

いう案に代えて、ディケンズがこれでは他の巷に多く在る他の施設と変わらないと何か別の案を示唆していることだ。加えて、同じこの手紙でディケンズは施設の規模を制限することや、だれにとっても気軽に門をくぐれる施設にするなど独自の考えも打ちだしている (*Letters* 4: 552-56)。クーツは、社会問題について全く無知ではなかったが、女性であるため、ディケンズのように外を歩いて現実を直視することはもちろん許されていなかった。彼女が社会における貧困状態を把握する拠り所としたのは、新聞と、慈悲を求めて毎日のように夥しく彼女に届く手紙だったという (*Osborne Papers*, Vol. VII, Add. MS. 46406B, f. 135)。

そもそもこの二人の間で共有されている“*Asylum*”とは一体どんな施設だったのだろうか。メアリー・ピース (Mary Peace) によると、売春婦の更生施設の第一号となったロンドン・マグダレン・ホスピタルは18世紀文学にすでに登場し、様々な小説で言及されたが、小説内では“*Place*”、“*House*”、“*Hospital*”、“*Charity*”、そして“*Asylum*”と作品によって施設の呼び名が異なるという(142)。¹¹ そして、ピースはそれらの言葉には互換性があるが同じ売春婦の更生施設でも、それらを“*Hospital*”と呼ぶか“*Asylum*”と呼ぶかでは、明らかに施設の特質による明確な区別が設けられていたと指摘する(142)。つまり、“*Hospital*”は主に性病の治療や孤児たちへの人的支援を行う場を意味し、一方、“*Asylum*”は危険な組織や世界

¹¹ たとえば、ケント州カンタベリー (25 High Street, Canterbury, Kent. CT1 2BD) に所在する1190年に設立されたイーストブリッジ・ホスピタル (Eastbridge Hospital) など、*Hospital* の名称であるが病院ではなく、土地柄「巡礼者の宿」であった。今は「憩いの場」として所在しその名称も変わっていない。

からの避難場、つまり社会復帰を進んで手助けする場ではなかったとされる。とすれば、おそらく自分の作ろうとする施設を“*Asylum*”と呼ぶクーツが、売春婦たちの保護を念頭に置いたのに対し、そのクーツの“*Asylum*”という提案を拒絶したディケンズは、売春婦の保護ということを、施設運営に関する目的の中心に据えてはいなかったということが推察される。じっさい、ディケンズは、後にこの施設を“*Asylum*”ではなく“*Home*”と呼び変えた (*Letters* 5: 28)。

人間の更生を目的とした慈善は作家ディケンズにとっても初めてのチャレンジだったはずだ。先ずは、親交のあったミドルセックス矯正院のチェスタトン施設所長 (G. L. Chesterton, the governor) から、売春婦たちの更生についてアドバイスを受けている (*Letters* 4: 554)。なかでも、ディケンズが懸念を抱いたのが以下の点である。

[...] very many of these unfortunate women are constantly in and out of Prisons, for no other fault or crime than their original one of having fallen from virtue. Policemen can take them up, almost when they choose, for being of that class, and being in the street; and the magistrates commit them to jail for short terms. (*Letters* 4: 554)

彼女たちに対する不当な取り締まりが蔓延しているなか、ディケンズは、チェスタトン施設所長から肝心なことは彼女たちの出所後の行き先であるとの助言を受け、ミドルセックス矯正院ほか、ブライドウェル監獄のトレイシー所長 (Lieutenant Augustus Tracey, the governor) から、更生の見込みがありそうな受刑

者たちを推薦してもらうことになったのである (*Letters* 5:28)。ディケンズは彼女たちと直接面会して、彼女たちの生い立ちやこれまでの生活についての聴き取りを行い、ケース・ブック (the Case Book) と称されるノートに綿密に付けていた。しかし、ケース・ブックは、残念ながら見つかってはいない (Hartley 137)。

ディケンズは、運営方法の基盤には、“a knowledge of human nature”が不可欠であると強調し、当時、海軍将校で刑罰改革者だったアレックスサンダー・マクノーキー (Captain Alexander Maconochie) の「マーク・システム」(The Mark System) を取り入れることを主張した (*Letters* 4: 552)。このマクノーキーのマーク・システムは、受刑者たちの再犯防止を目的に導入された画期的なシステムで、独房に収監する代わりに、囚人に労働を推奨するものだった。マクノーキーは、国の刑罰機構のほとんどが遡及的な罰則の体制をとっており、先を見据えていないと警告する。そして、刑務所は個人を罰するより個人を改善させる施設であるべきで、有罪判決を受けた囚人を収監する期間は、囚人の罪状を追求するより、当事者の努力にまかせた生活をおくらせることによって本人の向上を目指すことが、結果的に社会の安定につながると主張したのだ。じっさい 1845 年 1 月このシステムにより受刑し釈放された元囚人 920 名の再犯率は、2%だったという (Maconochie 7-10)。

マクノーキーの体制は犯罪者の更生を目指したものであったが、これを利用すれば売春婦たちの再犯を防ぐことができる、とディケンズは考えたのだろう。良いふるまいには点数が加算され、日々の努力次第でそれが増える。たまった点

数はお金に換算され退所時に渡された。自らの努力で得る報酬に喜びを感じさせ、懸命に働こうとする気持ちを誘引する。彼女たちの成長を期待するこの姿勢は、ディケンズが尊重した自助の精神にも通じるだろう。加えて、過去との断絶は彼女たちが古い仲間たちと決別し、新たな人生を生き直すことにつながるのだ。

しかし、当時、女性が仕事をする事への懸念は非常に大きかった。特に工場での労働は女性の売春を促進させるというのが、ロバート・オーウェン（Robert Owen）に代表される社会主義的陣営の見解だった（Morton 21）。女性が「売春婦」へと堕ちてゆく過程を「労働」との関係から分析したウィリアム・ローガン（William Logan）は、その原因を大きく2点あげている。まず、旅館、パブ、酒店など酒類を扱う仕事や、工場や倉庫など男女が一緒に働いている職場、そして邸宅などの屋敷内では必ずと言っていいほど「誘惑」が起こるという。もう1点は、女性たちが朝から夜遅くまで、過酷な状況下でどれほど勤勉に正直に働いても自ら生計を立てることは叶わず、自己卑下といった精神的な苦痛に見舞われて自暴自棄に陥るというのである（53）。

ユーレイニアでは「メイド」あるいは「お針子」としての労働が奨励されていた。しかし、ローガンによると、立派なお屋敷にメイドとして働いてもその息子や主人からの「誘惑」への懸念、また、お針子で雇われる場合も、雇い主は顧客からの低価格の要求に応じることが通例で、そのしわ寄せはお針子の賃金へと反映されることを指摘している（224）。ディケンズは、自身が“*Asylum*”から呼

び変えた“Home”に敢えて「労働」を持ち込むことで、「更生」の境界を曖昧にし、施設のあり方を危うくする矛盾を犯していたのだろうか。

たしかに、レオノア・デヴィッドフとキャサリーン・ホール（Leonore Davidoff and Catherine Hall）が当時の中産階級の価値観を詳細に綴った *Family Fortunes* には、ホームとは女性を「誘惑」から守る役割のものという定義がある（114-18）。しかし、ディケンズにとってのホームとは、述べてきたように、そしてクーツへの手紙に明言するとおり、“self-respect”や“self-restraint”（*Letters* 4: 552）を育む場であった。この断固としたホームへの思いはおそらく彼自身の履歴に基づくゆるぎない決意に呼応する。それは、靴墨工場から解放されたときの思いであり、ジョン・フォスター（John Foster）に“everything was possible to the will that would make it so”と語り、“self-imposed burdens”（52）を自らに課すとした決意である。ハンフリー・ハウス（Humphry House）は、ディケンズの宗教は「信仰」ではなくて懸命に「仕事」をすることだったと分析している（121）。これは、マクノーキーの“As a rule, reform can only be attained through a severe training”（192）という主張に相通ずるものでもある。

概して、マグダレンなどの施設では、問題を起こした女性たちを厳しい監視体制におきモラル教育やトレーニングを施して、中産階級の性規範や職業規範に沿うことを強いた。しかし、貧困から児童売春などに走らざるを得ない貧困層の人々の事情は、中産階級の性規範ではいかにしても解決できないものだ。そのような不条理な境遇に抗えない彼女たちを、ディケンズは、むしろ不遇な自分自身

の幼少期の記憶に重ねて、中産階級の一般的な規範とは異なる、ジェンダーを超えたより実地的な観点から捉えていたとは言えないだろうか。つまり、彼は、ユーレイニアの女性たちを、先ずどのような形であっても「売春」から隔離させ、読み書き算術といった教育と自立して生活できる術を与えようとしたのだ。この思いは何よりもディケンズが「売春」が横行するピカデリー (Piccadilly) やストランドといった中心地からかなり距離を置く郊外のシェパーズ・ブッシュ (Shepherd's Bush) にユーレイニア・コテッジの所在地を選んだことに反映されてもいる。

一方、クーツはこのマクノーキーのシステムに終始難色を見せる。そのことは、ディケンズが、1847 年 10 月に一旦 “I have avoided Maconochie's ideas, as they hardly seemed to meet with your full approval” (*Letters* 5: 28) と引き下がった書簡からも明らかである。1846 年 5 月の最初の返信でマーク・システムを紹介してから実に 1 年以上も経っており、その間の再三にわたるディケンズの説得にもクーツは納得しなかったと見える。これら二人の根本的な相違は解消されることなく、ユーレイニア・コテッジは 1847 年 11 月に開設した。

ロンドン・マグダレン・ホスピタルやその他の施設では、「誘惑」、つまり、外への欲求を抑えきれなかった女性たちには頭髪剃りが施された。髪が伸びるまで、彼女たちは自身の犯した過去の罪に向き合う。すると、おのずと自己内省へと導かれ、効果を生んでいたというのである (Mahood 79)。¹² これは、過去を

¹² 50 名中 2 人の再犯 (4%) だった。

振り返らず未来を見据えるマクノーキーの考えに相反するもので、じつは、クーツは、マクノーキーのシステムを支持するディケンズとは対照的に、この過去と向き合うことを重視していた。

クーツの秘書を長期にわたって務めていたチャールズ・オズボーン (Charles Churchill Osborne) によると、クーツの慈善活動は、クーツの祖母であり彼女に大きな遺産を遺した元女優のセント・オルバンズ公爵夫人に学んだとされる (*Osborne Papers*, Vol. IV, Add. MS. 46405A, f. 97)。さらに、オズボーンは、彼女が 16 世紀にチューダー家によって制定された英国独自の教会に、プロテスタンティズムの備わった英国人としての誇りと尊厳を抱き、そんな彼女を、“unbending Protestantism” (*Osborne Papers*, Vol. IV, Add. MS. 46405A, ff. 174-175) と評している。クーツは、他の宗派にも寛大であったが、彼女自身は 40 年間にも及ぶ熱心な福音主義者であり、その影響をメレディスから受けたことは間違いないとダイアナ・オートン (Diana Orton) は断言している (37)。元々ジョン・ウェスリー (John Wesley) による “Evangelical Revival” の熱心な聴衆であったメレディスの両親は、娘にも同じ教えを伝承した。強い信仰心のもと育ったメレディスは、クーツが 12 歳のとき彼女の両親に家庭教師として雇われ、以後、二人の間には強い信頼関係が生まれ、メレディスを除いてクーツには親しい同性の友人は出来なかったとさえ言われた。ユーレイニア慈善を決意する 3 年前 (1844 年) には、クーツの両親も他界し、メレディスとの堅い絆は 1878 年メレディス (後に Brown) がその生涯を終えるまで続いた (Orton 160, *Osborne Papers*, Vol.

IV, Add. MS. 46405A, f. 78)。クーツの慈善とは、宗教からの教えによるところが大きい。したがって、クーツにとって最優先されるべきは、職業教育ではなくて「道德教育」であった。科学的に実証されるいわゆる俗的なマクノーキーのシステムが再犯防止や男性からの誘惑への拒絶につながると彼女は考えず、モラルによって売春婦たちに自らの非を悟らせることが正道と信じたのである。自己内省なしに自己改善などありえないという考えがそこにはあった。

キャスリン・グリードル (Kathryn Gleadle) は、ディケンズのユニテリアンの (Unitarian) アプローチとクーツの福音主義的 (Evangelical) アプローチの違いが、両者の立場の対立を生んだと考察する (132)。前者はたとえば、神学者で哲学者のウィリアム・ペイリー (William Paley) による “God was not interested in chasing anyone anywhere and instead stood as an ethical anchor securing human happiness.” (Knight 53) という解釈にもとづくもので、神の存在をどのように捉えてどう解釈するのか、自らの結論を導くためには、個人が自由に質問をして議論を交わすことが肝心で、そのためには幅広い教育が必要となる。¹³ ディケンズは、自身の辛い体験を経て、現状を自ら修正、改善する意志を貫き人生を切り開いた。このような作家の思いは、ユーレイニアの日課に反映されているように思われる。入居期間は 1 年、ディケンズは、彼女たちに朝 6 時の起床から夜 10 時の就寝まで、細かく正確に刻まれたタイムテーブルを用意した。施設を訪問し

¹³ このアプローチは、叔母から罪の子の烙印を負わされるものの、学校教育や人々との交流を経て、自ら自身に罪はないと結論を導きだす『荒涼館』の主人公エスタの造形にうかがえる。本論文第四章を参照。

ない日であっても、ディケンズは彼女たちの行動を 30 分置きに把握できたほどの綿密さをもって管理していた (Hartley 57)。

Order, punctuality, cleanliness, the whole routine of household duties – as washing, mending, cooking – the establishment itself would supply the means of teaching practically. (*Letters* 4: 554)

あくまでも実用性を考えた日課は、礼拝が朝 (7:45) と夜 (20:30) の 2 回、読み書き算術といった学習には午前の 10:30-12:30 までの 2 時間が費やされ、午後からは、針仕事や運動などの訓練が組まれた。パンも入居者たちが焼き、掃除、清潔を心がけるなど、将来彼女たちが家庭に入ることを考慮して日課が組まれている。注意したいのは、秩序 (Order) と時間厳守 (Punctuality) が強調されていること、そして、学習や訓練に加えて昼と夕の食事の前後には、それぞれ 30 分と 1 時間の娯楽の時間も設けられ、音楽が学習に取り入れられたことだ (Janes 35-57、武井 191)。従来の更生施設では、同じく秩序や時間厳守の姿勢のみならず、規則の多さと厳しさ (違反した場合には重労働などの罰則付) に加え、完全な「沈黙」が常に要求されていた。

リンダ・マフード (Linda Mahood) は、グラスゴウの更生施設 (the Glasgow asylum) の典型的な日課を以下のように記している。朝 6 時から洗濯、7 時から仕立て・裁縫の作業が始まり、礼拝を終えてから 8 時から 9 時に朝食をとる。その後は、昼食の後に 13 時から 14 時まで洗濯や縫い物などの作業に従事し、

夕食は7時から8時だ。食事は経費節減もあって入居者たちで工夫、準備する。そして、10時半の就寝まで再度1、2時間ほどの作業と、字を読むことが出来ない入居者たちは1時間が学習に充てられ、読めるようになれば聖書が手渡された(79-80)。ユーレイニアとの大きな違いは、ディケンズが学習を午前中に取り入れ、針仕事などの作業を午後に回したことに對して、この施設では、午前午後ともに作業に没頭させられ、読むことが出来ない人を対象に就寝前の1時間が学習に割り当てられていることだ。これでは「施設」というよりも「工場」といった色合いが強い。売春婦たちの更生を目的とした施設でありながらも道徳や読み書きの教育には殆ど時間が割かれておらず、作業施設の様相を帯びてしまっていることは、彼女たちの再犯防止を目的にしているというよりも、あくまでも施設側を中心とする運営形態であったことがうかがえる。

教育制度に関するディケンズの熱意はよく知られている。たとえば、『ドンビー父子』(*Dombey and Son*)では、貧民の息子ロビンは、慈善学校に通ったせいで悪事を働くようになり、ドンビー家の跡取り息子ポールの場合は、彼の死を急がせる要因の一つとして、ブライトン(Brighton)の寄宿学校の無茶な詰め込み式教育が描かれる。このように、ディケンズは常に作品のなかで教育システムを諷刺の対象とするのであるが、そんな作家が唯一称賛した教育制度が、中等教育への新たな試みをマニフェストに掲げたユニテリアンのブルース・カッスル・スクール(Bruce Castle School)の取り組みだ。¹⁴ この学校の特徴は、生徒の個性

¹⁴ 同校が提供していた *Sketch of the System of Education, Moral and Intellectual, in Practice at*

に応じた教育を提供することを約束し、学ぶ科目も多様で、数学や代数、幾何学など実用性を目指したものを提供する。¹⁵ 注目すべきは、学習成果を図るために音楽を取り入れることが必須となっていること、また、生徒たちの成功の鍵は「時間厳守」にあるとされ、正確な時間配分の重要性は 19 条からなる「規範」のなかでも繰り返し説かれていることだ。ディケンズは、この学校の教育体制を、ユーレイニア慈善に携わる一年前、1845 年 8 月 17 日友人ウィリアム・マクレディ（William C. Macready）に送った手紙の中で“the only recognition of education as a broad system of moral and intellectual philosophy, that I have ever seen in practice.”（*Letters* 4: 357）と、称賛している。¹⁶

綿密な時間配分や音楽を取り入れるなど、これらのことを考慮すると、ディケンズがユーレイニア・コテッジのスケジュールを作成する際、おそらくこの学校の方針も参考にしたのではないだろうか。しかし、少年の育成を目的に掲げられたこの学校の半ば強制的な原則を、売春婦の更生に適用したディケンズが現実を正しく見ていたとは言い切れない。ブルース・カッスル・スクールの時間厳守は、学問上の目標を成し遂げるためのもので、かなり早い段階からの習慣づけが必要となるからだ。つまり、ディケンズの方針は彼女たちの境遇やジェンダーといった側面を顧みると、厳しいものだったのかもしれない。

Bruce Castle School を参照。

¹⁵ エチケットやマナーなど紳士の品性を重視するパブリック・スクールに対して、ブルース・カッスル・スクールは、実用性や自立性を中心に生徒の育成が図られた（Stewart 66）。

¹⁶ ディケンズの長男 Charley Culliford Boz Dickens の教育にもユニテリアンの教師を付けた（Gleadle 11）。

一方、クーツ的なモラル重視の姿勢のもとでは、原罪を強調する福音主義の考え方に従い、女性が救済されるには、信仰に全身全霊を捧げ女性としての責任を果たすことが唯一の方法とされた。ユーレイニアは更生施設であり、彼女たちが入所している期間はリハビリテーションであるため、物質的な見返りに喜びを見出すような影響を及ぼしてはならない。読み書きやメイドあるいはお針子などの職業訓練を習得し、退所後はその培った技量を持って「奉仕」に専念すること、それが彼女たちの贖罪にもなる。たとえ過酷な状況下に陥っても、徹底した道德教育こそが彼女たちの再犯を防止すると考えたのである。

ユーレイニアは、その他にも従来の施設と大きく異なった点として、海外移住が条件とされたことなどがあげられる。ディケンズが懸念していた彼女たちの悪循環を断ち切るためにはうって付けの場所でもある。移住先は、オーストラリア、南アフリカ、そしてカナダであった。とりわけオーストラリアは、まだまだ未開の地であった。英国国教会では、オーストラリアへ宣教師を送り、植民地でアングリカン・チャーチを設立することによりモラルの普及に努めた。その大役に、大きな資金援助を進んでしたのがクーツであった (*Osborne Papers*, Vol. VII, Add. MS. 46406B, f. 54)。彼女は、1847 年にオーストラリアのアデレード (Adelaide) と南アフリカのケープ (Cape Town) に、合わせて 35,000 ポンドを寄与し、それらはユーレイニアの女性たちの移住先となった。この海外移住の受け入れ体制まで整えることができたのは、やはりクーツの資金力であろう。ここに、慈悲を施すクーツとそれを受諾する側の将来をも見据えた彼女たちとの「つながり」が

示されている。

クーツとディケンズの根本的な対立の根源にあるのは、何を信じて生きることへの活力とするのかであって、現世的な救済が必要と考えるディケンズに対し、クーツは「信仰」という観念的なものを中心に据えた。独立独行のセルフメイドマンであるディケンズは、労働を聖と信じ、それによって現実的な報いを得た。それゆえ、それを可能にしてくれる自尊心を育む場としてのホームの役割をジェンダーの枠を超えて追求しようとした。しかし、クーツは、病気を癒し治すイエスの「奇蹟」を信じた。慈善を現実的なものにしようとするディケンズと抽象的な概念に頼ろうとするクーツが対照をなしていたのである。

中世のころ、「慈善」と「救済」は、目に見える相関関係にあった。慈善を施す者と施される者の距離は近く、施しを受けた側は、時には、与えた側の名を叫びながらその人の救済を祈ったという（Barber 1-3）。時代の流れと共に両者の関係は曖昧となり希薄になって、その断絶は 1834 年の新救貧法で決定的なものとなる。しかし、その連関を取り戻そうとして新たな形の慈善の提供をしたのが、それぞれの信念をぶつけ合いながら設立されたクーツとディケンズのユーレイニアだったのではないだろうか。¹⁷

ユーレイニア・コテッジ（別称ユーレイニア・ホーム）は、1847 年 11 月ロン

¹⁷ Edgar Johnson は、ユーレイニア・コテッジを“Although not the first enterprise of its kind, it was among the pioneers.”（78）と評価している。

ドンのシェパーズ・ブッシュ (Shepherd's Bush) に開設され、約 150 名が人生をやり直す機会を与えられ、1862 年にその幕を閉じた。ディケンズは閉鎖に至る 4 年ほど前に手を引いた。クーツの伝記を書いたダイアナ・オートン (Diana Orton) が“Dickens opened Angela's eyes and widened her sympathies” (59) というように、クーツは、受益者との「つながり」の必要性をディケンズに学び、慈善家としての名を築いてゆく。1887 年 5 月 9 日にエクセター・ホール (Exeter Hall) で開催されたクーツの慈善学校の記念行事では、クーツ自らがスピーチを行い、善行や勤勉さに賞品を授与したのである。¹⁸ これは、ディケンズのマーク・システムを発展させたもので、クーツがディケンズとの交渉から新たに学び取った要素と言えるだろう。ユーレイニアを通してクーツという女相続人からディケンズが受けた影響も大きい。彼女の大きな資金力は、ディケンズが理想に描いた慈善を可能にさせたと言えるだろう。さらには、ウィリアム 1 世 (別称 William the Conqueror, 在位 1066-1087) の時代にまで遡るクーツの父方の古い家系 (Orton 13)¹⁹ は、彼女に揺るぎのない堅固で安定した自己をもたらした。それは、時代の規範から外れたものでありながら、そうした女性の存在意識を実感したであろう作家は、従来のステレオタイプに当てはまらない女性のあり方を、作品をとおして模索、追求してゆくことになる。女相続人クーツの影響が表れる「世継ぎ」

¹⁸ 良い振る舞い (good conduct)、誠実 (honesty) そして 勤勉 (steadiness) が評価の対象となった (*Osborne Papers*, Vol. VII, Add. MS. 46406B, f. 14)。

¹⁹ クーツの父方 (Burdett) の先祖はウィリアム 1 世から土地を与えられ“prudent marriages”を通じて富と財の両方を獲得していった (Orton 13)。

をテーマとする作品『ドンビー父子』から見てゆきたい。

第二章

『ドンビー父子』(*Dombey and Son*, 1846-48)

—— 新旧の遭遇 ——

チャールズ・ディケンズは、売春婦の更生施設であるユーレイニア・コテッジの創設と同じ時期に、『ドンビー父子』の執筆、連載を開始した。翌月の1846年6月には、友人ジョン・フォスター (John Forster) に“I think the general idea of *Dombey* is interesting and new and has great material in it.” (462) と語り、彼がこの作品に新しい可能性を見ていたことが示されている。Hungry Forties と呼ばれる時代を描くこの作品は、後に彼の作家人生の分岐点と評され、作家の精神と時代背景のつながり、帝国主義についての見解、そしてジェンダーと資本主義の関連性など多様な観点から論じられてきた。¹ もちろんこの作品には、40年代の鉄道投機熱を揶揄するスタッグズ・ガーデンのように、当時の社会的現実の写実的な描写もある。しかし、それ以上にディケンズが本作品で注視するのは、当時のイギリス社会が過去の時代からひきついだ古い体質である。たとえば1834年の新救貧院法によって非人道的な施設と化した救貧院の実体や、日常的

* 本章は、『神戸市外大論叢』第5号(2015年)に掲載された論文「新旧の遭遇 - *Dombey and Son* とユーレイニア慈善」を補正、加筆したものである。

¹ 例えば G. K. Chesterton は“we can see the coming of a change,”と述べ、作品に現れた変化を読み取り (184-186)、Grace Moore は、ディケンズの帝国主義における見解には“sympathies”が見られると考察し (58-63)、Angus Wilson は、連載が開始された当初からすでに“a tremendous success”だったことに着目し、作品には“a great advance”が見られると、作家の財政状況の変化も含めた考察を展開している (205-211)。

に私生児が虐待され社会問題となっていたヨークシャーの寄宿学校など、当時の法律やシステムを直接批判していた『オリヴァー・トウィスト』や『ニコラス・ニコルビー』などの前期小説とは異なり、40年代というチャーチスト運動（Chartism）に代表される社会の変革期に書かれた『ドンビー父子』において、ディケンズは、むしろ過去から引き継いできた慣習や伝統といったイギリスにおける社会構造の根源をなす問題に視野を広げた。そして、その視点の変化が、ディケンズを創作上の転機へと導いたのである。そうした創作の転機において、ユーレイニア・コテッジの設立に関する経験はどのような役割を果たしたのだろうか。

物語は、ロンドンのシティにその名を轟かすドンビー父子商会の永続を望む、伝統的な家長ドンビー（Paul Dombey）と、その専制的な父親から女性ゆえに無価値な存在と拒絶されながら、ひたすら父を思う娘フローレンス（Florence）との父娘関係を中心に、商会と家庭という2つの「家（home/house）」の構築をテーマに展開する。次世代へのバトンタッチはどうなるのか。未来を託す相手は、女性でもいいのか。旧式な価値観の蔓延る英国の商会と家庭を舞台に、新旧の世代交代を主題とするこの作品には、ユーレイニアという売春婦のためのホームづくりと、事業の決定権を握る女相続人クーツ（Angela Burdett-Coutts）との葛藤を通して、家父長中心の社会を見直し、女性をも含めたホームとしての国の構築に思い至った、作家の意識の発展を読みとることができる。じっさい、この物語には『オリヴァー・トウィスト』のナンシー以来、しばらくの間登場人物として

直接描かれることのなかった売春婦が、アリス・マーウッド (Alice Marwood) という重要な役割を担う登場人物の一人として導入され、その転落の経緯から死に至るまでの人生が詳しく描写されて、ユーレイニア慈善を通しての売春婦の運命に対する作家の知識と興味の深まりを明らかにするのである。本章では、旧世代と新世代の交差に焦点をあて、新時代の到来を期待させる女性像を中心に、作家の社会意識に対するユーレイニア慈善の影響を考察したい。

1. 危うい旧世代

『ドンビー父子』の冒頭は跡取り息子の誕生を見守る父ドンビーの描写で始まる。息子はこの世に誕生して「48 分」、父ドンビーの年齢は「48 歳」(11)とするユーモアもさることながら、親子のつながりが金銭、あるいは数字にのみ還元される情の欠けた家庭のあり方が、ここで印象づけられる。小説冒頭から読者は、既に主人公の人生が半世紀近く経過した時点に立たされていることになる。そして、ドンビーという人間を形成してきた、物語では決して語られることのないこのおよそ半世紀に亘る時間こそが、待ちわびた跡継ぎ息子に対するドンビーの何ともぎこちない態度の根源にある。なぜなら、カムデン・タウンにおける鉄道敷設や鉄道投機の描写が明らかにするように、1840 年代のイギリスを舞台とする『ドンビー父子』において、物語の冒頭で 48 歳と紹介されるドンビーは、ジョージ 3 世から 4 世、ウィリアム 4 世を経て、1837 年のヴィクトリア朝へと、イギリスが大きな変化を経験した時代を生きてきたことに

なるからだ。とりわけジョージ王朝からヴィクトリア朝への移行は、様々な社会変革に加え、王から女王へという君主のジェンダーの転換もあった。

女王が君臨するヴィクトリア朝とは異なり、ジョージ王朝は基本的に男性的な世界だった。たとえば、ジョージ王朝を象徴する出来事のひとつに、フランスとの戦争（1793-1815）がある。愛国心の重要性が叫ばれ「アンチ・フレンチ」を合言葉に軍の増強が図られた。さらに、摂政皇太子の時代になると、バッキンガム宮殿の改築やウィンザー宮殿の再建が推し進められて、彼がブライトンに建設したロイヤル・パビリオン（Royal Pavilion）の煌びやかさに象徴される贅沢な生活様式が話題となった。²

鉄道の敷設といういわゆる 40 年代に特有の進歩的な社会現象を描きながらも、この戦争と金銭が支配する摂政皇太子時代の男性的な社会の名残りを『ドンビー父子』は描いている。とりわけ、ドンビー商会の長ドンビーは、“the house had been inhabited for years by his father, and in many of its appointments was old-fashioned”

(35) と描かれて、男系を中心とした母親不在の旧式な家長としてのあり方が強調される。そのことは、彼が常に愛国心の象徴ともいえる軍と同色の高価な青いコートに身を包み、“jingled and jingled the heavy gold watch-chain” (11) とその財力を表す金鎖の音を轟かすことから明らかだ。このドンビーの姿は、支配階級

² ジョージ 4 世は、政治には興味を示さず、数々の優れた芸術品のコレクターであり建築家やデザイナーのパトロンであった。常に、高級品や贅を追求し善しとする彼の生活様式は、特に厳粛なキリスト教徒から忌み嫌われたという（Plumb 158-78）。ジョージ 4 世のスキャンダルに関しては、ベイカー著、樋口幸子訳 95-141 に詳しい。

を主なメンバーとする排他的クラブ The Sublime Society of Beef Steaks を思わせる。そこでは、摂政時代の紳士 (Regency gentleman) の愛国心と反フレンチの表象に「ビーフ」を掲げ、集会では青いコートとベストの着用を義務付け、国家意識の称揚を図った (Arnold 31-32)。³ カトル船長 (Captain Cuttle) もまた青のユニフォームを着用し、バグストック少佐 (Major Bagstock) の顔色も愛国心と保守派の象徴である青が強調されるなど、多様な男性の登場人物が保守派を思わせる色彩を身に纏うことは、この物語世界に広く浸透する旧式の価値観の存在を読者に印象づける。

しかも、“The earth was made for Dombey and Son to trade in” (12) と描かれるように、ドンビーは商会の利益を何よりも重視し、貧民を忌み嫌って、自身の家庭から女性を排除し、乳母として雇ったポリー (Polly Toodle) でさえ、彼女の家族から引き離したうえに男性的な名前リチャーズ (Richards) に呼び変えてしまう。亡くなった妻ファニー (Fanny) は、ドンビーには絶対服従で、男の子を産むことを生きがいにしなければならず、6歳の娘は“a Bad boy” (13) と同じ無価値の存在でしかない。ここでは女性的なものは影を潜め、ヴィクトリア朝の理想とされた、女性の影響力が充満した温かい家庭は存在しない。

このドンビー家の状況は、カール・マルクス (Karl Marx) とフリードリヒ・エンゲルス (Friedrich Engels) が工業化の結果として提示した人間関係を思い起こ

³ ジョージ4世やクーツの父バーデット卿 (Sir Frances Burdett)、1815年のワーテルローの戦い (Battle of Waterloo) では同年齢のナポレオンを打ち破った軍人として知られる初代ウェリントン公爵アーサー・ウェルズリー (1st Duke of Wellington) などとも会員だった。

させる。⁴ 娘のフローレンスを“merely a piece of base coin that couldn't be invested”

(13) と言うドンビーは、いわゆる金銭的人間関係を家庭に持ち込んでいるのだが、じつはこの点に、ジョージ王朝からヴィクトリア朝に至る家庭観の大きな変容と、そうしたヴィクトリア朝的家庭観から疎外されたドンビーという存在の本質的なあり方が示唆されている。というのも、先の時代とは異なり、ヴィクトリア朝ではピューリタンの自助の生き方の上に一家団欒のマイ・ホーム主義が家庭生活の理想としてひろく定着し、たとえ王であろうと家庭内では夫としての役割を果たさなければならないという考えが主流となったからである。⁵ この一家団欒の理想に与しないドンビーは、一見したところ、摂政皇太子時代の道德的退廃とは対照的な、謹厳な価値観を持つ典型的なヴィクトリア朝的人物であるかのように見えながら、じつはヴィクトリア朝とは相容れない思考の持ち主

⁴ 「ブルジョワ階級は、どこであれ、支配をにぎるにいたったところでは、封建的で、家父長的でもあれば牧歌的でもあった一切の関係を破壊した。かれらは、人間を血のつながったその長上者に結び付けていた色とりどりの封建的きずなを容赦なく切断し、人間と人間とのあいだに、赤裸々な利害以外の、つめたい現金勘定以外のどんなきずなをも残さなかった。ブルジョワ階級は、家族関係からその感傷的なヴェイルを取り去って、純粋な金銭関係に変えてしまったのである。」(マルクス、エンゲルス 42-43)

⁵ こうした家庭像の変容を象徴的に表すのが、1820 年ジョージ 4 世がその妻キャロラインを不貞の罪で訴えた前代未聞の王室スキャンダルである。愛情のない政略結婚の解消を意図して王が起こした裁判だったが、王自身の派手な生活ぶりに違和感を持った教会の法廷は王の訴えを受けいれず、その翌年には王妃に対する訴訟が取り下げられた。しかし、王妃の私生活が露呈され醜聞に晒されたのに、王は無傷という不条理が保守派と急進派の政治的な対立に発展し、同時にそれは国民には道德心の問題として浸透した。王妃は 9 ヶ月後に 53 歳でこの世を去るが、世論は王妃に同情、ジョージ 4 世が夫の義務を果たし、真の英国の父になることを強く望んだという (Davidoff and Hall 150-55)。この世論は、ウィリアム 4 世とその妻に受けつがれ、1840 年に結婚したヴィクトリア女王とアルバート公もこれを継承し、その家庭がヴィクトリア朝の理想として中産階級に支持された。

といえる。

労働を神聖視し、勤勉、節約、努力、忍耐を是とするピューリタンの自助の精神、いわゆる当時の中産階級の倫理観や姿勢は、家庭生活を忌み嫌ったジョージ4世を特徴付けるリージェント・ロンドン（Regent London）の煌びやかな生活様式の対極にある。40年代は、この相対する二つの価値観が、ひとつの社会の中に混在した時代だった。1735年に設立された The Sublime Society of Beef Steaks についての、

In the meantime, gradual changes crept over the Society; imperceptible at first, but with each succeeding year more and more pronounced. The declining did not amalgamate with the rising generation. All the time-honoured observances – follies though they were – that had been part of a system with the Sublime Society of Beef Steaks, were gradually sought to be ignored by modern members. The blue coat and buff waistcoat were discarded; the ring, if occasionally produced, was a curiosity to be handed round as an object of art of the olden time.
(Arnold 33)

という記述は、当時の社会の激しい変容を指すとともに、旧体質の人々が自分たちの価値観を共有しない新しい世代との遭遇によって感じた不安と不満を、如実に表したものだ。そして、ドンビーが直面するのは、まさにこの旧世代のひとびとが持つ不安なのである。

2. 主従関係と世代交代

じっさい、時代の節目に起こりがちなこの新旧の対立を、ディケンズは様々な登場人物の主従関係に投影して、『ドンビー父子』で示している。たとえば、ドンビー商会の所有者ドンビーとマネージャーのカーカー (James Carker)。カーカーは外国語に精通しカードプレイヤーのようなスマートさで業務に敏腕を振るい、その姿は“feline from sole to crown” (329) と描かれて、主人ドンビーの硬直したあり方とは対照的に、猫のようなしなやかさが強調される。しかも、彼の住居は“beautifully arranged and tastefully kept” (513) と、職場とは異なる居心地のよい空間とされる。妻を持たず、兄や妹と絶縁し、独身生活を通す身ではあるが、彼はまさに、居心地のよい家庭の構築を求め続けたヴィクトリア朝の体現者さえ見える。しかし、彼はしなやかなその生き方の裏に、じつは専制的な主人の支配をも覆す危うさを潜ませてもあるのだ。ドンビーに“You respect nobody, Carker,”と問われたカーカーが見せる反応は、

‘No?’ inquired Carker, with another wide and most feline show of his teeth.

‘Well! Not many people, I believe. I wouldn't answer perhaps, for more than one.’

A dangerous quality, if real; and a not less dangerous one, if feigned. (196)

と描かれる。「一人を除いては」と答えてドンビーに阿るかのような返事をするカーカーは、語り手が言うように、その本心が容易にとらえられない複雑な内面を抱えた危険人物なのである。ここでもまた「猫のような」という形容が繰り返

されているが、カーカーは、しなやかだが狡猾な「猫」のイメージに相応しく、言葉を発するたびに表象される白い歯、つまり本心を隠した作り笑いが示す、人格の二面性が強調されているのだ。ドンビーがリージェンシーの男性中心主義や拝金主義を体現するなら、カーカーはヴィクトリアニズムに付随する偽善を具現する存在といえる。

さらに注目すべきは、カーカーの優秀さの陰で、ドンビーの滑稽なまでの無能さが強調されていることだ。大切な客人との歓談に、ドンビーは、有能な部下カーカーを同席させる。

Mr Carker now, began to discourse upon the pictures and to select the best, and point them out to Mr Dombey: speaking with his usual familiar recognition of Mr Dombey's greatness, and rendering homage by adjusting his eyeglass for him, or finding out the right place in his catalogue, or holding his stick, or the like.
(426)

ドンビーに対するカーカーの細やかな配慮は、ドンビーの威厳や虚栄心を守るためになくてはならない。さらには、再婚した妻のイーディス (Edith) を支配することが出来ないドンビーが、カーカーを妻との仲介役に任命するように、家庭内の不和の解決にまでカーカーに頼らざるを得ない始末である。じっさい、カーカーが轢死すると、ドンビー商会はまたたく間に倒産し、ドンビーの屋敷は売りに出されるのである。つまりドンビーとカーカーの主従関係が示しているのは、

新旧の力の対立とその密かな逆転である。

同様の新旧の対立と主従の力関係の逆転とは、ドンビーの友人で退役軍人のバグストック少佐 (Major Bagstock) と、ネイティブ (Native) と称される彼の使用人との「主人」と「奴隷」の関係にもみられる。ドンビーとバグストックの出会い、ブライトンにはじまる。ドンビーの息子ポール (Paul) の通う学校には、バグストックの旧友であるベンガルのビル (Bill Bitherstone) の息子が在籍しており、英国での生活に馴染めない息子を心配した親からの依頼でブライトンに出かけたバグストックは、そこでドンビーと親しくなる。ここで重要なのは、彼らをつなぐものとして、インドが示唆されることだ。

東インド会社は、1765 年にベンガルの徴税権を獲得して以来、特権的貿易会社から領土支配の機構へと姿を変え、みずからの軍隊を維持するまでになった。会社による侵略を阻止しようと立ちあがったムガル帝国の王子たちは 1819 年に制圧され、個々の社員 (商人) や軍人は、しばしば膨大な富を得て帰国した (木畑 100)。⁶

こうした背景を踏まえて、バグストック少佐とネイティブの関係を見るならば、故国に帰ればプリンスであり、“exile” (310) とされるネイティブは、ムガルの王子を思わせるだろう。そして、ベンガルに親しい友人を持つ軍人バグストックには、当時ベンガルを支配していた帝国のイメージが重ねられていると考えることもできる。

⁶ ムガル帝国の王子たちについては、Hibbert 17-19 を参照。

スーベンドリィニィ・ペレラ (Suvendrini Perera) は、バグストックとネイティブの関係をイギリスと植民地との不当な力関係の隠喩と見て、ネイティブはバグストックが植民地から持ち帰った戦利品だと言う (59-77)。⁷ とすれば、バグストックの肥満した顔や体は、搾取によって肥太ったイギリス人の強欲を示す隠喩と読める。

1725 年にジョージ 1 世が制定したバス上級勲章士のバグストックは、軍人としてジョージ王朝の父権的な旧体制を思わせる人物でもある。ここでディケンズは、旧体制を体現する彼を帝国主義的な圧政と重ねながら、さらに、その彼が、すでにネイティブがいなければ自分で衣服を着て、ボタンを掛けることすら出来なくなっていることを示唆するのである。

[...] the Native got him [Bagstock] into his great-coat with immense difficulty, and buttoned him up until his face looked staring and gasping, over the top of that garment, as if he were in a barrel. The Native then handed him separately, and with a decent interval between each supply, his wash leather gloves, his thick stick, and his hat. (306-07)

これは、当時の英国が実は植民地に支えられていることへの作家の皮肉だろう。商会の支配人であるカーカーがドンビーの男性としての威厳を支えるなら、バ

⁷ 1851 年のロンドン万国博覧会 (The Great Exhibition) に出品された品々や雑誌『パンチ』 (Punch) に掲載された詩“The Last Night in the Crystal Palace”など、植民地としてのインドは女性に例えられることが多い (Moore 99-110)。

グストックにとってのネイティブは、帝國的な権力を誇示するために不可欠な存在である。しかし、皮肉にも、ドンビーとカーカーの場合と同様に、そうした主従関係自体が、一見したところ絶対的と見えた主人の無力さを露呈する働きをするのである。⁸

興味深いことに、ディケンズは、同質の力関係の逆転を、古代エジプトの女王クレオパトラの異名を持つスキュートン夫人とその娘イーデイスの関係においても、同様に取り上げている。ドンビーと同様に、娘を金銭と引き換え可能な商品と見る母親のもとで、商業世界の不自然な価値観を押し付けられて育てられたイーデイスは、そんな母に内心反抗しながら生きてきた。イーデイスが母スキュートン夫人を責める“*What childhood did you ever leave to me? I was a woman – artful, designing, mercenary, laying snares for men – before I knew myself, or you*” (432) という言葉は、母親が体現する古い体質を蔑む彼女の意識を明らかに伝えている。皮肉にも、娘の最初の結婚で遺産が手に入らなかったことからスキュートン夫人は、娘をドンビーの後妻に急いで嫁がせる。つまりイーデイスは母の所有物

⁸ この関係は、じっさい、後に起こる 1857 年のインド大反乱（セポイの反乱）に至る過程に見ることができる。東インド会社は、1765 年にベンガル地方の地稅徴収權を獲得して以来、インドの統治・行政機關としての地位を確立してゆき、1813 年にはインド貿易の独占權を失い 1833 年には中国貿易を含むいっさいの貿易活動から手をひいて、完全なインドの統治機關となった。しかし、その兵力の殆どは、地元のインド人兵（セポイ）から成るもので、(50 年代のはじめ、20 万以上の兵力の内イギリス人は 3 万人ほど) イギリスは、この軍隊をもちいてインド内外にその領土を拡大し、中国とのアヘン戦争においてもこの軍隊の一部を動因し、しかもその費用をインド人の税金で賄っていた。イギリス人將校は、地元のインド人兵（セポイ）たちを“*tender as a woman*” (Hibbert 49) と見なしていたのだが、1857 年地元のインド人兵（セポイ）たちによるインド大反乱（セポイの反乱）が起こる。

でしかなく、結婚という法的な形をとってはいるものの、母の生活は娘を売ったおかげで安泰となる。注意したいのが、このイーディスのお金目当ての結婚を仲介し、後押しするのがバグストックであることだ。イーディスとスキュートン夫人の母娘の関係では、常に娘側の務めである“duty”という血縁の絆が強調されている(472-73)。⁹ しかし、じつは彼女たちの関係は、親子の愛情とはほど遠く、むしろバグストックとネイティブの関係にも相当する、いわゆる搾取につながるものと考えられる。¹⁰ つまり、スキュートン夫人とバグストックとを重ね合わせることで、ディケンズは、帝国とジェンダーの結びつきを示していると考えられるだろう。

奇しくもこれらの主従関係は、社会によって保証されたものであり、支配側のドンビーとバグストック少佐はそれぞれ英国の商人、軍人として、帝国の主軸を構成するメンバーである。支配者であるはずの彼らの「脆弱」ともいえる姿を、若い世代と対比させて浮き彫りにし、その背後に搾取の問題を示唆することこそ、作家の思惑ではなかったか。つまりこれらの主従関係と、その思いがけない

⁹ たとえば、Batchelor 編集の *The Histories of Some of the Penitents in the Magdalen-House* では、この“duty”の絆は、明らかに搾取として描かれている。この中で、母親がその娘ファニー(Fanny)に言う“I desire you will learn to respect your mother more: your duty is to believe everything I say, and do everything I bid you, or I shall disclaim you for my child: I will harbour no undutiful children.”(102)は、売春をも促すことが仄めかされ、じっさいファニーは売春宿で働くことになる。とすれば、ここで金銭目当ての母親によってドンビーとの再婚を“duty”として求められるイーディスにも、売春のイメージが重ねられていると読むこともできる。

¹⁰ Angus Wilson は、スキュートン夫人とバグストック大佐を、“In Mrs Skewton and Major Bagstock, Dickens produced the funniest, the most violent and the most frightening attack upon worldly values embodied in Regency manners,”(208)と、摂政時代の負の価値観を体現する人物たちと指摘する。

力関係の転倒によって、ディケンズは、未だ旧体制に縛られた国の衰退を暗示しようとしたことになる。

もっとも、ディケンズは単純に旧体制のみを批判して、新旧の交代を是としているわけではない。何故ならば、ドンビー商会に隣接するシティの界隈で、長年船具商を営み、甥のウォルター（Walter Gay）を育ててきたソル（Solomon Gills）や彼の友人カトル船長といった、一見ドンビーやバグストックとは対照的にみえる旧世代の存在もまた、この作品には同時に描かれているからだ。たとえば、娘のフローレンスが行方不明になろうと、気にもかけないドンビーとは異なり、ソルは海難事故に見舞われた甥のウォルターを追って一人彼を探しに向かう。カトル船長も、友人たちに降りかかった災難は、いつも我が身に重ね合わせて助けを惜しまないし、教育のない貧民の子どもには毎晩本を読んでやるなど、温もりと優しさを備えている。しかし、“I am an old-fashioned man in an old-fashioned shop, in a street that is not the same as I remember it. I have fallen behind the time, and am too old to catch it again.”（53）と、時代の変容を認識するソルやカトル船長は、じつはドンビーやバグストックが善と化した人物、つまりドンビーたちが体現するのと同様の旧体制の肯定的な側面を表す人物たちと考えることもできる。つまり、ディケンズは古い体質に警鐘を鳴らしながらも、古い時代の価値観を完全に否定するのではなく、その肯定的な側面をも同時に提示していることになる。むしろ、彼が強調しようとしたのは、新旧の世代交代というよりは、新旧の相互関係の重要さと言えるのである。

ユーレイニア慈善において、旧弊なクーツとは対照的な進取の思想をディケンズが体現することを第一章で示した。そのことは、すでに述べたように、たとえばディケンズが画期的なアイデアとして注目していたマクノーキーのマーク・システムを売春婦たちの更生に取り入れようとしたことに象徴的に表されている。しかし、その一方でピーター・アクロイド（Peter Ackroyd）が、作家に内在する熱意や画期的な社会改革への意気込みから、ディケンズを“a pre-Victorian”（1080）と定義したように、彼の中にはドンビーに通じる旧世代的な要素もふんだんに見出される。何よりディケンズ自身もジョージ王朝時代の生まれで、その時代の価値観や潮流のなかで25年にも亘って過ごしてきたのである。つまり、論じてきたように対立する二つの世代の価値観を二つながらに備えた存在がディケンズであって、ユーレイニア創設に至るクーツとの意見の調整の過程で、ディケンズはこうした自身の内に潜む矛盾に思いを致す機会を得たとも考えられる。そして、その結果、この作品には、彼の内部における二つの価値観の葛藤とその融合の模索の過程が反映されていると考えられないだろうか。

3. 女性の力

じっさい、こうしたディケンズの内的な葛藤と融合は、事業の出資者と実行者として男女の立場の逆転が生じたユーレイニア慈善をめぐるクーツとディケンズの関係にも見ることができる。それぞれの意見の対立と葛藤を経て両者の融和から生まれた彼らのユーレイニア・コテッジのように、『ドンビー父子』に描

かれる主従関係とその密かな転倒が表すメッセージはシンプルだ。和解と調和がなければどちらも生き残れない。社会は停滞してしまうのである。

ディケンズにとって、社会は葛藤と変容を繰り返す世界なのだろう。『ドンビー父子』の背景世界に繰り返しあらわれる「波」、あるいは「水」の描写は、社会が本来持つ流動性を象徴してもいる（新野 73）。¹¹ そして、こうした流動のイメージで描かれる時代の大きな変容を表すものとして際立っているのが、活発で賢い女性たちの存在だ。たとえば、メイドのスーザン（Susan Nipper）は、主人ドンビーに身分や性差を超えて率直に意見するし、乳母のポリーは、赤子のポールがフローレンスと触れあうことの大切さを主人ドンビーに訴えた。興味深いことに、彼女たちはそれぞれの夫から敬われてもいる。なかでも、ドンビーの権威に真っ向から対抗するイーディスと、自身を陥れたカーカーへの復讐を誓い流刑地から戻った売春婦アリスという二人の女性登場人物の存在には、男性の支配を覆す女性の力のあることを示唆している。

ジュリエット・ジョン（Juliet John）は、女性を商業的価値として扱う社会に対して、イーディスとアリスは“an exploitative patriarchal society”に背く女性としての“sincerity”を固持する存在だと言う（218-19）。先述のイーディスの状況と同じく、アリスも若き頃は“handsome”（531）で、自身の母親からその美貌を売り物にされ、それによって転落の人生を辿ることになった売春婦である。興味深いことに、アリスは極貧の生活を強いられてきた女性でイーディスとはその社会

¹¹ 『ドンビー父子』の全体像および本質的な課題は、新野 68-104 を参照。

的な身分に大きな違いがあるにもかかわらず、じつは二人は従妹であることが後に明かされて、両者の深いかわりが強調されている。そして、その因縁を持つ二人が支配者側の男性たちに破滅をもたらす騒動を引き起こすわけであるが、ディケンズはこの類似した要素を持つ彼女たちにどのような可能性を込めたのだろうか、見てゆきたい。

アンガス・ウィルソン (Angus Wilson) は、母親から搾取された二人の女性をめぐるプロットに注目し、そこに作家ディケンズの母親との親子関係の投影を読み取る。つまり、『ドンビー父子』を、作家の自伝的な要素をふんだんに盛り込んだ次作の『デイヴィッド・コパフィールド』と一連のつながりを持つ“recall of his own childhood” (206) と見るのである。さらに、ローズマリー・ボーデンハイマー (Rosemarie Bodenheimer) は、イーディスやアリスの不幸な成長期に関するプロットは、ディケンズ自身の搾取された子ども時代が投影されたものだという (84-85)。ただし、そうした屈辱的な経験や母親に対する遺恨は “unmanly, unfit for a gentleman’s repertoire” ため、作家は女性の代役を立てて自身の境遇から距離を置いたと述べている (87)。

たしかに、ディケンズは自身の母親に対して複雑な胸中を抱いていた。靴墨工場での就労から解放しようとした父親に反して、母親は彼を工場へ連れ戻すことを勧めたからである。友人フォスターへ語った次の会話はそれを物語る。

‘I do not write resentfully or angrily: for I know how all these things have worked together to make me what I am: but I never afterwards forgot, I never shall forget,

I never can forget, that my mother was warm for my being sent back.’ (Foster 49)

母親から搾取され、転落を経験するイーディスやアリスは母親によって労働者階級への転落の恐怖に晒されたディケンズと苦い思いを共有するわけで、事情は異なるものの、母親を責める二人の声はディケンズのじつは胸中にもあったものかもしれない。とすると、二人は搾取に対するディケンズの代弁者とも呼べるのではないだろうか。

しかも、アリスとイーディスには、じつは「搾取」をとおしてつながるプロットがもう一つある。先に紹介したように、アリスは “I was made a short-lived toy, and flung aside more cruelly and carelessly than even such things are.” (813) と告白するように、カーカーに搾取されて身を落とし、売春婦となって流刑地へと追いやられた。そして、その復讐のために英国に戻ってきた彼女は、母親と共謀してイーディスと出奔したカーカーの行き先をドンビーに知らせることで、その復讐を果たす。一方のイーディスは、嫌気が差していたドンビーとの結婚生活を解消するため、カーカーと駆け落ちを装って出奔するという大胆な行動に出る。このイーディスの行動は、彼女もまたアリスと同じ「堕ちた女」になる可能性を示唆するものの、じつは彼女はカーカーに身を託すつもりなどは殊更なく、カーカーはイーディスに虚仮にされたあげく追ってきたドンビーの影に怯え轢死してしまう。この一連の流れは、男性に搾取されるかと見えて、じつは男社会を揺るがすような女性の力を暗示してもいる。自らの目的を達成するために、アリスはカ

カーカーの主人であるドンビーへと近づき、イーディスはドンビーの従者であるカーカーを利用した。支配者側の男性たちの主従関係をうまく使った彼女たちの強かな企みによって、ドンビーとカーカーは破滅に追い込まれるのである。

もっとも、こうして復讐を果たしたはずのアリスは、ドンビーへ彼らの居場所を知らせはしたものの、自身の行為を悔い改め、“I relent towards him without reason, and wish to repair what I have done, if it is possible.” (815) と語って、最終的にはカーカーの妹に助けを求めることで事態の幕引きを図り、イーディスはドンビーのもとを離れてイタリア南部へと移住してしまう。二人は、それぞれに自身の恨みを果たしはしたものの、不条理な社会を根本的に改革することは成し遂げていない。

ジュリエット・ジョンは、そんな二人の辿る運命に対して、物語としての統一性、あるいは一貫性がないと指摘する。二人は共に搾取的な社会への批判を胸に秘めて、それに真っ向から抗おうとした。にも拘らず、アリスには“conform to society’s idea of a sincere woman”と、批判する社会の規範に沿う結末をもたらし、イーディスにはそんな社会からの旅立ち、すなわち社会を拒絶する“radical”な人生を与えたというのである (221-223)。

もっとも、彼女たちに与えられた人生の結末はユーレイニアの運営を介してみると意味を成してくるようになる。ユーレイニア・コテッジでは入居後の1年は訓練期間、すなわち過去からの「切り替え」期間が設定されていて、それを経て海外へと移住とするシステムが組まれていた。アリスはカーカーの事件

から1年後に死を迎えるが、“We shall all change, mother, in our turn. [...] That is all past. It is like a dream, now,” (891) と更生した状態が伝えられ、イーディスは戻ることのない海外移住を果たすわけで、二人の辿る人生は、じつは一つにつながっていると読めるのである。¹² つまり二人には「堕ちた女性」であるユーレイニアの女性たちに込められたディケンズが期待した二つの更生のあり方、すなわち改心と海外移住とが投影されていたともいえるのであって、そこに売春婦たちの過酷な運命に自身の幼少期のトラウマを重ねながら、彼女たちの救済をしようとするディケンズの姿勢を読み取ることができる。

『オリヴァー・トウィスト』に登場する売春婦ナンシーは、悪党サイクスとの絆を断ち切れず命を落としてしまった。サイクスに対する愛情はナンシーが海外移住を勧めるブラウンローの説得を断り、売春婦であり続ける理由であったのだが、そのサイクスによってナンシーは命を奪われてしまったわけで、売春婦が破滅に至る典型的な道筋がそこに提示されていた。つまり、売春婦自体が「悪」なのではなくて、彼女たちの無知や貧困が問題であることをディケンズは『オリヴァー・トウィスト』をとおして社会に告げた。ところが、『ドンビー父子』では、アリスやイーディスの親からの搾取、そしてそれを助長する男性社会への復讐が描かれて、そこには作家自身のトラウマとの関連性も見受けられた。そのことはユーレイニア慈善に着手することによって「堕ちた女性」の問題と作家自身

¹² アリスは最期に病床から、あれから何年経ったのか尋ねる場面があり、カーカーの妹が “It is a year and more,” (889) と応え、イーディスはフローレンスとの別れの際、再会を望むフローレンスに対して “Never again!” (940) と、決して英国へは戻らないことを告げている。

の幼少期の経験がもたらした心理的抑圧との距離感がより近くなったことを示すもので、ディケンズは二人をとおして「搾取」と「堕ちた女性」の問題を他者の問題としてではなく、自身の運命にも重なる切実な問題として社会へ警告したといえる。

もっとも、問題を社会へ提示し、周知するだけでは、『オリヴァー・トウィスト』のときと同じだが、『ドンビー父子』において注意すべきは、作家の姿勢がそこからさらに発展している点で、その背後にあったのが、ユーレイニア慈善において、ディケンズが身近に接することになった売春婦の存在に加えて、慈善の資金提供者となったクーツという女性の存在だったのではないか。

ユーレイニア慈善の出資者としてその主導権を握っていたクーツは、すでに述べたような女性の力と、そうした変革をもたらした新たな時代の動きをディケンズに実感させる存在であった。1837年8月10日クーツの祖母セント・オルバンズ公爵夫人（Duchess of St Albans）の遺書が読み上げられたときの様子は以下のように記されている。

After the solicitor had finished reading the will, there was silence from the seven men in the room. It was broken by the Duke, who nervously expressed his gratitude to his late wife for what she had left him (in a codicil, as it happened) adding: 'I hope none of the family grudge it me, and that we shall all live in harmony.' It was Lord Dudley who replied: 'I see no reason to the contrary.' There was nothing more to be said. They all bowed and left the room. (Orton 46)

長子相続制が当然の社会にあって、23歳の若い女相続人の誕生には、驚きや戸惑いが交差していただろう。筆頭相続人となったクーツはもちろんこの場に同席すらしていなかった。

イギリスは1837年の遺言法（Wills Act of 1837）の制定により世襲財産制度が廃止され、遺言により娘にも財産を遺すことが可能になった。参政権がない女性にとって、財力は、それに匹敵する力強い糧であり、女王の即位も相俟って、社会における女性の台頭を後押しすることになる。こうした時代を背景として書かれたドンビー家の跡取りをめぐる物語には、まさにクーツとの交わりを通して彼が目の当たりにした女性の社会的地位をめぐる、ディケンズの見解が託されていると考えられる。男性社会を覆すイーディスやアリスの人物造形も、そうしたディケンズの意識を示唆するものだが、そのディケンズの考えをより巧妙な形で反映するのが、じつは一見従順な「家庭の天使」と見えるドンビーの娘フローレンスである。

ドンビーの姉ルイーザは、女の子であるフローレンスを“never, never, never, be a Dombey”（63）と語り、彼女が家督を相続するなど千年経っても有り得ないと断言する。じっさいフローレンスの存在は、ドンビー商会の傍で長年船具商を営むソルでさえ、甥のウォルターが商会の様子を語るまで知らなかったほどである。そこに古い時代の男性中心の価値観を見ることができる。ウォーリック城にドンビーやバグストックなどが集う場面は、この男子中心の跡取り制度に対する作家の痛烈な風刺となっている。なぜなら、財産目当てに娘をドンビーの後妻

に据えるスキュートン夫人は、ここでヘンリー8世を褒め上げるが、そのヘンリー8世はチューダ家の統治を安定させるために血族に拘り、男子の世継ぎを授かるために次々と妻を迫害、処刑へと追い込んだ絶対君主だからである。

もっとも争いを避けるために血族の男子後継者に拘ったヘンリー8世とは異なり、男系の財産相続へのドンビーのこだわりはその理由がはっきりしていない。女性は駄目だ、嫌いだといった側面ばかりが目立つ。たとえば、息子を亡くし、傷心旅行へ旅立ったドンビーは、後にした屋敷や娘フローレンスのことを思い出す。

She had been unwelcome to him from the first [...]. Her loving and innocent face rising before him, had no softening or winning influence. He rejected the angel. Her patience, goodness, youth, devotion, love, were as so many atoms in the ashes upon which he set his heel. (313)

ここに並べられたフローレンスの属性は、当時の典型的な理想の女性像に通じる。それを拒絶し、踏みにじるドンビーの姿は、比喩的な姿ではあるが、バグストックがネイティブを容赦なく虐めている姿に重なるだろう。

女性を排除しようとするドンビーには、商会の統治者に対する作家のジェンダー観が反映されているように思われる。英国は1711年に創設の南海会社(The South Sea Company)¹³によるいわゆる「南海泡沫事件」を契機として、会社経

¹³ この会社は前作品『マーチン・チャズルウィット』(*Martin Chuzzlewit*, 1843-44)で Anglo-Bengalee Disinterested Loan and Life Insurance Co.として登場している。

営についての法律が強化された。以後、イギリス国内では株式会社制はあまり普及せず、企業は二、三人、多くても数人の共同出資者が事業を経営するという無限責任の共同事業制が主流となった。¹⁴ この無限責任制では、国からの援助は一切見込めない。よって、ドンビー商会が前代未聞の倒産に見舞われたときも資本家で経営者のドンビーがその責務を一人で負うのである。レオノア・デイヴィッドフ（Leonore Davidoff）は、18 世紀から 19 世紀にかけての会社に関して、“The personality of the entrepreneur, or partners, was the firm.”（200）と述べて、生まれながらにして備わった経営者の資質こそが重要であることを主張する。これだけの大きな責任を会社の責任者が担うということを踏まえると、男系の跡継ぎへのドンビーのこだわりは単なる女嫌いではなく、これだけの重責を、今まで社会から切り離されて生きてきたはずの女性がどこまで背負えるのかという疑問を率直に示すものと考えられるかもしれない。

しかも、伝統的に女性は男性の所有物であるという意識があり、これを解決しない限り女性の台頭など所詮無理である。エイプリル・ロンドン（April London）はこうした女性観の源を、次のように説明する。

Women’s embodiment of customary and more modern understandings of property derives from two sources: on the one hand, the extrinsic signification women carry in their legal status as the property of father and husband and, on the other, the intrinsic meaning they potentially exercise as possessors of their

¹⁴ 川北他 135-36 に詳しい。

own persons. (6)

興味深いことに、一見極めて男性的な世界を描いたかと見える『ドンビー父子』でのフローレンスの矛盾を抱えた扱いからは、女性を男性の所有物とする概念を何とか遠ざけようとするプロットが見えるのだ。たとえば、父親から無の存在とされる彼女は、一見すると当時の理想の女性像であった「家庭の天使」のように見えて、じつは我知らずドンビーを絶えず不安にさせ、その存在を揺さぶる人物でもある。彼女のおどおどとした懇願するような表情のなかにドンビーは“doubt” (313) を感じていた。なぜならば、それは彼を“reproach” (313) しているように思えて、“It was a trouble to him to think of this face of Florence” (313) と、彼女の存在が厄介になっていたことが語られるのである。また、イーディスの駆け落ち騒動でドンビーを慰めようとしたフローレンスが暴力を受け屋敷を出て行く場面は、日の出頃の町の賑わいが“The cheerful vista” (722) と実にすがすがしく描かれ、父親に家から追放された不幸ではなく、むしろ彼女の新しい旅立ちを予感させる。加えて彼女が向かった先は、叔母ルイーザのもとではなくウォルターの叔父ソルの船具商店であった。ここは、彼女をドンビー家の後継者とみなすソルたちが、彼女のために乾杯した家だから、彼女を蔑ろにするドンビー一族の影響や価値観から、彼女を解放する意図を、そこに読みとることができる。

またフローレンスは自分の意思でウォルターとの結婚を決意する。彼はドンビー商会で働きだすが、商会の方針に抗ったために、すぐに西インド諸島へ左遷

される。帝国の植民地へ到着する前に彼の乗っていた船は遭難し、彼は中国の商人に助けられて船荷監督人として中国でのビジネスに携わってゆく。このウォルターの履歴を考えると、彼との結婚は、結婚に関する女性の自由な意思決定の可能性を示すのみならず、更なる象徴的な意味を持つように思われる。

1830年代の自由貿易運動の高まりは、1833年の東インド会社の中国貿易独占権の廃止や、1839年の反穀物法同盟の誕生から1846年の穀物法撤廃にいたる大きなうねりとなった。もっとも、この「自由貿易」は、じつは対等のものでなく、政府は必要とあれば武力に訴えて「自由貿易帝国主義」と呼ばれる政策を取り、これが中国との貿易に施行されて、アヘン戦争（1839-42）の火種となったのだ。注意したいのが、イギリスが中国に強制的に押し付けていたのが、インド産アヘンで、イギリス商品ではなかったという点だ。自由貿易が叫ばれるなか、実は、自由なはずの対中国輸出は妨げられていた（モートン 384-389）。アヘン戦争の勃発が、中国が広東に到着したアヘンを焼却したことにあることを考えると、ウォルターが中国側の商人に雇われ、中国の港に到着する船荷監督の仕事に従事していたことは、彼を植民地支配の体現者ではなく、あくまでも自由貿易の推進者とする作家の意図を示すと考えられる。

じっさい、彼がフローレンスと結婚後に中国へ旅立ち、英国を留守にする設定には、大英帝国から距離を置こうとする意図が見える。中国へ旅立つ用意は、“Limited and plain”（851）と描かれ、結婚式に向かう途中で裕福な界限を通り過ぎる様子は、次のように描かれる。

Riches are uncovering in shops; jewels, gold, and silver flash in the goldsmith's sunny windows; and great houses cast a stately shade upon them as they pass. [...] they go on lovingly together, lost to everything around; thinking of no other riches, and no prouder home, than they have now in one another. (870)

彼らは、これらのステータスシンボルとは無縁であることが強調されている。二人は、所有の概念から自由だし、彼らの夫婦関係はいわゆる父権的な世界ではなく、フローレンスが“Walter is poor, and I am very poor, and I must learn, now, both to help myself, and help him.” (850) と言い放つところに、男女が同等の立場にあり互いに助け合ってゆくことが示唆されている。この彼らのあり方は、フローレンスに付き添う犬の名が、古代ギリシアの哲学者であり、物質的快楽を求めず、高貴な生まれや名声は悪徳を目立たせる飾りだと述べ、「世界市民」を自称し、当時の通念に縛られない女性や子どもの見方を示したディオゲネス (Diogenes) であることによっても示唆されている。¹⁵

このように、若い世代を刷新したような姿で表象しているところに、本章の冒頭にて紹介した作家自身の本作品に対する“interesting and new”、そして“great material”と語った作家自身の評価があるのではないか。ユーレイニア慈善を開始するに至って、売春婦たちの問題や更生、そして巷の更生施設などを実際に調査したことから、ディケンズはこれまでジャーナリストとして積み上げてきた社

¹⁵ ラエルティオス 127-178 を参照。

会問題に対する知識に加えて、新たな情報や出会いを経験し、そのことが本作品への創作に導いてくれたと言える。何よりも、一見したところ典型的な「家庭の天使」と見える慣習的な女性像から少し発展した女性を、ディケンズはフローレンスに体現させた。つまり、フローレンスが体現するような進取の気配は、クーツという新しい時代を象徴する女性との出会いから生み出されたものなのだ。

しかし彼は、物語の最後にトゥーツ氏 (Mr. Toots) に、妻の言葉を借りて、“from his daughter, after all, another Dombey and Son will ascend [...] triumphant!” (946) と、言わせてはいるものの、フローレンスを実際には商会の女相続人とはせず、むしろ、理想の母、妻、娘である、いわゆる「家庭の天使」としての姿を強調した形で物語に幕を降ろす。会社と同様、ドンビー家の相続人となるには、先祖の築いた財だけではなく、何代にも亘る家系の威厳も引き継がなければならない。クーツの秘書を長期にわたり務めていたチャールズ・オズボーン (Charles Churchill Osborn) が彼女について、

The aristocratic influence of a long line of descent were concentrated in her; grace of person, grace of speech, exquisite daintiness and refinement, a delicate perception of distinctions, perfect ease of manner; the Faculty of winning obedience without effort; and the gift of erecting impassable yet imperceptible barriers against familiarity. (*Osborne Papers*, Vol. IV, Add. MS. 46405A, f. 177)

と、書き残しているように、周囲に畏怖の念を抱かせてしまうクーツの側面を、

ディケンズは物語の中心に据える女性像に投影させることの難しさを実感したのだろう。クーツは女性慈善家としての「優しさ」と銀行を引き継いだ相続人としての「威厳」という両側面を体現していたようだが、そうした女性がディケンズ小説のヒロインになるのは未だ先のようなのである。

『ドンビー父子』は、海上制覇を可能にした海軍軍人、そして時間と労働を支配するブルジョワ商人といった、英国の支配権を掌握してきた者たちが、時代の移り変わりのなかでそれぞれの価値観に固執しつつ生きるさまを浮き彫りにした。頑なで横柄な支配者たちに与えられる裁きは厳しい。ドンビーは破産、ドンビー商会に大きな投資をしていたバグストック少佐も連鎖して大損を被る。こうした旧弊な思想に支配された人々の没落を示すと同時に、ディケンズはこの小説において、支配者と被支配者との力関係の転倒や、女性の転覆的な力の存在などを通して、新たな時代の幕開けを予感させているが、この新たな時代をもたらすものの正体が一体何であるのかを、物語の中ではっきりと示してはいない。1832年の選挙法改正法（Reform Act）により貴族の完全な支配は終わり、民主による政体が始まった結果、バーネット・スケトルズ（Sir Barnet Skettles）のような急進派がさらに台頭するのか、鉄道という新たな動力に関わるトゥードル（Mr Toodle）のような労働者が結束していくのか、未だ漠然としているようである。そして、重要なのはこの大きな流れに女性は含まれるのだろうかといった疑問である。イーディスとアリスが物語の最後に社会との関係において示す対照的

なあり方や、フローレンスの人物造形がはらむ矛盾は、新旧の対立と融合を模索するこの物語におけるディケンズが、未だこの女性の問題に対して確信できる答えを得ていないことを示唆しているだろう。

もっとも、『ドンビー父子』の執筆において、ディケンズがドンビーの跡取り息子ポールを死に至らしめる意図を密かに知らせていた相手は、もはや従来の執筆における相談相手のフォスターではなく、クーツであったという (*Letters* 5: 9)。この事実は、作家ディケンズが、女性の優位を受け入れ、認めるに至ったのが、ユーレイニア慈善という現実の社会運動にとどまらず、作家としての創作の領域にも及んでいたことをうかがわせる。クーツとの出会いによってディケンズにもたらされた新たなストーリー展開への可能性は、二人のイニシャルをタイトルに含む次作品『デイヴィッド・コパフィールド』 (*David Copperfield*)¹⁶ において、作家自身と下層の人々の再生をかけた物語へと引き継がれる。

¹⁶ フォスターは作品のタイトルが作家の苗字と名前のイニシャルを逆に用いたタイトル名であることを指摘し (*DC* xxi)、Appendix III では、“‘Copper’ keeps the idea of a common coin;” と苗字についての説明がある (*DC* 940)。これらのことから、“David”はディケンズの“D”で、“Copper”は銅貨、銀行家クーツの“C”を連想させる。『コパフィールド』は、ディケンズの半自伝的小説であるが、主人公の成長に加え、下層の人々の再生に通底しているのは「善意」である。なかでも、主人公デイヴィッドの叔母ベッツイ (Betsey Trotwood) の人物像にはクーツの存在を彷彿とさせるエピソードが第 13 章“The Sequel of My Resolution” (204) に含まれていることなど、ディケンズとクーツの慈善が表れている作品と読めるのである。

第 三 章

『デイヴィッド・コパフィールド』(*David Copperfield*, 1849-50)

—— 海外移住 ——

「海外移住」という言葉には、ロマンをかき立てる響きがある。自由、あるいは逃亡を求める冒険が思い起される。19 世紀のイギリスはそうした海外移住が活発に行われはじめた時代だった。オリヴァー・マクダナ (Oliver MacDonagh) によると、1801 年から 1900 年までに、国外に移住した人々の数は“Some ten million people” (Introduction) にも及ぶという。この流れは、小説にも影響を与え、ディケンズの作品においては初期の頃から「海外」が登場している。例えば、『オリヴァー・トウィスト』(1837-39) では西インド諸島が、腹違いの弟オリヴァーの出生における証拠隠滅を図ったモンクス (Monks 本名は Edward Leeford) の流刑先とされ、国名への言及はないものの売春婦のナンシーにも現在の生活から抜け出す方法として海外移住が勧められる。『マーティン・チャズルウィット』(*Martin Chuzzlewit*, 1843-44) では、新大陸アメリカが登場し、マーティン青年 (Martin Chuzzlewit) とマーク・タップリー (Mark Tapley) が希望を抱いてイギリスを旅立つものの夢破れて本国へ戻って来ている。そして、『ドンビー父子』(1846-1848) では、売春婦のアリス・マーウッド (Alice Marwood) が海外の流刑地から戻ってくる。ただし、これらの作品に登場する「海外」には「流刑地」や「夢破れ」など、もっぱら好ましくない事柄を想定したような暗い印象が付き

まとう。ところが、そんな暗雲を追い払うのが『デイヴィッド・コパフィールド』（1849-1850）の「海外移住」である。ここで移住先として登場するオーストラリアは、希望に満ちた新天地として描かれている。この変化の背景には、クーツ（Angela Burdett-Coutts）とともに立ち上げた売春婦たちの更生施設ユーレイニア・コテッジで実施されていた海外移住との関連が考えられる。ここでは入居してから約 1 年の訓練期間を経てから海外に移住することになっていたのも、ユーレイニアの女性たちの海外移住はちょうど本作品と同じ時期に始まった。この施設の運営・管理を任されていたディケンズは、移住に関してさまざまな情報収集を行っていた（Hartley 188, *Letters* 5: 426）。その結果、従来の作品執筆時にはちがってディケンズにとって「海外」がより身近で現実に即した小説のデバイスになったとも考えられる。本作品は、1849 年 5 月から翌年 11 月に亘って刊行された長編である。主人公で語り手のデイヴィッドの成長を綴る物語であるが、この作品は「断片的」な自伝と呼ばれるように、現実とは異なる記憶の形で綴られてはいるものの、作者であるディケンズの実人生とも重なる部分を多く持つ。しかし、主人公の成長物語とは別に、読者の注意を引くのが、オーストラリアへと移住をする二組の人物たちである。一組目は、生活の豊かさを家族にもたらそうとエリート階級に唆されて「堕ちた女性」の烙印を負ってしまうエミリーを中心とするペゴティー家で、もう一組は、仕事探しに翻弄し遂に犯罪にまで手を貸してしまうミコーバー一家である。ともに英国社会から冷遇され虐げられて、生活は悪化の一途をたどるばかりであった彼らが本国を旅立つことで、主人公デ

イヴィッド以上に劇的なハッピーエンドを迎えるのである。本作品で描かれる彼らの「海外移住」に向けたプロットは、作家自身の伝記、とりわけユーレイニア慈善とどのような関わりをもつのだろうか、考察したい。

1. 女性たちの海外移住

1) 現地の状況

主人公デイヴィッドには、母を亡くしたときに、“my guardian” (152) だったらと願う父的な存在がいる。それは、コパフィールド家に住み込みで働く召使いクララ・ペゴティ (Clara Peggotty) の兄ダニエル・ペゴティ氏 (Daniel Peggotty) である。ヤーマス (Yarmouth) で甥のハム (Ham)、義理の兄弟の娘エミリー (Little Em'ly)、そして漁師仲間の未亡人ガミッジ夫人 (Mrs Gummidge) とともに、船の家で漁師として生活していた彼ら一家は、オーストラリアへの移住を果たす内の一組である。

注目すべきは、ペゴティ一家の移住が彼の姪であるエミリーに起因することだ。彼女は、海難事故で両親を亡くし、叔父のペゴティ氏に育てられた。ペゴティ氏の愛情の深さは計り知れず、エミリーもその愛情に応えようとレイディになって叔父に“a sky-blue coat with diamond buttons”や“a large gold watch” (47) などの高価な金品をたくさん贈って、彼が漁師から紳士になることを夢見ているのである。そして、そんな思いを叶えてくれる機会が訪れる。セイレム学校 (Salem School) で兄のような存在だったスティアフォース (James Steerforth)

を、デイヴィッドが、紹介したのである。スティアフォースはハイゲイト (Highgate) に屋敷を構えるエリート階級の出身で、彼との出会いは、貧しい漁村の生活を送るエミリーにとって、夢を実現するための千載一遇のチャンスと見えた。スティアフォースの誘惑に陥って家を出てゆくものの、レイディの夢は叶うことなく彼に捨てられたエミリーは「堕ちた女性」の烙印を負う。したがって、罪は容赦なく断じることこそ正しいと信じて疑わないミス・ダートル (Rosa Dartle, 通称 Miss Dartle) から“obscure death” (726) を迫られる。

ミス・ダートルは、スティアフォース家の遠縁にあたり、たった一人の肉親だった父が亡くなるとスティアフォース夫人 (Mrs Steerforth) に引き取られ、以来ハイゲイトの屋敷に同居している。スティアフォースによると、彼女は何事も石臼にかけてより磨きをかける性質で、身も心も全てが刺々しい。そして、そんな辛辣な物言いの気性が災いしてスティアフォースからは口元に消えない傷を負わされた。しかし、もしスティアフォースの妻になっていたら、私は彼の“slave” (806) でも耐えたと公言するほど屈折した思いをスティアフォースに抱いている。エミリーを排除しようと躍起になるところには、彼女のスティアフォースに対する強い愛憎が潜んでいる。つまり、当時の一般的な価値観を示すかと見えるミス・ダートルの言葉は、じつは極めて個人的な感情から生み出された歪んだものであることが、示唆されていることになる。

もう一人、このペゴティ一家と共にオーストラリアへ移住するマーサ・エンデル (Martha Endell) もまた、エミリーと同じ「堕ちた女性」である。彼女はエミ

リーより 2 歳から 3 歳年上で、同じ学校で学び、お針子の見習いとしてオーマ一家（Omer）で長い間一緒に仕事をしていた。マーサは幼少期に両親が亡くなって天涯孤独の身となった女性である。寂しさからか身を持ち崩してしまった彼女の過ちを、ヤーマスの住民もまた許さず、村にいられなくなった。マーサはロンドンへ旅立つものの、騙されて本物の売春婦になって悲惨な生活を送った末に、エミリーを探しに上京したペゴティ氏とデイヴィッドが彼女をテムズ河で見つけたとき、売春婦たちの自殺名所でまさに自ら命を絶とうとしていたのである。¹ すなわち、『コパフィールド』においては、エミリーもマーサも、いわゆるユーレイニアの女性たちと同じ烙印を負う「堕ちた女」たちは、じつは読者の共感を得られる側面を与えられているといえる。

ディケンズは、これまで、たとえば『オリヴァー・トウィスト』（1837-39）のナンシーや『ドンビー父子』（1846-48）では極貧のアリス・マーウッドに対して、売春婦たちに社会の犠牲者として同情を寄せながらも、最終的にはミス・ダートルが主張するように、一種の懲罰ともいうべき「死」に至る運命を与えてきた。ところが、『コパフィールド』では、エミリーやマーサを死の淵から救い出して、「海外移住」によって新たな人生を生きるという可能性を示すことを選択したのである。そこにはどのような意味があったのだろうか。

¹ 『リトル・ドリット』でもこの辺りの描写には自殺の名所を示す“FOUND DROWNED”と書かれたビラが用いられ悲壮感を漂わせている（LD 46）。また、この悲劇を George Frederik Watts は「堕ちた」烙印を負った哀れな女性の生き様として絵画 *Found Drowned* で取り上げた（Paxman 131, LD 929）。

「墮ちた女性」の烙印を負ったエミリーは、デイヴィッドが少年時代だったころの初恋の相手であり、彼女を貶めたスティアフォースもまたデイヴィッド少年の憧れのヒーローというように、主人公にとってはいずれも失い難い存在である。しかし、彼はエミリーの一件を知らされると、“all was at an end between us” (462) と、スティアフォースとの関係に幕を下ろしてエミリーの救済に務める。そして、エミリーを助けるためにマーサと接触するのであるが、第 21 章のタイトルが “Little Em’ly” であったように、第 47 章ではそのタイトルを “Martha” と題して、彼女たちの存在に光を当てて、その苦境を詳しく読者に伝えてもいる。そして、マーサの協力を得てエミリーを発見することに成功し、最終的に彼女たちが「生きるための方策」として、オーストラリアへの移住が選ばれるのである。

「墮ちた女」が最終的に辿ることになる運命の変化の背景には、ユーレイニア・コテッジでの経験、とりわけ訓練を終えた入所者が赴くべき新天地オーストラリアと、そこへの移住に対する、当時のディケンズの強い関心が読み取れるのではないか。

そもそも、この女性たちのオーストラリアへの移住は、英国政府が積極的に促進していた政策でもあった。その意味でユーレイニア・コテッジの方針は、政府の政策に合致したもののようにも見える。しかし、売春婦のオーストラリア移住については、実は当時すでに様々な問題が見えてきていたのである。英国は 18 世紀後半からオーストラリアのニューサウス・ウェールズを流刑地として囚人の輸送を始めた。彼らの労働力を植民地の開拓に使うことを目指していたので

あるが、植民地化が進むにつれて男女の数の不均衡が目立つようになり、その割合は 1833 年までには男性が 73% で女性が 27% と、差は著しいものとなっていた (Rushen i-ii)。

男女の不均衡を解消するため、30 年代に入ると英国政府はオーストラリアの入植者たちと協同で、「女性の移住」を促進するプロジェクトを立ち上げる。本国側は、18 世紀後半から懸念されていた人口問題の解決策として、余った女性たちを移住させることが本国と植民地の相互利益を生むと考え、² 政府から業務委託を受けた London Emigration Committee (通称 LEC) は、“*Young Women desirous of bettering their condition by an Emigration to New South Wales.*” (Rushen 18) と題した広告を普及させて、女性の移住者を広く募集した。問い合わせや申請をおこなったのは、ほとんどがロンドン女性刑務所 (London Female Penitentiary) や貧困者の避難所 (Refuge for the Destitute)、さらに救貧院の出身者、つまりいかかわしい過去を持つ女性たちで、家事と農業に従事してくれる女性移住者たちを待っていたオーストラリアの入植者たちとの間に大きな齟齬を生んでいたのである (Madgwick 94-95, Rushen ix-xi)。

エリザベス・ラッシュェン (Elizabeth Rushen) は、LEC の 1834 年の年次報告書に記載されている、“The great object of importing young Women is not merely to

² 英国内で女性の数が男性の数より上回っていた状況は、1851 年に発表された国勢調査によると、ロンドンだけでも人口 2,362,236 人の内、男性 1,106,558 人、女性 1,255,678 人と女性が 15 万人ほど多い (Great Britain, *Census of Great Britain*, 1851. Population Tables. I) を参照。したがって、植民地の男女の数の不均衡を解決するため女性たちを植民地へ移住させることが奨励された。さらには、英国の人口の移り変わりについては、Hilton 5-7 を参照。

supply the demand for servants – to restore the equilibrium of the sexes;” (36) という記述から、入植者側と政府側の優先事項の違いを指摘し、ロバート・マドウィック (Robert Madgwick) は移住希望者による過去の履歴に関する虚偽申請の多さとその容易さ、および現地からの移住女性たちに対するクレームの多さを指摘している (101-105)。その結果、1840 年に政治家で準男爵のウィリアム・モールズワース (Sir William Molesworth, 8th Baronet) が、“the streets of Sydney and Hobart Town were crowded for a time with female prostitutes.” (39) とイギリス議会で報告したとおり、彼女たちの“far too many immoral characters” (Madgwick 103) の性質によって、社会の「悪」と認識されていた売春が移住地にも蔓延ってしまっていたのである。

ディケンズは、1848 年にユーレイニア・コテッジの「海外移住」に向けた候補地の調査から、当時のオーストラリアが必ずしも健全ではない状況であることを把握していた。何よりもこの調査から、ディケンズは政府の移住政策が思わしくない事態を生んでいることも理解していた (Hartley 204-05)。それを踏まえながらも、ユーレイニアの女性たちには移住を入居の条件とし、物語ではエミリーやマーサの生きる可能性として海外移住を描いたのであるが、そんなディケンズを後押ししていたものは何だったのだろうか。

先ず、ディケンズ自らがユーレイニア・コテッジで強いた方針との関連に言及したい。それは、開所当初に作家が拘っていたルールのひとつで、彼女たちは入居に際して自身の経歴をディケンズに面談で打ち明けると、それ以後は彼女た

ちが単独で聖職者と接触することを禁じられた。彼女たちに「告白」をさせてはいけない、彼女たちの過去の過ちについても決して言及してはならない、また入居者同士であっても打ち明けてはならないというのである (*Letters* 5: 181)。じっさい、彼女たちの過去に触れた寮母はそれを理由に解雇されている (*Letters* 5: 493)。自身の過去の封印ともいうべき訓練を、彼女たちは約 1 年にわたって強いられてきたのである。アフリカのケープ・タウンに渡った女性に対して、ディケンズは“must be profoundly silent there, as to past history,” (*Letters* 6: 29) と勧告している。自ら過去を話さない限り、新たな土地では「別の人間」となれる。そう頑なに信じていたと考えられる。

こうした過去との決別へのこだわりは、作家自身の境遇とも深く関わっている。ディケンズは、自身の辛い記憶、つまり少年期の靴墨工場での就労体験や父親が債務者監獄に収監されていた事実を妻や友人にずっと秘密にして生きてきていた。それが、1847 年の春頃のこと、友人ジョン・フォスター (John Foster) がディケンズの父の知人ディルク氏 (Mr Dilke) についてディケンズに尋ねたことから、封印していた過去が次第にあかるみに出ることになってしまった。この出来事はちょうど本作品を執筆する直前に起こっている。さらに、その出来事は、ユーレイニア慈善の設立に向けて、ディケンズが売春婦たちとの面談を行っていた時期とも一致することから、ジェニー・ハートリー (Jenny Hartley) は、作家自身の記憶をたどる『コパフィールド』の創作に至って、これら一連の出来事が大きく影響していると考察している (161-62)。

じっさい、『コパフィールド』の物語においては、エミリーがステアフォースと駆け落ちしたというスキャンダルはヤーマスの人々の間に瞬く間に拡がる。ディケンズが懸念していたのは、こうした周囲の人々の反応であろう。デイヴィッドは、エミリーが姿を消したその翌朝にはすでに町の通りの至る所で、“Many were hard upon her, some few were hard upon him,” (462) と、人々が誘惑者のステアフォースではなくて、エミリーの非を情け容赦なく責めているのを見聞きしている。そして、ミス・ダートルはエミリーを探し当てて、「堕ちた女性」と同じ空気は吸えないと、“sickly” (727) な空気は浄化しなければならないと言い、もし姿を見つけた場合は“I’ll have your story and your character proclaimed.” (727) と語って、その過去を世間に公表することを彼女に対する懲罰として主張するのである。

じつは、デイヴィッドはこの様子をドアの向こう側でこっそりと聞きながら、ペゴティ氏が駆け付けるのを待っているだけで、自分がエミリーを助けることをしない。ここにはデイヴィッドのみならず、作者であるディケンズのユーレイニア・コテッジでの体験、とりわけ売春婦たちの更生に対する以下に述べる複雑な思いが現れているのではないだろうか。

ユーレイニア・コテッジでは最初の入居者たちが海外へと旅立つと、次の受け入れを開始することになるが、この第 2 期に受け入れた女性たちがディケンズの悩みの種となった。なかでも、マーサ・エンデルのモデルとされるイザベラ・ゴードン (Isabella Gordon) は、嘘をつく、お祭り騒ぎを繰り返す、入居する女

性たちを仲間に引き入れるといった、悪い影響を次々に及ぼしていた (Hartley 71)。³ ディケンズもクーツへの手紙で“she said she could do what she liked with us.”

(*Letters* 5: 557) など、彼女に纏わる報告を具に伝えている。とはいうものの、彼女が明るい性格だったことからか、1849 年 2 月の入居からディケンズは彼女には何度も寛容な対応を施している。しかし、ついに 11 月 6 日の委員会では退所が決定した。彼女が去ってゆく様子を、ディケンズはクーツに近しいウィリアム・ブラウン氏 (Dr. William Brown) に宛てた手紙に“a most pitiable sight”と記し、彼女には半クラウン銀貨を与えて彼女が行くべき慈善施設を指示するなど、特別な思いがあるかのように感傷的だ (*Letters* 5: 639)。一方で、この時の委員会では、第 1 号としてオーストラリアへ旅立った女性たちが元の売春婦に戻ってしまったという悪い知らせも報告されており、ディケンズにとってはコテッジの開設以来の大きな節目となった日であろう。今後は、クーツに報いるためにも、一層の厳しさを持って彼女たちに対応してゆく覚悟をブラウン氏に伝えている (*Letters* 5: 639)。そして、エミリーがミス・ダートルに罵られるのをデイヴィッドが傍観していた場面を描く第 50 章執筆のころになると、ユーレイニアでは刑務所から出所する売春婦だけではなく、貧民学校からの女性たちも受け入れるといった方針の転換が図られていた (*Letters* 6: 139)。ディケンズは、貧民学校出

³ 入居者たちの度重なる嘘や裏切りが次々に報告されている。彼女たちの“the most hypocritical letters”と記されているもの、その他には“Ellen Walsh and this Jemima Hiscock being the two last the end has been failure. And God knows how they infect the rest.” (*Letters* 5: 84-85) や“I am more indignant with that Mary Jones, than I have ever been with any of them.” (*Letters* 5: 89-90) など、ディケンズが彼女たちに手を焼いていた様子がうかがえる。

身の女性たちについて、興味を抱くような科目や目標が見られないことは他の入居者たちと変わらないが、通りでの生活をしていた入居者たちと比べると“suffered less”の状態だったからか、何事においても過度に反応してしまう性分ではないことがまだしも救われると記している (HW172)。⁴ 入居者を信頼しては裏切られるといった繰り返しの、ディケンズも少し躊躇する思いが出てきていたのではないだろうか。エミリーもじつはペゴティや婚約者のハムを裏切ったとされ、ミス・ダートルに彼女が散々罵られる場面をデイヴィッドが傍観する場面を描くことを通して、ディケンズは期待通りに更生しない売春婦たちに対する否定的な思いを表しているとも言える。

とはいうものの、マーサもエミリーの場合も、延いてはユーレイニアの女性たちも、ディケンズによると墮落の根本的な原因は「貧困」と「無知」(HW 174)からきている。もちろん、一般の人々は、そうした真の原因は関知するところではない。しかし、ディケンズの場合、ハートリーが考察するように、ユーレイニアの女性たちの身の上を直接聞き取ったことが自身の封印していた過去をより鮮明に呼び起こすことになったのであれば、自身の体験からも彼女たちへ向ける視線は世間とは異なるシンパシーを持ったものとなっていたはずだ。したがって、彼女たちが生きるためには、何よりも金銭的にも世間の非難からも安全な居場所の確保が必要だと考えたのだろう。しかし、それは地元の人々やミス・ダ

⁴ 『ハウスホールド・ワーズ』誌で紹介された数名の貧民学校出身者について、彼女たちの悲惨な境遇は詳細されているが「墮ちた」烙印を負っているかどうかについての言及はされていない。

ートルからの厳しい批判からも明らかなように、本国ではない。「堕ちた」烙印を負う女性たちの「行き場」についてのクーツ宛のディケンズの手紙にあるように、10代や20代前半の若い彼女たちにとって知り合いは限られている。彼女たちが頼るところは“an infamous associate” (*Letters* 5: 182) であり、そこが彼女たちの「ホーム」でもある。つまり仲間のところに戻ってしまうからからこそ売春を繰り返してしまうというわけだ。加えて、ディケンズ自身の過去も思いも掛けない出来事から知られることになったのだから、現地の危険な状況は承知しながらも、過去については沈黙を貫き通すこともできる「海外」での生活にこそ、身を守る可能性を見出そうとしたのだろう。

2) ディケンズのオーストラリア

最初に旅立ったユーレイニアの女性たちの移住は、不本意ながら、残念な結果となってしまった。しかしながら、海外移住に向けては何ら変更が生じることもなく、むしろ次のギaskellとの手紙のやり取りからは、今後に向けて移住の失敗に関する原因の究明がされていたことが分かる。この点で、ディケンズはオーストラリアに関しては、他の移住先にはない、何か特別な思いでも抱いているかのようにも見える。そもそも、何故オーストラリアなのだろうか。

1850年1月8日付、ディケンズはオーストラリアへの移住に関してマンチェスター (Manchester) に在住するエリザベス・ギaskell (Elizabeth Gaskell) か

ら手紙を受け取っている。⁵ 手紙の内容は、ギaskellにはどうしても助けたい女性がいて、ディケンズ、ひいてはクーツに援助を求めてきたのである。その女性は未だ16歳で、大人たちに都合よく利用されて「墮落」の一途をたどってしまったのであるが、ギaskellは彼女が刑務所から出所すると、“as free and unbranded a character” (Johnson 161) としてオーストラリアに移住させたいという。しかし、長い船旅になることから、船上での誘惑に負けるかもしれないことを懸念して、ユーレイニア・コテッジで海外移住する売春婦のために用意されていたクーツの船に便乗させてほしいというものだった。この移住船上での問題が、じつはユーレイニアから最初に旅立った3人の女性達が売春婦に戻ってしまった原因でもあり、アデレードの港に出迎えがきたときには、彼女たちの姿は既になかったのである。『コパフィールド』において、エミリーやマーサがペゴティ氏に守られて船旅に就いているのは、こうした現状を反映してのことと考えられる。オーストラリアへの旅は、百日間にもおよぶ船旅となるので監督者が必要とされるが、その役割を引き受けてくれる人材の確保が難しいとディケンズは説明している。そして、依頼された女性のオーストラリア移住に関して、クーツへの仲介についてうまくいく見込みは薄いとしながらも、仲介の労をとることをギaskellに約束している (Letters 6: 6-7)。

ところが、ディケンズの予想とは異なったギaskellからの感謝の意を表し

⁵ ギaskellは同じくマンチェスターに在住していたディケンズの義兄 Henry Burnett からクーツの慈善を聞きつけて連絡をしてきたのである。バーネット氏は歌手でディケンズの姉 Fanny の夫。

た返事（1850 年 1 月 12 日付け）がディケンズに届いている。クーツはいくつかの計画と貴重な提案を申し出てくれたようで、ギaskellはそんなクーツを“she is really and truly kind”（Johnson 162）と評して、さらには、“very, very kind”（Johnson 162）と繰り返している。少し誇張のきらいすら感じられるギaskellのクーツへの称賛は、じつは他の海外移住における慈善との比較から来ている。それはチゾム夫人（Caroline Chisholm）の慈善であり、彼女の支援する女性たちは、“unblemished character”（Johnson 162）でなければならないと厳しい条件を課していたのに、対して、売春婦を受け入れたクーツはとても優しいということであった。

果たして、ディケンズはギaskellの文面に記されたチゾム夫人の“unblemished character”をどのように受け止めたのだろうか。「売春」は、とりわけ中産階級においては“socially unmentionable”（Harrison 148）と見做され、重い課題であった。言い換えれば、誰も扱いたくない現実であった。よって、『コパフィールド』では、エミリーやマーサの物語をどのようなものとすべきか、ディケンズが問題意識を持って挑む様子が、翌月の 2 月 4 日付けのクーツへの手紙からうかがえる。

It is difficult to approach, in pages that are intended for readers of all classes and all ages of life; but I have not the least misgiving about being able to bring people gently to its consideration. You will observe that I am endeavouring to turn their thoughts a little that way, in Copperfield. And I hope before I finish the story, to

do something strongly suggestive, in that kind of preparation. (*Letters* 6: 27-28)

物語の中でそのテーマをどのように展開させるかが、作家ディケンズの考えとして一般読者に周知されるわけで、それを承知の上で社会に一石を投じるような“suggestive”な形にとディケンズは努めているのである。この手紙と時を同じくして刊行されたのが第 30 章の“A Loss”で、エミリーがステアフォースの「誘惑」からヤーマスを後にすることが読者に伝えられる。これは、エドガー・ジョンソン (Edgar Johnson) の指摘通り、ディケンズが重い課題に向けて取り組みを開始したことを裏付ける (165)。そして、ここからペゴティ氏の苦難の搜索や、ステアフォースと下僕のリティマーの卑劣な行為、そしてステアフォース夫人やミス・ダートルの不条理なスノッブ性が曝けだされて、読者の同情を得る内容が次々に前景化されるのである。

さらには、この手紙にはディケンズが編集を務める『ハウスホールド・ワーズ』誌 (1850 年 3 月 30 日付け)⁶ に掲載するオーストラリアについての記事を担当する投稿者たちについても報告されているのであるが、その中に留意すべき人物、チゾム夫人がいる。

チゾム夫人は、『デイヴィッド・コパフィールド』に続いて、1852 年 3 月に連載が開始された『荒涼館』で、“telescopic philanthropist”と揶揄される慈善家ジェリビー夫人のモデルとなった人物として馴染み深い。彼女の実家は英国ノース

⁶ 当該記事は、“A Bundle of Emigrants' Letters.” March 30, 1850, 19-24.

アンプトン州（Northampton）の地主で地元の人々から敬愛される裕福な一家であった（Mackenzie 7）。彼女は、英国国教会の洗礼を受けたものの、カトリックに改宗し強い宗教心から困窮している人々への奉仕に尽くすことに生涯を捧げた（Mackenzie 25）。

東インド会社のマドラス領の指揮官だった夫（Captain Archibald Chisholm）の健康状態が思わしくなかったため、1838 年一家はインドを出てオーストラリアのシドニー近郊へと移り住む。夫は、その 2 年後に任務地インドへ戻ってしまいうが、チゾム夫人は子どもたちとそのままシドニーに残った。そこで彼女が見たものは、いわゆる“social evils”と呼ばれる売春婦たちであった（Mackenzie 7）。このことは、先に述べたモールスワースの報告の通りである。

チゾム夫人は、熱心なクリスチャンであり、シドニーに蔓延る売春の存在に危機感を抱き、本国での移住体制についてオーストラリア総督へと抗議を行う。そして、自ら家族と住んでいた壮大なコテージを売却し 1841 年に若い女性たちのシェルターを築いた。ここは、“HOME”と呼ばれ、行き場を失って堕ちてゆく若い女性たちの避難場所として 600 人ほどが身を寄せた。後にチゾム夫人は、ここに女性たちの「登録所」を開設し、彼女達と 10 時から 16 時までの就労契約を結び、仕事の斡旋を次々に行った（Mackenzie 8-11）。彼女は、懸命に働く貧しい開拓者たちの利益を考え、“the elevation of the moral tone of the colony”（Mackenzie 20）に努めた。

彼女の功績は、帰国後には政府からも認められて、第 7 代シャフツベリ伯爵

(Lord Shaftesbury) や初代ハーバート・オブ・リー男爵 (Sir Sidney Herbert)、そして他に影響力のあった人々 (Johnson 162) の支援を受けて、1850 年 5 月には海外へ移住する家族への貸付 Family Colonization Loan Society を設立、開始した (Mackenzie 25)。この貸付を、ディケンズは先に述べた 1850 年 3 月 30 日付け『ハウスホールド・ワーズ』誌のなかで紹介している。

チゾム夫人がシドニーに築いた「ホーム」と、ディケンズが後に「ホーム」と呼び変えたユーレイニア・コテッジは、その規模は異なるものの奇しくも同じ呼称で同じ役割を帯びていた。しかし、先のディケンズのチゾム夫人に対する反応からも、移住先としてのオーストラリアについては両者の思惑の違いは明らかである。すなわち、チゾム夫人は熱心なカトリック教徒で、後に、オーストラリアを“Romanize”する意図があったと批評家に指摘されるほどでもある (Hartley 215)。また、本国へ帰還後のチゾム夫人は、ギaskellの手紙にあったように、支援する移住者たちの「人格」への拘りを見せた。対照的に、ディケンズのホームでは、可能な限り“the secular education” (*Letters* 5: 199) を目指して、実用的な針仕事や読み書きなどに時間を費やして音楽や図書など広域な分野を学んだ。⁷ この更生プログラムを習得した入居者たちは、“the formed character” (*Letters* 5: 188) になったとディケンズは認識していたようである。オーストラリアへ移住する女性たちに潔白な人生を送ってきたことを望むチゾム夫人に対して、ディ

⁷ じっさい、開設から 1 年の更生プログラムを経た入居者たちについて、ディケンズは他の施設の入居者たちを引き合いにして彼女たちが一番だと誇らしげにクーツに報告している (*Letters* 5: 425)。

ケンズは改心した女性たちの行き場と考えた。つまり、二人の抱いていたオーストラリアの風景は随分と異なっていたのである。

チゾム夫人の移住者への資金貸付を紹介した『ハウスホールド・ワーズ』誌の記事には、既にオーストラリアへと移住した人々からの手紙も含まれており、ディケンズが編集長として掲載したそれらには、“Bush”や“shepherds”など、オーストラリアの牧歌的な様子を彷彿とさせる言葉が飛び交う。そして、移住地は果物、野菜、肉など食料品が豊富で、衣料においても本国と変わらず、農場労働者が必要とされていることが記されている。なかでも注意を引くのが、英国国教会の聖職者からの手紙である。彼によると、シドニーには今や立派な若いジェントルマンが多く移住してきているが、銀行家や商人、そして芸術家といった職種は全く需要がなく、女性たちには、本国とは違ってそこは穏やかな天候のなかで散歩を楽しむ、あるいは編み物に勤しむといった生活では決してないのだから、「家政」の技術を本国でしっかりと身に付けた女性でなければここでの生活には似つかわしくないと提言している（*HW* 19-24）。⁸

この「家政」こそ、ディケンズがユーレイニアの女性たちに課した訓練であり、これらのオーストラリア移住者の手紙に記された内容がディケンズの描いていたオーストラリアではなかったか。ロンドンとは全く異なった空気のなかで穏やかではあるが、農業や牧畜といった厳しい労働が待ち受ける生活である。この

⁸ これらの『ハウスホールド・ワーズ』誌に掲載されたオーストラリア移住者たちについての記事は“the Victorian imagination”にすぎないと、ヴィクトリア朝の空想話だという批判もある（Archibald 66）。

ような生活環境にふさわしい女性は、“unblemished character”であるよりも、“practical”であるべきではないのかとディケンズは考えたのだろう。

じっさい、『コパフィールド』では、苦難を経てエミリーとの再会を果たしたペゴティ氏がオーストラリア行きの目的をデイヴィッドに、“No one can't reproach my darling in Australia. We will begin a new life over there!” (735) と打ち明ける。そして、最終的に、移住したペゴティ氏が本国にやってきてデイヴィッド宅を訪問しエミリーとマーサが幸せに暮らしていることを報告する。つまり、エミリーはペゴティ氏と“in the Bush” (873) に落ち着き、“the solitooode done her good” (873) と家畜の世話に忙しく、マーサは“their own and the singing birds” (874) しか聞こえない奥地で農夫の妻となり農業に勤しんでいることが、ペゴティ氏によって伝えられる。ともに人の噂など拡散しようのない奥地であることが明らかかな住処である。ここからうかがえるのは、負の烙印からの解放であろう。何よりも、この背景には不名誉な「過去」に引き戻されることがないようにとディケンズがユーレイニアで徹底して強いた沈黙のルールの影響が見られる。言い換えれば、ディケンズにとって未開で牧歌的なオーストラリアこそが彼の思い描いた売春婦更生の完成の場であったのだ。

一方で、マーサとエミリーは異なる運命を歩んでいる。マーサは結婚するが、エミリーは未婚である。ポール・シュリッケ (Paul Schlicke) は、たとえば母親の責任から罪の子としての烙印を負わされた『荒涼館』のエスタが幸せな結婚で結ばれる最後に対して、エミリーや実際には誘惑者に屈することはなかったが

父親の足元に跪いてその非を悔やむ『ハード・タイムズ』のルイーザに対しては、“despite his compassion, Dickens still punished his fictional women for their fall” (475) と、自ら堕ちた非との違いがあることを指摘している。しかし、ディケンズが果たしてエミリーを真の意味で“punished”としたのかどうか、この見解には疑問が残る。なぜならば、マイケル・スレイター (Michael Slater) によると、マーサは、ユーレイニアの女性たちの「模範」としてディケンズの慈善にもとづいて創作された女性であるのに対して、エミリーの生きる目的がじつは結婚ではなく、叔父のペゴティ氏を幸せにすることであり、それをディケンズは物語のなかで実現させたと述べるからである (347)。たしかに、マーサは、先に述べたようにユーレイニアの女性をモデルにしているが、ハムとの結婚が決まったエミリーの様子が、“Em’ly’s still a little down, and a little fluttered” (446) と伝えられるように、漁師のハムとの結婚を彼女が必ずしも夢に見ていたわけではないことが示唆されている。

つまりエミリーも、一連の出来事から本来の「家庭」を失くしてしまうが、彼女もまたその本来の希望を達成したわけで、堕ちて行き場を失くしてしまった彼女たちに、ディケンズが再び、幸せな日々を、オーストラリアの奥地において与えたことは確かである。

2. 困窮と海外移住

物語には、もう一組、オーストラリアへ旅立つ一家がいる。それは、未だ 10

歳だったデイヴィッドが義父のマードストーン (Edward Murdstone) から就労先に連れて行かれたときに会った同じ下宿先の住人ウィルキンズ・ミコーバー氏 (Wilkins Micawber) の一家である。なぜ、ディケンズは売春婦の問題に加えて、ミコーバーの海外移住を描こうとしたのだろうか。それはユーレイニアでの経験とどのようなつながりがあるのだろうか。

エドガー・ジョンソンは、ミコーバーの造形について、“John Dickens was no Micawber.” (46) ⁹ と否定する。たしかに、何事も “something turns up” (185) と期待するミコーバーの一見楽観的な性格とジョン (John Dickens) の実直な性格は異なるのかもしれない。しかし、ミコーバーがデイヴィッドに “Annual income twenty pounds, annual expenditure nineteen nineteen six, result happiness. Annual income twenty pounds, annual expenditure twenty ought and six, result misery.” (186) という言葉は、ジョンがディケンズに自身の財政的危機を “if a man had twenty pounds a year, and spent nineteen pounds nineteen shillings and sixpence, he would be happy; but that a shilling spent the other way would make him wretched.” (Foster 24) と説明するものと同じである。¹⁰ したがって、ミコーバーにはやはりディケンズの実父ジョン・ディケンズの面影が重ねられていると言える。

とはいうものの、何故実父の苦難苦境を主人公とは血のつながりのない人物へ重ねたのだろうか。ディケンズの父ジョンは、『コパフィールド』の執筆中生

⁹ John Dickens は ディケンズの実父。

¹⁰ 当時の地域別による職種の分布や所得や資産については、Hilton 129-130 を参照。

存していたが、物語では、デイヴィッドの父親は彼がこの世に誕生する前に亡くなっている設定だ。半自伝とはいえ、実父の存在を冒頭から亡き者にしているところに、ディケンズの父ジョンに対する複雑な思いが読み取れる。

まず、ジョン・ディケンズは、もともとポーツマス海軍工廠（Portsmouth dockyard）の海軍の経理課（the navy-pay office）で事務職に就いていた。そして、ディケンズの幼少期に転勤となり一家はケント州にあるチャタム（Chatham）に移り住んだ。ここに 9 歳まで滞在したディケンズは、ここでの体験が子どもの頃の印象として永続的に強く心に刻まれた記憶であると記している。特に、ロチェスター（Rochester）とグレーヴズエンド（Gravesend）の間にある大通りの高台の土地に建てられていたギャズヒル・プレイス（Gad's Hill Place）と呼ばれる家の記憶がそうである。ディケンズ少年はこの屋敷をとて気に入り、父ジョンは彼に“If you were to be very persevering, and were to work hard, you might someday come to live in it.”（Foster 5）と話していた。家をひたすら眺めていた少年にとって父との和やかな会話は将来への期待と希望を抱かしてくれた時間でもあった。¹¹ そして、このチャタムの時代に文字を母から教わり、読書好きだった少年は父の所蔵していた本から多くのことを学び、充実した日々がここにはあったという（Foster 1-14）。

ところが、父親の転勤でロンドンに上京すると、一家の生活は一変してしまう。彼らに移り住んだ場所は、カムデン・タウン（Camden Town）のベイアム通り

¹¹ ディケンズは、じっさいにこの屋敷を 1856 年に購入した。

(Bayham Street)、当時は “the poorest part of the London suburbs” と位置付けられた貧民街で、こちらの高台には救貧院 (almshouses) が立ち並んでいた (Foster 16-19)。一家の貧困との闘いが始まったわけである。父の大切な本のコレクションも売られてしまった。しかし、さらなる不幸は、次に移り住んだガウワー通り (Gowere Street North, 現 Gower Street) で待ち受けていた。父ジョンが逮捕されて、彼は債務者監獄マーシャルシーに収監されてしまったのである。ここからの苦難は、フォスターが言うように『コパフィールド』においては、ミコーバーの受難として反映されている (16)。生活状況が一変してしまい、わずか 10 歳ほどだったディケンズ少年の教育は遮断されて、靴墨工場でのラベル貼りの仕事とマーシャルシー監獄へ通う日々、彼の前途は暗澹としてしまった。この不条理を、ディケンズは父の責任と解したのだろうか。

この理不尽な転落について、ディケンズが友人フォスターに、“they had broken my heart” (23) や “the secret agony of my soul” (33) など、彼の胸の内を明かしていることや、物語ではデイヴィッドがミコーバーの借金に絡んで、友人のトラドルズに、“Mr. Micawber don’t mean any harm, poor fellow: but, if I were you, I wouldn’t lend him anything.” (431) と忠告するあたりに、父ジョンに対してディケンズが抱いていた拭いきれない不信感が見受けられる。

一方で、ミコーバーには卓越した教養を与えてもいる。それは、彼が度々自身の境遇をアレキサンダー・ポープ (Alexander Pope)、トーマス・グレイ (Thomas Gray)、ロバート・バーンズ (Robert Burns) やウィリアム・シェークスピア (William

Shakespeare) の引用をもって例えることからわかる。これらは教養の高さを特徴付けるだけではなく、教育に関心の高い人物像を示唆している。¹² 先に述べたディケンズの教材ともなった書籍は父ジョンが所蔵していたもので、再び教育を受けられるように靴墨工場に迎えに来てくれたのも彼だった。よって、このような父ジョンの肯定的な側面も、ミコーバーには重ねられていると言える。

主人公の教育に関わる今一人の人物は、彼が初めて通ったセイレム・スクールのメル先生 (Mr Mell) である。彼は、頬が抉れるほど痩せこけて血色も悪く、極端なほどの安月給、加えて母親は救貧院のお世話になっている「貧民」である。後に、彼の母親の事情を知ったスティアフォースは彼を “beggar” (110) と皆の前で嘲笑し、メル先生は学校から追い出されてしまう。しかし、そんな彼こそがデイヴィッドが “I had long tasks every day to do with Mr. Mell” (91) というように、学期が正式に始まるまで熱心に学習の指導をしてくれたのである。そのメル先生が物語の最後にはオーストラリアへと旅立つことも、ディケンズ少年に教育熱心だった父ジョンの側面が思い起されて意味深い。

じつは、『コパフィールド』の執筆をしていた当時、ディケンズの長男チャーリー (Charles Culliford Boz Dickens) は名門イートン校 (Eton School) に通っていた。ディケンズは息子の教育に大きな関心を寄せていたと見えて、なかでも、チャーリーがその優秀さを発揮してクラスで頭角を示してきた様子をクーツに

¹² それぞれが例えられる場面：Pope (DC 273), Shakespeare (DC 436), Gray (DC 718), Burns (DC 718).

知らせる手紙には親としての喜びが溢れている (*Letters* 6: 54)。ディケンズは父として長男の教育を考えると、同じころに教育が中断されてしまった当時の自分自身へと思いを寄せていたのではないだろうか。

注意したいのは、自身の過去を、“I have never, until I now impart it to this paper, in any burst of confidence with anyone, my own wife not excepted, raised the curtain I then dropped,” (Foster 49) と厭いながらも、靴墨工場での日々をディケンズがわざわざ主人公デイヴィッドの体験として明らかにしていることだ。ディケンズ少年は家族と朝食をともにするためにマーシャルシー監獄へ通っていた。その日々を綴ることを、“because it illustrates, to me, my early interest in observing people”

(Foster 44) と語って、同じく収監されていた様々な異なる事情を抱えた債務者たちの歴史を、母からわくわくしながら聞いていたというエピソードがある。ディケンズ少年は、彼らを待ち受けて声をかけて知り合いになるのが嬉しくて、時には故意に仕事を休んでまでも彼らとの出会いを楽しみにしていたと言う (Foster 44)。マーシャルシー時代の日々には、暗い記憶ばかりではなかったようだ。おそらく、これら債務者たちのヒューマンドラマが、読書好きだったディケンズ少年にとって、失われた読み物の代わりになったのではないだろうか。そして、債務者たちの物語も後に小説家となるディケンズにとっては皮肉にも貴重な体験となったのではないか。

物語では、デイヴィッドがミコーバーを債務者監獄へ訪ねる日々を回想しながら、

When my thoughts go back, now, to that slow agony of my youth, I wonder how much of the histories I invented for such people hangs like a mist of fancy over well-remembered facts! When I tread the old ground, I do not wonder that I seem to see and pity, going on before me, an innocent romantic boy, making his imaginative world out of such strange experiences and sordid things! (180)

と、少年だった自分に思いを馳せる場面がある。興味深いことに、この声はデイヴィッドというよりも、少年時代の不慣れな体験とみすぼらしい出来事から独自の想像力豊かな世界を築いたという点において、ディケンズ自身の声とも感じられる。そして、これらディケンズ自身の体験を物語のなかでも回想しているところに、この体験の重要性がうかがえる。なぜならば、そこには小説家として名を馳せていたディケンズ自身の創作の礎となった出来事が含まれているからである。幸運にも、ディケンズ少年の教育は、読み書きに始まり、父の所蔵していた本を読み漁るといった段階まで進んでいた。よって、そこで培われた想像力というものは、あらゆることへの好奇心に繋がって日々を豊かにもしてくれていたのだろう。とすると、おそらくディケンズの父ジョンに対する矛盾する思いも、ここにきて小説家となるきっかけを生んでくれた肯定的な思いの方へと傾斜していたのではないだろうか。

そして、何よりも、その封印していた過去に橋を架けてくれたのが、刑務所から出所するユーレイニアの女性たちとの面談だったのではないか。彼女たちが

監獄に入るに至った歴史を傾聴することは、何よりもあの心を躍らせてくれた債務者たちの話に類似する体験だったはずだ。彼女たちの語る歴史にディケンズは少年時代の自分自身の体験を重ねるとともに、たとえば物語のマーサがユーレイニアでは問題児だったイザベラ・ゴードンをモデルにしていたことから分かるように、小説家としてのディケンズの幅広い人物造形へと繋がっているのである。¹³

エミリーやマーサの移住には、ディケンズ自身の慈善との関わりが深くあった。そして、債務者監獄のお世話になるだけではなく、仕事を求めて各地を転々とするミコーバーには父ジョンの側面が重ねられている。また、学校を追い出されるメル先生の造形に至っては、デイヴィッドが、“we came to the poor person’s house, which was a part of some alms-houses, as I knew by their look,” (85) と、ベイアム通りの救貧院の面影や、ディケンズの貧困時代の経験の投影が見られる。このように、『コパフィールド』では、ディケンズ自身の貧困時代の経験に関わりを持つ人物たちが、エミリーやマーサと同じく、社会に存在する不条理によって「ホーム」を失くしてしまった人たちとして登場し、最終的にオーストラリアで第二の人生を始めて、幸福を得ることになる。

ここには、じつはディケンズ自らが「ホーム」を失くした体験、一人寂しくマーシャルシー監獄へ通った日々が投影されている。そしてそれはミコーバーやメル先生として具現化し、同時にユーレイニア慈善での体験を反映するエミリ

¹³ マーサとイザベラ・ゴードンの類似性については、Hartley 74 を参照。

ーやマーサもまた、彼らと同様の運命をたどる。このことは、ユーレイニア慈善がディケンズの心の中で自身の過去の経験と重ねられていたことの証左でもあろう。しかし、すでに述べたように、幼少時の不幸な経験は、小説家としてのディケンズを造る重要な経験でもあった。彼らは皆本国に居れば不名誉な烙印を負ったままで、それはディケンズが過去の経験を周囲にひた隠しにしていた事実にも通じる。しかし、ユーレイニアの慈善を通して自らの経験を追体験したディケンズは、同時に自身のつらい過去が創作に持つ肯定的な意味にも気づいたのではないか。『コパフィールド』のオーストラリア移住が持つ肯定的な側面は、単なる作家の御都合主義的な物語構成やユーレイニア慈善の実態の反映ではなく、こうした作家の意識の深いレベルでの経験の反映と考えられるのである。

ディケンズは、この時期、プライベートでは、8番目の子どもヘンリー（Henry Fielding Dickens）が誕生し、翌年には9番目の子どもドーラ（Dora Annie Dickens）も誕生している。¹⁴ 一方で、父ジョンは『コパフィールド』が完成した半年後に亡くなり、最後に読んだ作品となった。『コパフィールド』のデイヴィッドの成長は、英国社会では再び光を見ることのできない人々の苦しみや悲しみとともにあった。そして、そんな彼らの負う足枷をディケンズは海外に移住させることによって解いたわけであるが、貧困や女性たちの問題は主人公の周囲の登場人物をめぐる副筋として留まった。しかしながら、ユーレイニアの運営から数年を

¹⁴ 残念ながら8カ月で亡くなる。

経て執筆された次作品『荒涼館』では、ハートリーが“*Bleak House, comes from the heart of the Urania years.*” (50) というように、「堕ちた女性」の問題が物語の主軸に据えられ、主人公エスタの生き様に引き継がれる。

第 四 章

『荒涼館』 (*Bleak House*, 1852-53)

——二人の語り手をめぐって——

大法官裁判所の諷刺から語り始められる『荒涼館』は、当時の司法システムを批判する「社会小説」と見える。しかし、小説冒頭、揶揄の対象として大法官裁判所を名指すやいなや街を覆う霧や泥の描写に語りの焦点が移ることが典型的に示すように、じつは諷刺の対象となる裁判所のシステムそれ自体は、具体的には描かれない。むしろ大法官裁判所は、国内に蔓延する様々な社会悪を表すひとつの比喻として小説に置かれているようだ。たとえば、アンガス・ウィルソン (Angus Wilson) は、大法官裁判所を “Exactly such was the state of England’s government” (231) と考察し、貧困などの深刻な社会問題を先送りにする政府を喩えたとみる。同様に、エドガー・ジョンソン (Edgar Johnson) は、最終的に *Bleak House* というタイトルに決定するまでに考慮されたおよそ 9 本の候補に注目し、作品内に登場するスラム街 “Tom-All-Alone’s” の存在を強調するためのものだったと考察する (387)。¹ 一方で、興味深いのは、この物語が主に現在形を用いる三人称の語り手と、自身の生い立ちを過去形で綴る一人称の語り手「エスタ」

*本章は、『ディケンズ・フェロウシップ日本支部年報』第 39 号 (2016 年 12 月) に掲載された論文『『荒涼館』とユーレイニア慈善—二人の語り手をめぐって—』を補正、加筆したものである。

¹ 他に、Peter Ackroyd は、ディケンズがこの頃になるとヨーロッパへ頻繁に出かけていたことから距離を取ることで英国社会を見つめ直そうとしていたと分析する (138-143)。

(Esther Summerson) とが交互に物語を語るという特殊な構成を持つことである。

ジョセフ・フラディン (Joseph I. Fradin) は、二人の語り手の意義を、“the dialectic between self and society” (41) と考察し、ジャネット・ラーソン (Janet Larson) は、エスタを聖書ヨブ記 (The Book of Job) の “the afflicted but righteous Job” にたとえ、二人の語り手を、烙印を負い社会から疎外される一人称エスタの “patience” と、それを追い詰める全知の語り手三人称の “anger” の関係と見る (130-135)。²

そこで語られる内容は、三人称の語り手が、大法官裁判所を中心に准男爵のデドロック家からスラム街の “Tom-all-Alone’s” に至る広範な公的な領域の出来事を描写するのに対し、エスタの語りは、彼女の生い立ちや恋愛、家政の問題を中心に私的な領域の出来事を描く。この小説が大法官裁判所の旧弊なシステムの改善を目指すだけのものなら、こうした特殊な語り手をおく必要はないはずだ。単純な社会制度に対する諷刺から読者の注意を逸らす二人の異質な語り手を置いた意味は何だったのだろうか。本章では、二つの語りの重要な接点となるデドロック夫人の過去の秘密を糸口に、『荒涼館』執筆当時にディケンズが手掛けたユーレイニア慈善とのつながりを探り、この特殊な語りを持つ小説の意義を考えたい。

1. デドロック夫人の過去

² James M. Brown は、語り手の “tone” と “emphasis” の違いがそれぞれの語り手の特徴、非人間的で客観的な三人称の語り手と人間的で主観的なエスタの語り手を示す (75) と分析している。その他、二人の語り手に関しては、Garrett 1-17 を参照。

三人称の語り手によって紹介されるロンドンの街の様子は物語の冒頭からとても冷やかだ。行き交う人々はその目先を冷たい雨と風に塞がれて、誰もかれもが不機嫌だ。そのうえ、街の至るところには霧が押し寄せて、語り手がその行き先を追うと、もっとも濃い霧に覆われている大法官裁判所に辿り着く。³ ここでは、カーテンのような厚いガウンに仰々しい鬘を身に付けた大法官や法律家たち、さらには脇に積み上げられた書類の山々がクローズアップされ、数百年にわたっても変わらない法服の体裁や変化の兆しの見えない運営体質が前景化されている。⁴ その光景を語り手は、“Both the world of fashion and the Court of Chancery are things of precedent and usage.” (5) と皮肉り、上流階級の世界へとその照準を移動する。しかし、上流社会の描写において、デドロック准男爵 (Sir Leicester Dedlock) を中心とする政治の世界は描かれず、物語は、もっぱら美貌の貴婦人デドロック夫人 (Lady Dedlock) の個人の履歴を語るのである。

デドロック夫人の物語は、第 2 章の“In Fashion”で、三人称の語り手によって導入される。その上流社会を、先例と慣習 “precedent and usage” (5) から成り立つ世界と紹介する語り手は、一見したところ、第 1 章の大法官裁判所批判につながる旧弊な支配階級への攻撃を目指しているように見える。しかし、物語は、

³ 当時ロンドンの「霧」の状態を記録した Francis Albert Rollo Russell は、それによって引き起こされている高い死亡率を指摘し、火事や洪水よりもひどい害をもたらされていることから霧を諸悪の根源として一刻の猶予も許されない事態であることを訴えている (4)。とすると、ディケンズは大法官裁判所をそのような厄難に例えているわけで、裁判所に対する作家の強い批判が推察される。

⁴ 法服の決まりは、1635 年裁判官の規則 (Judges Rules) にまで遡る。

支配階級の現状ではなく、もっぱら美貌の貴婦人デドロック夫人の個人の履歴を語り、続く第3章で、語りは三人称の語り手からもう一人の語り手エスタへとバトンタッチする。そして、以後デドロック夫人の物語は、二人の語り手の連携を通して展開するのである。

しかも、三人称の語りにおいて示されるデドロック夫人の物語の焦点は、夫人の秘密そのものよりも、むしろ夫人の秘密を暴こうとするデドロック家の弁護士タルキングホーン（Mr Tulkinghorn）とデドロック夫人との対決の形で展開する。本来描かれるべきホードン（Captain Hawdon）との恋の顛末を物語から排除し、代わりに彼女の秘密の追跡劇を三人称と一人称の二つの異なる視点から提示することによって、ディケンズがデドロック夫人の物語に込めたものは何か。

⁵ タルキングホーンは、デドロック夫人がわずかに見せた動揺の兆しを手掛かりに、その秘密を突き止め、彼女を執拗に追い詰めていく。しかし、彼の意図に関して、

Yet it may be that my Lady fears this Mr Tulkinghorn, and that he knows it. It may be that he pursues her doggedly and steadily, with no touch of compunction, remorse, or pity. It may be that her beauty, and all the state and brilliancy surrounding her, only give him the greater zest for what he is set upon, and make him the more inflexible in it. Whether he be cold and cruel, whether immovable

⁵ 事の発端はホードンの「筆跡」を目にしたデドロック夫人の動揺に始まる。また本作品のころ裁判所のあり方をめぐって、ディケンズは自身の1853年10月8日付『ハウスホールド・ワーズ』誌に掲載の記事“Things That Cannot be Done.” Oct., 8, 1853, 121-23.のなかで、弁護士を擁護する法のシステムを非難している。

in what he has made his duty, whether absorbed in love of power, whether determined to have nothing hidden from him in ground where he has burrowed among secrets all his life whether he in his heart despises the splendour of which he is a distant beam, whether he is always treasuring up slights and offences in the affability of his gorgeous clients – whether he be any of this, or all of this, [...] and his dull black breeches tied with ribbons at the knees. (459; underlines mine)

という描写が示すように、様々な推測が列挙されてはいるが、そのいずれもが“may be”あるいは“whether”という言葉が頻繁に繰り返され、説得的な理由付けのない不条理なものとされる。しかも最終的に、私生児を生んだという彼女の過去の秘密を突き止めたタルキングホーンは、不思議なことに、その秘密を隠蔽し続けることを彼女に強要する。タルキングホーンは“an old-fashioned old gentleman” (23) と形容される旧弊な考えの持ち主で、“There are women enough in the world, too many; they are at the bottom of all that goes wrong in it though, [...] they create business for lawyers.” (259-60) と描かれるように、あらゆる女性を法の秩序を乱す不穏な存在と見て、それを自身の力によって支配することを目指す家父長制的な (patriarchal) 人物とする。⁶

とはいえ、夫人とタルキングホーンの対立は、皮肉にも伝統を固守しようとしたタルキングホーンが殺害されることで唐突に決着を見る。一見、二人の対決は

⁶ “Patriarchy”、あるいは「家父長制」とは “custom which elevated a model of gender and age relations giving primacy to older men.” とされる (Davidoff and Hall 322)。性別と年齢の関係において、年長者の男性に優越性があるとする慣習。

夫人の勝利に終わったかのように見えるが、以後この問題は、タルキングホーン殺害の犯人探し、さらにはデドロック夫人の失踪事件といった探偵小説的な興味をも伴いながら、デドロック夫人の私生児であるエスタの個人的な問題として、彼女の語りに引き継がれ、エスタと三人称の語り手という二つの異なる視点から立体的な光を当てて提示される。

もっとも、ここで重要なのは、家出をした母デドロック夫人を救おうとバケット警部と共に母の足取りを追うエスタの追跡劇が、もっぱらエスタの視点から語られ、タルキングホーン殺害の謎解きの論理より、デドロック夫人の安否を気遣うエスタの心情に物語の焦点が当てられていることだ。バケットと共にエスタが訪れるのは、売春婦がさまよう荒れた界限で、死神に喩えられるテムズ川には、当時『タイムズ』紙 (*The Times*) が入水自殺をした女性たちの名前を掲載したコラム欄と同じ “FOUND DROWNED” (869) の掲示がある (Paxman 131)。⁷ このことは、社会から「堕ちた女」の烙印を押された女性たちの行く末がテムズ河での自殺であったこと、そして身分違いの恋愛の果てに貞操をやぶったデドロック夫人の過去の過ちもまた、負の烙印に通じることを示唆する。したがって、「罪の子」として虐げられて育ったエスタが自身の不幸の源である母親を救おうと夜の町を奔走するこの場面は、じつは「堕ちた女」に与えられた過酷な運命

⁷ エスタの語る “dense neighbourhood of narrow thoroughfares chequered by docks and basins, high piles of warehouses, swing-bridges, and masts of ships.” (868) という光景は、テムズ河沿いのドックヤード (Dockyards, 現 Docklands) と推察できる (Ager 39-55)。そこから西に走ってエスタが馴染みある街並みに気付き “Are we in Holborn?” と尋ねるとバケットは “Chancery Lane” (903) と応え、地理的な位置が示唆されている。

と社会制裁の不当性を伝えるためにこそ設定されていると言える。つまり、エスタの私的、心情的な語りは、「堕ちた女」を罪人として徹底的に糾弾するタルキングホーンに代表されるような、当時の父権社会の抑圧的なあり方に対する抗議と考えられるのである。

たとえば『オリヴァー・トウィスト』における売春婦で盗人の情婦のナンシーの描写が明らかにするように、ディケンズは「堕ちた女性」を不合理な社会の犠牲者として擁護する姿勢を示してきた。⁸ 『デイヴィッド・コパフィールド』においても、漁師の娘エミリーがエリート階級のステアフォースに唆されて駆け落ちにはしる典型的な身分違いの恋愛において、最終的にエミリーを叔父ペゴティの元へ戻し、むしろ誘惑した男性側の責任を告発している。

じっさい、ディケンズ自身が個人的に関心を寄せていたエリート界のスキャンダルとして騒がれた裁判があった。それは、後に女性のための法律に大きく貢献したキャロライン・ノートン（Caroline Norton）が、弁護士で保守党の政治家であった夫ジョージ・ノートン（George Norton）から度重なる暴力を受け、一方的に不義の容疑を被せられ「汚名」を負わされた不当な離婚裁判である。⁹ 当時

⁸ 語り手は、“The girl’s life had been squandered in the streets, and among the most noisome of the stews and dens of London,” (OT 332-33) と売春婦ナンシーを貧困による犠牲者であることを伝えている。

⁹ 不幸な政略結婚が招いた二人の離婚騒動から、Caroline Norton は法律家の夫に対抗し猛烈に法律を勉強する。そして、女性が法の保護下でない事実を突き止めると、法の改正を求めペンを走らせた。あらゆる機関や人々に嘆願書やパンフレットを送り続け、自らは“hack writer”として生活を支え戦い続けた。結果、1839年8月、幼児保護法（Infant Custody Act）の制定に身を結んだのである。この法律は、離婚後の子どもの養育権は大法官の裁定となるが、離婚後の子どもの養育権を母も有することができると成文化した。彼女はその後 1857

この裁判は、“Criminal Conversation”として世間をにぎわせていて、この裁判を報道記者として担当したのが、『モーニング・クロニクル』紙(*The Morning Chronicle*)時代の若きディケンズであり、何時間にもわたって続くあいまいな経過陳述をディケンズは“unbearable”と伝えていた (Atkinson 3)。

当時、父もしくは夫が、娘、妻を暴力の危険に晒しても法的な罰則を受けることはなかった。言い換えれば、女性には法律の保護下になかった。このような父権の絶対性を、18世紀の法学者ウィリアム・ブラックストーン (William Blackstone) は、“the empire of the father”、女性側を“entitled to no power”と述べている (453)。

その後、この裁判をきっかけに、ディケンズとキャロラインは、交友関係を築いてゆき『荒涼館』の頃にもディケンズはこの裁判に関するコメントを残している。¹⁰ また、キャロラインも女性を守る法律の制定に向けてキャンペーンを開始するなか『荒涼館』を援用し、ディケンズを女性の権利獲得に向けて奮闘する自身の“ally”と称したと言う (Schor 120-121)。

このような状況からも、三人称の語りがその象徴的で皮肉な語り口を通して、大法官裁判所を中心とする旧弊な社会制度を批判する点で作家に通じる視点を持つことは確かだが、あらゆる感情を排して、淡々と事実だけを述べるその語り口は、批判の対象となっている社会の非人間的なシステムそのものに通じても

年の離婚法 (Matrimonial Causes (Divorce) Act) と 1870 年の女性の既婚女性財産法 (Married Women's Property Act) と女性のための法律に大きく貢献した (Atkinson 247-80)。

¹⁰ 次のクーツとの書簡で交わされた文面から。“You have seen, I dare say, that disagreeable account of Mr and Mrs Norton at the County Court. It is very odd that they should have become a public topic so soon after our speaking of them as we did.” (*Letters* 7: 133)

いる。したがってそうした社会の冷酷なシステムを批判的な目で見つめるエスタの心情的な語りがむしろ作家のそれと重なって見えてくることは否定できない。

しかし、ここで一つの疑問が生まれる。「堕ちた女性」を糾弾する社会の不条理を、冷徹な三人称の語りとタルキングホーンが代表する法的支配体制によって示し、それとは対照的に、彼女たちを擁護するような自身の見解を一人称の語りを通して作家が表そうとしたとして、なぜわざわざその語り手をエスタという女性、すなわち自分とは異なる性別の持ち主と設定したのだろうか。その謎を解く一つの鍵として、当時ディケンズがその運営管理に携わっていた売春婦の更生施設ユーレイニア・コテッジについて考えてみたい。当時作家が深く関わっていたユーレイニア慈善を射程に入れることで、デドロック夫人の秘密をめぐるこの物語に新たな光を当てることができるのではないか。

2. ユーレイニア慈善におけるディケンズとクーツ

1847年11月のユーレイニア・コテッジ開設に至る経緯は本論文の序章と第一章にて述べた通りである。ここでは、売春婦たちの更生方法について生じていた相容れない二人の思惑についてさらに掘り下げてゆきたい。

家庭教師メレディス（Hannah Meredith）から大きな影響を受け、以後40年間熱心な福音主義であったクーツ（Angela Burdett-Coutts）にとって、ユーレイニアに入居する売春婦たちの更生方法の核は、「モラル教育」を施すことであった。

¹¹ また、福音主義における救済の考え方は、福音主義作家ハナ・モア（Hannah More）の *The Story of Sinful Sally*（1796）に登場する、一度身を持ち崩してしまうと罪びととして社会からは排除され天へ旅立つ日をひたすら待つ女性に典型的に示されている。¹² これは、一度墮落した人間は、神への強い信仰心を誓わなければ堕ちたままであり死後も救われないとするものだ。ディケンズの手紙に記された“You originate this great work for the salvation of the women who come into that Home;”（*Letters* 5:183）が示すように、クーツは彼女たちを救済することに力を傾けた。またその際には、自身の魂を救済するために神の言葉を理解すること、すなわち聖書を「読むこと」を重視したと考えられる。¹³

このクーツの姿勢は、『荒涼館』におけるエスタの伯母バーバリー（Miss Barbary）に通じるだろう。バーバリーは、日曜日には教会へ三度も足を運び、水曜日と金曜日の朝のお祈りにも通い、宗教講義にも出かけるほど指導者の教えに取りつかれた女性で、私生児であるエスタを常に罪の子と見て、彼女に母親の犯した罪の償いを迫る。そこに、ディケンズのクーツ、あるいはその背後にいるメレディスに対する密かな批判を読み取ることはできないだろうか。じっさい、売春婦た

¹¹ ディケンズはメレディスを“our dear obstinacy”や“the General Objector”と呼び、二人の間でも宗教心の違いからか“pitched battle”が繰り返された。また、オートンは、『デイヴィッド・コパフィールド』に登場する唇に傷を負わされたミス・ダートル（Rosa Dartle）はメレディスから触発された造型と考察する（Orton 87）。

¹² Sally Mitchell は(19世紀)小説内に登場する不貞を働いた女性たちを作品ごとに *The Fallen Angel* で比較しまとめている。

¹³ プロテスタントの国々では、「読むこと」が身に付けるべき必要なスキルとされた。自身の魂の救済は神の言葉を理解することによって、つまりは聖書を読んで理解することから成し遂げられるとされた（Eliot 12-13）。

ちの更生の主眼として誘惑への拒絶に拘るクーツに対して、ディケンズは「誘惑」は男性側にもその責任があるとし、社会に潜む矛盾をクーツに指摘している (*Letters* 4: 588)。また、入居者が現世において再び幸福を掴む「結婚」の可能性を否定するクーツに、かつては抱いていた夢を取り戻せるといった、いわゆる叶えられる希望なくして、自らの過ちを悔いてこの理不尽で無情な世の中に耐える改心を生じさせることは不可能だと反論してもいる (*Letters* 4: 588)。¹⁴ ここから浮かび上がるクーツの姿勢は、エスタに一方的に悔い改めを迫り、将来の希望を奪い取ろうとしたバーバリーに通じるものであり、エスタの保護者となったジョン・ジャーndeイス (John Jarndyce) は、バーバリーには“the distorted religion which clouded her mind” (276) があるとして、その歪んだ姿勢を批判する。

売春婦の更生に関するクーツの姿勢は、福音主義的な教義に限定されるものではなく、ヴィクトリア朝の父権社会に浸透する支配的な概念でもあった。先に述べたノートンの裁判過程が象徴するように、女性が法律の保護下にはなかった 50 年代において、マリオン・リード (Marion Reid) やハリエット・テイラー (Harriet Taylor) によって女性の参政権や教育の平等を求める画期的なフェミニズム運動が高まりを見せていた。¹⁵ そんななか、クーツの秘書オズボーンはク

¹⁴ 彼女たちの結婚に対するディケンズとクーツの方針は、Tomalin 86 を参照。

¹⁵ 後に John Stuart Mill と婚姻する Harriet Taylor は、1851 年 7 月に“The Enfranchisement of Women”と題した記事を *The Westminster and Foreign Quarterly Review* に掲載した。Marion Reid の *A Plea for Woman* は、スコットランドの外科医で、売春婦問題の原因および解決に向けて貢献したことで知られる William Tait によって 1843 年に出版され、以後 1845 年、1850 年代

ーツのフェミニズムにおける見解を、“she had no sympathy”と述べ、“Her conception of woman’s sphere of influence and activities was what is now unhappily considered ‘old fashioned’” (*Osborne Papers*, Vol. VII, Add. MS. 46406B, f. 166) と記している。じっさい、オズボーンに限らず、クーツに近いセント・ヘリア男爵夫人 (Lady Baroness St Helier) は、“she was in opposition to all the later developments of the women’s question” (Orton 46) と言明している。クーツは、子どもの頃から、自宅にはいつも財政界の有力者たちに囲まれる生活で、また相続を受けてからは、銀行を切り盛りするトップたちと過ごす時間が多かった。それ故、彼女は、女性との交友より男性との交友を好んだという (Orton 45)。

こうして見てみると、売春婦たちへの慈善を敢行するにあたって、クーツのなかに占められていたのは、その強い宗教心とノブレスオブリージュとしての社会的責任だったのだろう。よって、女性たちに寄せるべき「愛情」や「同情」といった感情とは一線を画すものだったのかもしれない。

もちろん、売春婦の更生施設の設立を企図したクーツは、彼女たちの更生の可能性を否定している訳ではない。しかし、売春婦に対して彼女が語ったという “Test for yourselves the reality of your repentance and your power of resisting temptation,” (*Letters* 4: 588) という言葉からは、ディケンズとは異なり、男性の誘惑よりも女性の側の責任を追及し、罪の悔い改めを求める姿勢が見られるのも確かである。その点で、クーツの売春婦に対する姿勢には、エスタに罪の償いを押し付け

と再版が繰り返されるが、英国よりもアメリカ合衆国で多く読まれ、40 年代後半のアメリカでの女性参政権運動に影響を与えた (Reid Foreword V)。

たバーバリーのみならず、ヴィクトリア朝の体面を汚したデドロック夫人を「罪の女」と見て、自身が体現する法秩序の支配下に置こうとしたタルキングホーンにもつながるものが示されている。デドロック夫人の秘密をめぐる夫人とタルキングホーンとの対決、そして、そのタルキングホーン殺害の罪を着せられた夫人がついには生きる望みを奪われて追い詰められてゆく様子を淡々と描きだしてゆく三人称の語りの世界は、慈善家クーツの中にさえ密かに浸透している当時の支配的なイデオロギーを鋭くえぐり出すとともに、ユーレイニア・コテッジの退所後、再び現実世界を生きなければならない売春婦を待ち受ける厳しい現実をも示唆していたと言える。

こうした冷酷な現実を描く一方で、ディケンズはデドロック夫人の物語を三人称の語りの中には閉じ込めず、その同じ事象を、彼女の不義の証である私生児エスタの語りを通して、異なる角度から提示した。養母であるバーバリーに、誕生日が来る度に“Your mother, is your disgrace, and you were hers.” (30)と言われて育ったエスタは、この声に悩まされ、“I would try as hard as ever I could to repair the fault I had been born with (of which I confessedly felt guilty and yet innocent)” (31)と、絶えず自分自身に関して半信半疑の状態に置かれていた。そして、その彼女の姿勢が、批評家の間でも議論となる、あまりに慎み深い、じれったいような語り口調に反映されてもいるのである。ハートリーは、このエスタの「罪の意識」に着目し、彼女の口調を、秘密の流出を恐れる不安の声とみる (163)。ヒラリー・ショア (Hilary M. Schor) は、エスタの語り口は当時の一般的な女性たちの口調

を反映させたものだとし、女性の置かれていた社会的立場を軸に考察している（101-04）。一方でエレノア・サロット（Eleanor Salotto）は、作家がエスタの女性らしさを誇張することにより、表向きは理想的な女性像を真似ながらじつはそれを覆す主張を込めた“masquerade”と論じている（333）。このようにエスタの語りの意義をめぐる解釈が分かれるのはその特異性を示していることに他ならないが、作家はそのエスタを通して何を伝えようとしたのか。

物語は、エスタが自身の出生の秘密にたどり着き、それと同時に、伯母によって背負わされた母親の罪を克服して、“I should not be punished for birth”（587）と自己の潔白を確信するに至る過程を示すのだが、このエスタのあり方は、おぞましい過去を乗り越えるべきユーレイニアの女性たちの境遇にも一致する。本論文の第三章において『デイヴッド・コパフィールド』では、「過去」がスキャンダルとして拡散することを懸念する作家の視点について述べた。そして実際、ディケンズ自身も靴墨工場に働きに出された過去をひた隠しにしてきた経験を持つ。したがって、売春婦に対する彼の姿勢には、彼女たちと同じく克服すべき過去を持つ彼自身の思いが投影されていると言える。しかし、『デイヴィッド・コパフィールド』とは異なり、『荒涼館』では、「過去」を隠蔽することではなく、どのように克服するかには作家の視点は置かれているのである。罪の意識を植えつけられて育ったエスタが、過去から解放される過程を語った『荒涼館』の物語は、同じく克服しなければならない過去を持っていたディケンズが、自身の体験をエスタに投影したものとも言えるだろう。自身の辛い思いを売春婦たちのな

かに見出し、それを当事者である弱い立場の女性の視点から語る。そのことこそ、隠すべき過去を抱えていたディケンズにとって、意味のあることだったのではないか。

ディケンズとエスタの共通点として、エスタには「書ける」スキルが特徴づけられていることに注目したい。「書くこと」は作家自身が若かった頃、労働者階級への転落とそこからの再起をかけて、身を立てるために一心不乱となって身に付けた技術であり、それが速記者として果ては小説家へと実を結んだ技術でもある。作家にとって「書くこと」はまさしく「生きること」であり、その意味を示唆するエピソードが物語には散見される。エスタがメイドのチャーリー（Charlotte Neckett）に書く技術を教授している時のこと、エスタはうまく書けないチャーリーに、“seemed to have no natural power over a pen”（486）と、ふと呟いている。この“power”という男性的な語はエスタのその口調とは対照的であるが、書くことはペンをコントロールすることであり、ここに作家の生き方が投影されているように思われる。第一章で述べたが、ディケンズはユーレイニア・コテッジの意義として、“self-respect”や“self-restraint”（*Letters* 4: 552）を育む場と主張した。つまり、ディケンズにとって生きることは能動的でなければならないのである。

この生き方は、物語のなかで他の女性たちをとおして提言されてもいる。エスタの友人であるジェリビー夫人（Mrs Jellyby）の長女キャディ（Caddy）は、母の慈善事業の手伝いから書く技術に長けている。ところが、夫となるプリンス

(Prince Turvelop) は、ジョージ 4 世を敬愛する父親から「立ち振る舞い」だけを教わり成長したため、書くことができない。よって、世間知らずの文字の書けない夫をキャディが支えてゆく。加えて、エスタが散歩中に遭遇したある結婚式での一幕がある。エスタはその花嫁を知っていて、とりわけ学校では優秀な成績を収めていたことを覚えていた。ところが、式が佳境に入り二人にペンが手渡されて、先ず新郎が結婚証明書にサインをするのであるが自分の名前を「書くこと」ができずマークで記した。つづく新婦も本当は文字が書けるにもかかわらず夫と同様にマークを記し、驚いたエスタに“he can't write yet – he's going to learn of me –” (575) と囁いた。彼女の高潔さにエスタは胸を打たれるのであるが、このように女性が男性に頼るという従来の受け身ではない、むしろ男性をリードしてゆくような生き方が前景化されているのである。

じっさい、1841 年ごろの婚姻届けを基に算出された「書ける」識字率は、男性が 67% で女性は 51% と、もっぱら女性の割合が低い (Eliot 12-14)。¹⁶ とすると、物語で紹介される「書くこと」を身に付けた能動的な女性の生き方は、じつはディケンズの個人的な強い思い入れと察せられて、ここに、ユーレイニアの更生方法をめぐって「読む」ことを重視するクーツとの対比が浮かび上がる。¹⁷ 聖

¹⁶ この時代「読むこと」と「書くこと」は別のスキルであって、「計算」や「書くこと」は上級職に必要とされるスキルだったため、誰もが最初に習うのは、聖書に必要とされる神の言葉を「読むこと」であった (Eliot 12-14)。

¹⁷ クーツが書くことに問題を抱えていたことは序章にて述べたとおりである。ディケンズも “illegible” と少々からかい気味に手紙で指摘することがあった (*Letters* 5: 416)。Edgar Johnson は、ディケンズが時折諧謔的にクーツの筆跡について指摘することを、ディケンズのクーツに対する “jesting” のひとつと説明している (130)。

書を読み、神の言葉を受け入れる。つまり「読む」ことは、受け身的な生き方を推奨するものであり、「書くこと」を重視するディケンズの考えとは相対立するものである。

さらには、ディケンズとエスタとの共通点は、この物語に頻繁に書き込まれる「慈善」に対する姿勢からも読み取ることができる。たとえば、成長したエスタが最初に立ち寄る慈善家ジェリビー夫人の家。自身の家族を犠牲にして、遠い世界であるアフリカの人々の救済に夢中になるジェリビー夫人の慈善を、三人称の語り手は、「望遠鏡的博愛」と呼んで皮肉っている。母親のための口述筆記で疲れ果てた長女のキャディは、慈善のために“The whole house is disgraceful” (62) とエスタに訴え、ジェリビー夫人が「人類の兄弟愛」について懸命に語る間に子どもたちはエスタの話す民話『長靴をはいた猫』の方に夢中になる (58)。ここに、ユーレイニアの更生方法の核を聖書に置こうとするクーツへの皮肉を見ることも可能だ。しかし、さらに注意すべきは、ジェリビー夫人の慈善が、家政の否定につながっていることだ。

夫人とアフリカのコーヒー栽培や人類の同胞愛について毎日のように話し込むクウェル氏をはじめ、キャディの結婚式に出席した慈善家たちの主張に耳を傾けていたエスタは、“Such a mean mission as the domestic mission, was the very last thing to be endured among them.” (482) と、彼らに対して皮肉交じりの感想を漏らす。母親に反発するキャディは結婚前にエスタから「家政」について学ぼうとするが、この「家政」の手腕こそがエスタのアイデンティティを支えている重要

な要素とされることを考えると、そこにもまたエスタとユーレイニア慈善におけるディケンズの主張とのつながりを見出すことが可能となる。というのも、ディケンズが考案した更生方法の核を成していたのが、じつは「家政」の訓練、つまり彼女たちが家庭に入ることを考慮して組まれた彼女たちの日課だったからである。将来彼女たちが家庭に入ることを考慮して組まれている彼女たちの日課は、何よりもその綿密な時間配分が特徴としてあげられる。ハートリーは、時間管理におけるディケンズの徹底を“he could look at his watch and know what they were doing every half-hour of the day.” (57) と伝えている。

秩序と時間厳守が強調されているこのホームの日課は、エスタが送られた学校グリーンリーフでの日課を描く“Nothing could be more precise, exact, and orderly than Greenleaf. [...] everything was done at its appointed moment.” (39) という描写とぴったり一致する。不義の子としてバーバリーから母親の罪のつぐないを押し付けられて育ったエスタが、伯母の死後グリーンリーフでの新たな教育を通して「家政」の能力を身に付け、最終的に母親の罪から解放されて幸せな家庭を築く物語の展開には、ユーレイニアの女性たちの現世での「やり直し」、すなわち結婚して家庭に入ることは論外と考えるクーツとの意見の食い違いを見るなかで、自己の運営方針の正当性を信じるディケンズの密かな主張が込められていたと言える。

3. ディケンズの揺らぎ

このように、『荒涼館』には、ユーレイニア慈善におけるディケンズの主張が様々な形で浸透している。しかし、ユーレイニア慈善におけるディケンズとクーツとの意見の食い違いが、デドロック夫人の過去の秘密とその娘エスタをめぐる二人の異なる語り手による、二つの異なる立場の葛藤によって表されているにしても、ディケンズが何故わざわざ自分の立場や視点をエスタという自分とは異なる性別の女性に託して語ったかという問題は、さらなる説明を必要とする。そこで注意したいのが、このユーレイニア慈善において発案者ですべての必要な資本を提供したのが女性であるクーツであって、男性の権威主義的な社会と称されるヴィクトリア朝社会にあって、ディケンズが資本を提供するクーツという女性の自分とは異なる意見に耳を傾けなければならなかったという事実である。

先に述べてきたとおり、クーツは、長子相続制が当然の社会にあって、若干 23 歳にして祖母のセント・オルバンズ公爵夫人 (Duchess of St Albans) から大きな財を譲り受けた、当時としては極めてめずらしい存在で、相続後は、クーツ銀行経営者のひとりとして共同経営者たちとともに、いわゆる男性の世界で、その手腕を果敢に発揮していったという (*Osborne Papers*, Vol. IV, Add. MS. 46405A, ff. 177-78)。つまり、女性でありながら、男性的な役割を身に纏った女性でもあったのだ。この彼女と、幼い時に貧困生活を体験し、作家として成功してからも、ロンドンの路地裏をつぶさに歩くことで貧困の把握に努めてきたディケンズの間には、施設の運営をめぐる、時として意見の食い違いが生じた。しかし、た

たとえばディケンズが主張するマークシステムに終始難色を見せたクーツに、ディケンズが、1847 年 10 月の書簡で一旦自己の主張を引き下げたことや (*Letters* 5:178)、また、1853 年に『ハウスホールド・ワーズ』誌に掲載したユーレイニア・コテッジの記事をめぐってのクーツとのやりとり“Everything shall be stated as you wish” (*Letters* 7:56) が示すように、ディケンズは資金提供者であるクーツの同意なしに事業を進めることはかなわなかったようだ。結局、再三の意見交換の末、両者は合意に至るが、この間にディケンズが経験したクーツとの間の男女の役割分担の転倒の意識が、二人の語り手を設定した上で、男性である自己をエスタという女性の語り手に投影するというこの小説の構成に影響したのではないか。

もっとも、このように述べると、ユーレイニア慈善において、ディケンズは徹底して売春婦たちを擁護する側、そしてクーツは彼女たちの過去を糾弾する当時の支配階級の側に立っていたように見えるかもしれない。しかし、ディケンズの売春婦たちに対する更生方法が、当時の社会が規定した男女間の役割分担の基準を超えたラディカルな姿勢のように見えながら、その分刻みの厳しい時間配分と秩序の遵守によってやはり男性である自己の基準に則した支配階級的、あるいは非現実的な側面を持っていたことも否めない。ディケンズは『ハウスホールド・ワーズ』誌に 1853 年 4 月 23 日に“Home for Homeless Women” (*Letters* 7:56) と題したホームの宣伝を兼ねた記事を掲載しながらも、じつは同時点で、最初に入居していた 56 名中 7 名が自ら退所を希望し、別の 7 名は逃亡、そして 10 名が強制退去という失態も抱えていたのである。腐敗した外の公的な領域で

生存競争を繰り広げる男性を、女性の守る家庭が浄化するといった有機的な循環の仕組み、その明確に男女間で分断された社会にあって、女でありながら本来あるべき境界線を越えて公的な領域に踏み込んでしまった売春婦の救済を、現実社会への復帰ではなくむしろ信仰を通しての精神的な慰めに見出そうとしたクーツの方が、その点では現実的でもあり、自らに課せられた「罪」の重荷と向き合い、「勤勉」や「従順」そして「親切」を身につけるべく、ひたすら義務の道を歩むエスタの在り方に近いと言えるかもしれない。

じっさい、『荒涼館』においても、デドロック夫人の過去の罪は娘エスタ、さらには夫であるサー・デドロック（Sir Dedlock）などの私的な領域においては完全な許しを得られるものの、彼女は社会という公的領域の中では、「堕ちた女」に相応しい煉瓦職人の衣服を身にまとった姿で貧民墓地の前で息絶える。つまり、ディケンズは、一方では「堕ちた女」の救済と社会復帰を理想として謳いながら、その作品の中でさえ、実際に「堕ちた女」となったデドロック夫人に現実世界における救済を示すことはしないという矛盾を示していたことになる。

こう考えると、ディケンズも、じつは自分の理想が現実社会では実現できないということを密かに意識していたとも言えそう。じっさい、母親の罪を背負わされたエスタが、家政の手腕を得ることでその罪の意識から解放され、主婦となって幸福を掴むというこの物語において、彼女もまた浮浪児のジョー（Jo）から移された天然痘の病によって生命の危険に曝されるし、母親譲りの美貌も失って、一時はアラン（Allan Woodcourt）への恋心を諦めかけもする。何よりも、エ

スタをその善意で救ったジャーンディスは、旧知のハロルド・スキンプール（Harold Skimpole）からその日記に“Jarndyce, in common with most other men I have known, is the Incarnation of Selfishness.”（935）と、慈善を受けていた側から批判的に記されていたことが公にされる。物語の終わりに、家政を立派に成し遂げてヨークシャーの荒涼館の女主人となったエスタが夫のアランから綺麗になったと称賛されるものの“even supposing”（989）という少し曖昧な表現で物語を締めくくるのもまた、売春婦の更生問題に対して作家が無意識の内に抱き続けた価値観の揺らぎを表している。

ユーレイニア慈善の開始から 5 年の月日を経て創作されたこの作品は、司法批判の「社会小説」と見せながら、じつは、当時ディケンズの心を占めていた「堕ちた女性」の問題を取り上げた作品と言える。それを二人の語り手から異なる視点で語らせたということ、そして何よりもディケンズがエスタという女性の視点を自分の考えを代弁する形で組み入れたことに大きな意味がある。一方で、物語の最後に浮かび上がるディケンズの迷いのような「揺らぎ」は、自身の更生方法に対する不確かさが如実に表れたものであろう。ディケンズのその不確実な思いは、次作品『ハード・タイムズ』において、事実偏重主義を主張する学校のシステムに投影され、それを指揮するグラッドグラインド校長をとおしてその是非が問われてゆく。

第五章

『ハード・タイムズ』 (*Hard Times*, 1854)

—— 教育システム ——

『ハード・タイムズ』は、ディケンズが主宰、編集する週刊雑誌『ハウスホルド・ワーズ』誌 (*Household Words*) に 1854 年 4 月 1 日から 8 月 12 日まで掲載された作品である。これまで、たとえば『ドンビー父子』では女性の自由意志や社会を転覆させる力の可能性を、『デイヴィッド・コパフィールド』では堕ちた女性の海外移住を、そして『荒涼館』では女性の贖罪の在り方とというように、ユーレイニア慈善を開始して以来、作家は物語を通して女性の新たな生き方を様々な形で提示してきた。しかし、『ハード・タイムズ』では、これまでのような新しい何かを求めるというよりも、ある工業都市で強いられていた教育システムに苦しむ人々を取り上げて、そのシステムを糾弾することに作家の視点は置かれている。物語の冒頭では、工業都市コークタウンの学校教育の在り方が生々しく描写され、「訓練所」のような色合いを帯びた教室では、無垢な子どもたちが、グラッドグラインド校長 (Thomas Gradgrind) から「事実」に偏った教育を叩き込まれている。校長は、定規を振りかざし、秤を持ち歩きポケットにはいつも掛け算表を忍ばせて、人生において必要なものは「事実」と「数字」だけだと、人間の性質や感情さえも数字に置き換えてしまうような人物だ。この事実一辺倒の高圧的な教育方針を展開するグラッドグラインド校長には、「最大多数

の最大幸福」を提唱した政治哲学者ジェレミー・ベンサム (Jeremy Bentham) の、人間の快苦を量的に捉える功利主義の精神が示唆されていることから、本作品は功利主義への諷刺として論じられることが多い。¹ なかでも、キャサリーン・ブレイク (Kathleen Blake) は、ディケンズのグラッドグラインド (ベンサム) の方針に対する一方的な批判と論じる傾向は、その時代の基盤にあった“utility”の意義を損なうと指摘し、時代背景に注視する読みを展開する (26)。本章では、そのブレイクの指摘を踏まえ、産業化が盛んになりポリティカル・エコノミーが重んじられる社会にあって、ディケンズが目指した大衆への教育の在り方を、彼の慈善精神の一端を示すものとして取り上げたうえで、このディケンズが考える教育方針とユーレイニア・コテッジにおける運営方針、とりわけ売春婦の更生にまつわる教育方針との関連性を考察したい。

1. 大衆の学校教育に向けて

英国では、1870 年の「教育法」の制定により「義務教育」が開始された。しかし、国が国民の初等教育に向けて公的資金を費やし始めたのは 1834 年に遡る。その後、段階的に公的資金の増額、学校調査官の設置、そして教員の養成など、義務教育に至るまでの進展が積み重ねられていったのである (*Osborne Papers*, Vol. VII, Add. MS. 46406B, ff. 1-2)。チャールズ・オズボーン (Charles Churchill

¹ たとえば、時代背景と功利主義的教育の関係においては、Leavis 187-212, Blake 42-81, 玉井 165-180 を参照。

Osborne) は、自身の回顧録に 1839 年から 1870 年までを、国が教育の重要性に目覚めた画期的な時代であったと記し、ディケンズの貧民学校(Ragged Schools)への訪問を大衆教育に向けた熱心な調査と評価している (*Osborne Papers*, Vol. VII, Add. MS. 46406B, ff. 8-10)。

ディケンズは、貧困層の不幸や不平等、さらには暴力や犯罪の根源には「教育」の欠如があると考えていた。したがって、個人が適切な教育を享受することは彼らの境遇の改善につながると信じていたのである (Wilson 182)。² 1843 年 10 月 5 日に開催された学術振興会マンチェスター・アシニアム (Manchester Athenaeum) では、ディケンズは聴衆に教育費の寄付を呼びかけ、1852 年マンチェスターで初となった無料図書館 (Free Library) の設立のオープンにも駆けつけた。

本論文の序章にて紹介したディケンズ自らがその改善に向けて立ち上がったロンドンのフィールド・レーン (Field Lane, 現 Farringdon Road) 貧民学校は、ユーレイニア・コテッジ以前にクーツ (Angela Burdett-Coutts) と本格的に二人で取り組んだ最初の慈善であった。この時、ディケンズはここで行われている一方的な宗教教育に衝撃を受けた。そこでは、読むことすら出来ない子どもたちに難解な言葉を用いた教義がそのまま伝えられていたのである。ディケンズは、子ども

² 1875 年の廃止まで、主従法 (Master and Servant Law) によって雇用主の権限は守られていた。雇用主は過酷な労働条件を強いて従業員たちは搾取され、逃げ出すことは契約違反となり、雇用主は従業員を刑事訴追し厳しく罰することができた (Naidu 107-08)。ディケンズは、そのような労働者たちへの非道な扱いに対して、彼らが暴力や犯罪の手段に訴えるのではなく「教育」を享受すればそれらの抑止力になると考えた (Wilson 227-28)。

たちにとってそのような教育は何ら有益なことにはつながらないと、その改善をクーツに求めた (*Letters* 3: 562-64)。³ そして、このクーツとのやり取りをディケンズは友人フォスター (John Foster) に知らせてもいるから、いかに当時のディケンズが熱心にその事業に取り組んでいたかがわかる。フォスターへの手紙では、クーツに “it was of immense importance they should be washed.” (*Letters* 3: 572) ⁴ と、自身がクーツに助言した内容にまで触れていて、慈善においてディケンズは、自分こそがクーツの指南役であると自負するような含みさえ感じられる。果たして、この貧民学校の視察は、その後の作家にどのような影響を及ぼし、売春婦の更生のための教育に取り組んでいた最中に書かれ、子どもたちの教育をテーマとする『ハード・タイムズ』にどのように反映されたのだろうか。以下、作品を具体的に見てみたい。

『ハード・タイムズ』の登場人物たちは大きく2つのグループに分けられる。先のグラッドグラインド校長のポリシーである何事も数字に換算して物事を考える「頭」のグループと、想像力や思いやりに溢れる感情豊かな「心」のグループである。この対照的な陣営から、一見したところディケンズの教育論とは、「頭」の教育に偏ることを否定して、「心」の教育の必要性を訴えるものと考え

³ 貧困は罪であり彼らの罪は来世にまで続くなどといった内容にディケンズは嫌悪感を露わにしている。

⁴ このクーツとのやり取りが『デイヴィッド・コパフィールド』第13章の “The Sequel of My Resolution” (204) における、デイヴィッドと彼の叔母ベッツィそして同居者ディックとの会話に反映されている。本論文の第二章『ドンビー父子』脚注番号14を参照。

られる。⁵ しかし、このわかり易い対立構造の背後には、そうした二項対立的な考えとは異なる、教育に対する作家の複雑な思いが込められているように思われる。その意図するところを探るために、コークタウン特有の学校教育を受けた登場人物たちの状況から見てゆきたい。

先ず、グラッドグラインドの学校の優等生と評される生徒がビットザー（Bitzer）である。彼によると、「馬」は四足獣、草食性、40本の歯と、その外観的な事実、あるいは辞書的な定義のみこそが馬を理解するのに必要な要素であり、それ以上の、あるいはそれ以下のそれぞれの馬が個別に持つ性質などは不要と考える。そんな彼をディケンズは、“Light-eyed, and light-haired, afterwards Light Porter,” (5) と紹介しているのであるが、彼の描写に繰り返される‘light’という言葉によって示唆されるのは、そうした理論上の事実の世界ですべてが事足りると思っているビットザーの、延いてはグラッドグラインドの表層的なあり方だろう。そのことを端的に表しているのが、以下の出来事である。

学校教育を終えたビットザーはグラッドグラインドの親友であるバウンダービー氏（Mr Bounderby）の銀行で日々何事もなく働いているのだが、ある強盗事件が発覚する。犯人は、皮肉なことに、恩師グラッドグラインド校長の息子トム（Thomas）で、横領を働いた息子トムを逃がしてほしいとビットザーは恩師から懇願されるが、自身の銀行での昇進には代えられないと迷うこともなく断る。

⁵ たとえば、Jan B. Gordon は、コークタウンの街全体を“Hard”と“Soft”に分類し、対立する側面と共通する側面を詳細し、それぞれの役割を論じている（1-29）。

“have you a heart?” (225) とグラッドグラインドから尋ねられると、その意味を正しく解せず、ウィリアム・ハーヴェイ (William Harvey) の血液循環説と結び付ける。ハーヴェイは、心臓は血液を送り出す一方通行の臓器であるという説を覆し、血液は送り出されたあと元の心臓に戻ることを突き止めて、医学界に画期的な進展をもたらした解剖学者である。⁶ ビッツアーはそのハーヴェイの説に依拠する形で、「心」を「心臓」と取り違えて“The circulation, sir, [...] the facts established by Harvey. [...] I have a heart.” (225) と応えてしまうのである。

そして、このグラッドグラインドの教育方針にもっとも苦しむことになるのが娘のルイーザ (Luisa) と息子のトムである。彼女は幼いころから “my better angel into a demon.” (170) と吐露するように、心に湧き上がる感情を父の教育の原則によって抑制してきた。その結果、彼女が “doubting”、“misbelieving”、“despising”、そして “regretting” (170) と描かれるような負の感情に支配されてしまうのは大きな皮肉がある。とりわけ、彼女がグラッドグラインドの娘に生まれてきたことを呪うとまで告げる出来事がバウンダビーとの政略結婚である。グラッドグラインドは、娘の成長を見極めると、ルイーザとは親子ほどの年齢差はあるがコークタウンの有力者であるバウンダビーとの結婚話を持ち掛ける。“do you think I love Mr Bounderby?” (76) と戸惑う娘に対してグラッドグラインドは、“Confining yourself rigidly to Fact,” (77) と、彼にほとんど生理的な嫌悪感を抱いている娘の

⁶ William Harvey (1578-1657) は、血液の循環と心臓の機能を発見した医師である (HT 243)。

感情を無意味なものとする彼の原則を持ってその結婚を同意させるのである。言うまでもなく、この結婚は破綻、ルイーザは統計学の調査でバウンダビーのもとに身を寄せていたジェームズ・ハートハウス（James Harthouse）の手中に堕ちそうになる。

姉のルイーザと同様の教育が弟のトムにも浸透していた。ハートハウスに海外での経験を尋ねられ、“no such luck”（104）という彼は、“I am hard up, and bothered out of my life.”（139）と自らを振り返る。つまり、彼も姉と同様に心身の自由が束縛されて、親の定めた人生を生かされていたのである。結果、父親のもとを離れることになったトムが為出かしたことは、横領とその責任を工場で働く貧しい労働者に着せたことだった。

グラッドグラインドの教えを全うした彼らには、人間関係をうまく構築してゆく術を持っていないことが示唆されているわけで、グラッドグラインド校長の教育システムに対するディケンズの警告が見られる。送り出された血液は元の心臓に戻るというハーヴェイの血液循環についての説は先に述べたところであるが、優等生ビッツァーのいわゆる恩を仇で返す様子は、教育の「提供者」にその利益が還元された痛烈なアイロニーである。

この描写はまた、「産業化」という時代の情勢の中での「教育」の在り方におけるディケンズの問題意識を示唆するものではないだろうか。というのも、当時の「教育」とは、支配階級の人々が自分たちの産業を推進するために有効な働き手を育成するための訓練とその働き手を支配するために必要な規律を提供する

システムであったからだ。⁷ そのことは、じつは当時の教育のあり方が、教育を受ける当事者たちを中心に組まれたものではないことを物語る。⁸ とすると、これはディケンズが貧民学校を視察した際に目の当たりにした、難解で一方的な宗教教育への批判にも通じるものである。作品中のグラッドグラインドを中心とする学校教育に対する辛辣な風刺をとおして、ディケンズは「教育の権力」を十分に認識し、それを糾弾している。それは、たとえばベンサムが、“at the public expense men ought to be taught nothing but what is really useful” (Taylor 23) と提唱し、労働者階級のモラルの向上を目指し、国のあるいは社会の安定に繋がる教育でなければならないとする考えと同質であり、この教育システムにディケンズは異議を唱えているのである。

そして、そんなグラッドグラインドの教育システムに対抗すべく、救い手とし

⁷ 18 世紀中ごろに始まった産業革命によって都会へ移り住む人口の流動が起こり、農業を中心とする生活様式から「時間軸」を中心とする生活様式への変化があった。その生活様式に適応するために、学校は自己規律を促進させる場としての役割を担っていた (Stephens 59-60)。物語ではコークタウンの工場町の様子について、“to do the same work, and to whom every day was the same as yesterday and to-morrow, and every year the counterpart of the last and the next.” (18) と時間軸に厳密に沿った毎日が同じである様子が描かれている。ほか Lawson 227-28 を参照。

⁸ Raymond Williams によるとイギリスには“public educators”、“industrial trainers”、そして“old humanists”と三派の考え方があり、この時代は普通教育のカリキュラムにおいて互いに妥協点を埋め合わせながら議論が交わされていたものの、なかでも“industrial trainers”の意見が支配的で、大衆には働き手として担うための訓練と規律を主張したという (140-142)。教育とは、とりわけその内容は歴史的な変動によって大きく左右されることから、実は特定の取捨選択であり、さまざまな強調や脱落があるものだという。しかし、その時代の「社会的性格」あるいは「文化のパターン」に適応するために、誰にとっても必要となる一般的訓練およびそれに随従するものが最良の教育であると信じることは誤りではないとされる (145-146)。

て登場するのが「心」の側のシシー（Cecilia Jupe）やサーカス団のスリアリー（Sleary）である。サーカス団で育ったシシーは、父親の希望でグラッドグラインドの学校に入学してみたものの、結局のところ彼の与える学校教育を身に付けることはなく、グラッドグラインド家のメイドとして住み込む。しかし、彼女の同居によって、グラッドグラインド夫人は安らぎを覚え、父の教育のあり方に心を閉ざしていた娘ルイーザは心を開き、苦悩に満ちた家族のなかに穏やかな空気が流れ込むのである。また、銀行で横領を働いたグラッドグラインドの息子トムを海外へ逃亡させる手伝いをしたのはスリアリーであった。

このシシーには人々を癒す力のような特質が込められているわけであるが、シシーはグラッドグラインドの学校で学ぶ「事実」や「統計学」の授業内容に馴染めなかった。さらには、彼女が愛読していた『アラビアンナイト』のような想像力を刺激する物語は有害書物としてグラッドグラインド校長に禁止されていた。しかし、この作品はシシーと彼女の父親にとっては大切な書物であった。道化の父は、すでに年老いてきて体がうまく動かず、ステージに立っても観客から思うような反応をひきだせず、落ち込んで涙する日々が多々あった。そんなとき娘が『アラビアンナイト』の読み聞かせを行うと、父は、次はどうなるのか姫は生き延びることができるのだろうか、はらはらときどきしながら物語の展開に熱中し、その日に起こった辛いことなどすっかり忘れてしまうのであった。このように、読み聞かせが引き起こす喜びは「心」を動かすもので、それはまたサーカスを見るときに人々の中に湧き上がる興奮や心の高鳴りと同様のものでは

る。シシーはグラッドグラインドが重視する「数式」に対して、サーカスが象徴する想像力や「物語」が持つ力を体現する人物であって、その彼女が体現する力を強調するのがディケンズの意図とみえる。⁹ しかし、果たしてそれだけか。彼女のこの特性をさらに掘り下げて考えてみたい。

ディケンズは『ハード・タイムズ』の連載が始まる少し前の1852年の暮れと1854年1月2日の2回にわたって、『クリスマス・キャロル』の読み聞かせをバーミンガムで働く労働者たち向けに行っている。次の手紙は、読み聞かせが終わったあとにクーツに宛てたものであるが、そこに作家としての複雑な思いが綴られていることに注意したい。

And my creed in the exercise of that profession is, that literature cannot be too faithful to the people in return – cannot too ardently advocate the cause of their advancement, happiness, and prosperity. I have heard it sometimes said...that literature has suffered from this change, that it has degenerated by being made cheaper. (*Letters* 7: 3) ¹⁰

ディケンズは、産業化が進む社会において「小説」の位置付けに変化が及んでいることを憂いている。就労の規律に則った「時間軸」に合わせた働き方を身に付けるための学校教育、つまり、それこそがグラッドグラインド学校のシステムで

⁹ たとえば、Leavis 227-248、ほか Wilson 235-241 を参照。

¹⁰ バーミンガムでの読み聞かせは翌年も行い、集客数2千5百人という結果にとってもご満悦な様子で1854年1月2日、再びクーツに報告している (*Letters* 7: 234)。ちょうど『ハード・タイムズ』の連載が始まる少し前のことである。

あり、文学はその評価を損なって苦しんでいるのだ。とすると、『ハード・タイムズ』における数式と物語の対立的な構造の裏には、文学が本来的に人々の精神の育成に与える効果やその力を主張したいディケンズの意図があったということになる。

さらには、そこには功利主義を説くベンサムの教育方式に対する違和感があったことも確かだろう。つまり、大衆のモラルを強化する意図から、読み物は“axiomatic”なものが推奨されて、“neither dramatic poetry nor novels have any occasion to be taught”と提唱された (Taylor 21-23)。なぜならば、そうした文学は“false words”であり“false ideas of things”を生み出すからだ (Taylor 22)。グラッドグラインドの学校では『アラビアンナイト』が禁止書物とされていた。空想を頭に描いてはいけない、グラッドグラインド校長の推し進める「事実」こそが教育の中核でなければならないとされていた。サーカス団の団長であるスリアリーが、“People must be amused. They can’t be always learning, nor yet they can’t be always working, they aren’t made for it.” (230) と、グラッドグラインドを論ずる言葉は、産業化時代の風潮に抗う、まさに小説の役割を意識したディケンズ自身の言葉と解せる。とすると、シシーに込められたものは、教育そのものへの完全な否定ではなくて、教育における文学、あるいは小説の担うべき役割の重要性であったと考えられる。そして、ディケンズはその重要性を伝えるべく、「頭の教育」対「心の教育」の決着を、グラッドグラインドの改心をもって収拾させた。

しかし、これには問題がある。なぜならば、グラッドグラインドは実利主義の

権化であり、ニコラス・マーシュ (Nicholas Marsh) が、“how can this man, the very champion of ‘facts’, suddenly become gentle, regretful and ready to concede the error of his whole life?” (113) と指摘するように、彼の改心はあまりに唐突で不可解である。どうしてこのような短絡的なプロットが描かれたのだろうか。

じつは、この時期ディケンズは実生活において長男チャーリー (Charley Culliford Boz Dickens) の教育と売春婦たちの更生事業に携わり、作家自身が教育の提供者側に立っていた。彼自身のホーム、つまり、家庭内での教育とディケンズがホームと呼ぼうとしたユーレイニア・コテッジでの売春婦の教育の二つに携わっていたことになる。これらの出来事をたどりながら、作家が教育の提供者としてどのような教育を実際に推し進めていたのか、ディケンズとグラッドグラインドの教育システムとの関連性、そしてグラッドグラインドの不自然とも見える改心とディケンズの教育提供者としてのつながりを次に見てゆきたい。

2. 息子の教育とユーレイニア・コテッジの訓練

1) 息子の教育

ディケンズが大衆の教育において大きな関心を寄せるようになった要因の一つには、長男チャーリーの誕生があげられるだろう。父親として息子の教育への責任が生まれたわけである。しかも、そのチャーリーの教育には、ディケンズとクーツの交わりが大きく影響していたことは注目に値する。チャーリーは 1837 年 1 月 6 日の生まれで、6 歳になると、彼の成長ぶりがクーツへの手紙 (1843 年

7月28日付け)のなかで初めて触れられている (*Letters* 3: 533)。そして、その2カ月後にディケンズは貧民学校を訪問し、クーツへ貧民学校に向けた慈善を依頼したのである。そのことは、息子の将来に向けての教育を思案するなかで、父親としての責任感と慈善事業が重ね合わされていたことを示唆するものだろう。

それから2年後の1845年のことである。クーツがチャーリーのパブリック・スクール (Public School) への入学を勧めて、教育費用を負担したいとの申し出があった。ディケンズの喜びようは次の返信から容易に感じ取れる。

I could nothing better for him than to accept – I could do nothing half so good for him as to accept – your generous offer. My object is, to make him a good man and a wise one; and to place him in the best position I can help him to, for the exercise of his abilities and acquirements. (*Letters* 4: 373)

ここには大きな感謝の気持ちが溢れんばかりに感じられるが、一方で、この文面からは、常に民衆の側に位置していたはずのディケンズが、「名門」という看板によって、しかも能力の開花のみならず知識の獲得の場としてパブリック・スクールを、自分の息子にとっての最良の教育機関であると考えていたという矛盾もうかがえる。

そして、翌年1846年のことである。クーツから売春婦たちの更生施設を設立したいと相談が持ち掛けられた。これがユーレイニア・コテッジ設立に到る慈善の始まりである。これにより、ディケンズの息子の教育にクーツが財政的に関わ

り、クーツの懸念する売春婦たちの更生にディケンズが実用的な知識をもって携わることになった。つまり、当時のディケンズは、息子の教育とユーレイニアの入所者の教育という二つの面において、クーツとの深い関係の中に置かれていたことになる。学校教育が人格の形成に多大な影響を与えることは、『ハード・タイムズ』におけるビッツァーやトム、そしてルイーザに見てきたところである。ユーレイニア慈善もそれ自体は学校ではないものの、学校と同様に、売春婦たちの更生施設として、彼女たちの教育、その人格の更生を請け負うわけであって、学校教育をテーマとするこの物語に彼が当時手掛けていたユーレイニア慈善の影響を探ることはあながち的外れとはいえないと思われる。

ユーレイニアの教育方針を論じる前に、先ず、息子の教育におけるディケンズの視点から見てゆきたい。チャーリーは 1849 年の暮れに名門イートン校 (Eton College) へ入学を果たした。ディケンズの期待通り、息子はそこで才能を発揮し、とりわけラテン語の詩が彼の得意科目となり、その優秀さは教師陣からは一目置かれる存在で校内では人気者となった。¹¹ そして、1852 年チャーリーが 15 歳になると、イートン校からチャーリーの今後について、あと 5 年はラテン語の詩の作成に従事するように告げられたのである。チャーリーの秀でたラテン語の成績に学校側が期待を込めたと見受けられるが、ディケンズは “not quite rational” (*Letters* 6: 646) とクーツに学校への失望感を露わにし、すぐさま息子を

¹¹ ディケンズはクーツへの報告に “I have excellent account of Charley at Eton,” (*Letters* 6: 513) と随分誇らしげである。

退学させてしまった。息子がラテン語を引き続き学ぶことをディケンズは拒絶したわけであるが、この出来事は、つまりディケンズがある意味で文学のような人文教育ではなく、実利的な教育を息子にとって重要と考えたことを示している。さらには、このディケンズの決断によって未だ 15 歳の息子から突然同年代の学友たちとの時間を奪ってしまったことにもなる。

息子の将来を見据えた教育をディケンズは模索することになるのであるが、事態はより複雑な方向へと傾いてゆく。父親として“I hope he will not be among anything but the best of men” (*Letters* 6: 763) と期待する長男に勧めたのは、実用性を重視した“commercial career” (*Letters* 6: 763, 808) への道であった。ところが、一方のチャーリーは軍隊への入隊を希望した。残念ながら、チャーリーの願いは聞き入れられず、クーツの説得によって彼は軍への入隊を諦め (*Letters* 6: 763)、父親の奨励する商人になるため次はドイツでの修業に従事することになった。

こうしたディケンズの姿勢から読み取れるのは、たとえば当時 “London bankers and City merchants were some of the wealthiest people in the country,” (Harrison 127) と言われるように、ディケンズも息子を実利的な世界におけるエリートにしたかったということである。それはまた『ハード・タイムズ』において、グラッドグラインドが息子トムの将来を銀行家のバウンダビーに託したことに通じている。しかし、こうした姿勢は当事者たちの思いを無視した親の意向にすぎず、その利益は当事者ではなく親の安心感へと還元される仕組みでしかなかった。

皮肉なことに、1854 年 1 月ドイツで修業中のチャーリーの先生から思いがけ

ない報告が届く。勉学への意欲が見られないこと、そして、本人が本当に「商人」になりたいのかどうか疑問であると告げられたのだ (*Letters* 7: 245)。この不測の事態は、ちょうど『ハード・タイムズ』の連載が開始される少し前に起こっていて、ディケンズはクーツに、“not aspiring, or imaginative in his own behalf.” (*Letters* 7: 246) と息子への不満を露わにしている。¹²

留意したいのは、事の次第とその責任の所在に関して、母親譲りの性分と、イートン校のシステムが息子のような性格に害を及ぼしたためだ (*Letters* 7: 244-246)、とディケンズが書き綴っている点だ。『ハード・タイムズ』に即してみると、古典語であるラテン語は「実用性」にはかなり乏しい科目となる。¹³ さらに、軍隊への入隊を希望する息子の思いのなかには、数式やお金といったディケンズが作品内で攻撃対象にしている要素は見られない。しかしながら、そんな息子に対して将来を見据えていないと落胆し、父親としては商人への道、つまりは実利、あるいは「頭の側」の教育をディケンズは勧めているのだ。ここに、物語と実生活においての矛盾が生じている。

結局のところ、チャーリーは再びドイツへ戻って勉学に励み、帰国後は引き続き商人としての道に進むためバーミンガムとロンドンでそれぞれビジネス教育を受けて国内外の市場について学んだ。そして、1855年18才で名門ベアリング

¹² Edgar Johnson は、この報告について、息子の能力に対して抱いていたディケンズの悩みが再燃してそれまで以上に彼を悩ますことになっただろうと述べている (254)。

¹³ ペンサムは“No Latin and Greek poetry is either so agreeable or so useful as what may be met with in English poetry.”と提唱した (Taylor 23)。当時の教育に関しては、Shuttleworth の *Public Education* を参照。

ス銀行（Barings Bank）への入行を果たしたのであるが、それは言い換えるならば、彼の教育の資金提供者であった銀行家クーツに、チャーリーの教育が還元されたような図式でもある。とすると、ディケンズ自身が、彼が自身の小説において批判した対象であるグラッドグラインドと同じ轍を踏んでしまったことになる。

これら一連の息子の教育に纏わる出来事をとおして明らかとなったのは、最良と期待していたパブリック・スクールのシステムがディケンズの期待していたものではなかったということ、そしてディケンズが最良と考える道に息子の資質などは十分に考慮せずに進ませたことであり、息子の自由は認めなかったということである。ディケンズが息子に強いたこの教育方針は、こうして見ると、じつは彼が『ハード・タイムズ』の中で批判したグラッドグラインドと息子トムとの関係を思い起させる。とすると、グラッドグラインドが物語において唐突な形で改心に及んだ背景には、じつはディケンズ自身のチャーリーに対する思いが込められているとは考えられないか。

奇妙なことに、物語では、グラッドグラインドが自身の非を直接詫びたのは娘のルイーザにである。父親によってトムと同様、感性を抑圧されたルイーザは、銀行家バウンダビーに嫁ぎ、そこで出会ったハートハウスの誘惑に陥り、もう少しで駆け落ちに至りそうになるのだが、最終的には実家に戻ることによって難を逃れる。このルイーザの転落と救済、さらにはグラッドグラインドの改心に重要な役割を果たすのが、グラッドグラインド家でメイドとして働くようになったシシ

一であるのは興味深い。グラッドグラインドは、自身の家にもたらされた変化について、“that what the Head had left undone and could not do, the Heart may have been doing silently.” (176) としみじみと語るが、ここでいう「心」とは、言うまでもなく、彼の家にメイドとして住み込むシシーであるからだ。つまり、このルイーザの教育とその失敗、そしてそれに付随するグラッドグラインドの改心の問題は、その背後に、女性の「墮落」の問題、グラッドグラインドの「教育」の問題、そして「メイド」のシシーの介入が重層的に関わっていることになる。そして、これらの要素はユーレイニア・コテッジにおいて、ディケンズ考案の売春婦たちの更生プログラムが「メイド」となるべく組まれていたことを思えば、そこでの教育方針と深く関わるものとは考えられないか。以下、ユーレイニアの更生システムとの関わりを見てゆきたい。

2) ユーレイニア・コテッジの訓練

ディケンズが自ら考案した彼女たちの日課である更生プログラムについては、本論文の第一章で述べたとおり、クーツが難色を示したにも関わらず、ディケンズはアレクサンダー・マクノーキー (Alexander Maconochie) のマーク・システム (The Mark System) を採用した。ディケンズは “the establishment itself would supply the means of teaching practically, to everyone.” (*Letters* 4: 554) と誓い、彼女たちの部屋には “Don't talk about it – do it!” と、そのモットーが掲げられていた (*HW* 172)。この更生プログラムについて少し掘り下げて見てゆきたい。

ディケンズはマクノーキーのマーク・システムに倣って、彼女たちの更生の成果を次の 9 項目から見定めるシステムを作成した。

1. Truthfulness
2. Industry
3. Temper
4. Propriety of Conduct and Conversation
5. Temperance
6. Order
7. Punctuality
8. Economy
9. Cleanliness

それぞれの項目が 4 段階で評価され小数点に及ぶまで細分化された。日々の点数が毎日加算されてゆき、彼女たちの退去時にはお金に換算して手渡された (Johnson 127)。¹⁴

ディケンズはコテッジに定期的に通い、このマーク・テーブルをもとに合算した点数から彼女たちの更生状況をクーツに報告していたわけであるが、なかで

¹⁴ また、コテッジ内には図書館やピアノが設置され、図書には Sir William Wordsworth や George Crabbe などが蔵書されていた (*Letters* 5: 440)。これらはディケンズが提案したものである。

も、1852 年 10 月 30 日付けのクーツへの報告に注意したい。そこには、仲間が病気になっても無関心で冷淡でいる彼女たちの様子が報告され、ディケンズは理解に苦しむと告げている (*Letters* 6: 789)。この出来事はディケンズにとって衝撃だったと見えてディケンズはすぐさま手を打った。それは、誰かが病に倒れた時は必ず誰かが付き添うという新たな規則を加えたもので、その思いを次のように記している。

I should greatly wish to try this plan, for there is something shocking (and in any other point of view that I can think of, unaccountable) in their being so remiss in one the most natural feelings of humanity. (*Letters* 6: 789)

ディケンズはこの更生施設に迎える女性たちのためにその内装にまで拘り、入所者第 1 号となった女性は新しい衣服に自分の部屋、心地よさそうなベッドに真っ白なシーツといった彼女のために用意された数々の設備を見て、感極まり泣き出してしまったという (*Letters* 5: 198)。これまで彼女が受けてきただろう社会の冷遇や、監獄に収監されていた日々の待遇など、彼女にとっては初めて自分の存在を大切に扱ってくれた優しさに触れて込み上げた涙にちがいない。この象徴的な出来事が示すように、この施設は、当事者たちへの思いを中心に慈善を提供するといったディケンズの方針が詰まっていたはずだ。ところが、実際の運営においては、先述の入居者同士の相手に対する冷淡さや無関心が示すように、ディケンズが彼女たちの教育に期待したのとは全く対照的な結果が引き

起こされることになったのである。彼女たちには一体何が育まれていたのだろうか。

ディケンズが作成した上記の更生具合を測る 9 項目をよく見てみると、「やさしさ」や「思いやり」といった感情的な項目は含まれておらず、むしろ「自制」や「秩序」など、そうした感情を抑制することが求められる趣旨となっている。そのうえ、それらの徳目の達成にポイントが付与されてお金に換算されていたわけである。とすると、このディケンズの更生システムは、本来の意図とはうらはらに、じつはグラッドグラインド校長の教育システムと同様、実利を追求する「頭」の教育を目指したものだったと言えるのではないか。グラッドグラインドが人間の性質までも数字に置き換えていたように、ディケンズは彼女たちの更生をポイントという数字とお金に置き換えていたのであって、その結果そうしたシステムに則して教育された彼女たちはグラッドグラインドの生徒たちと同じく「感情」が育成されずにいたわけである。つまり、ビッツァーやトムのようにグラッドグラインドによって培われた性格と同様の事態が、じつはユーレイニアにおける教育によって起こっていたことになる。

ルイーザは、最終的にハートハウスの誘惑から逃れて家に逃げ帰った時に、自らが如何に不幸であったかをグラッドグラインドに訴えるわけであるが、この成り行きには、ユーレイニアにおけるディケンズ自らの更生システムに対する反省のようなものがうかがえるのではないか。というのも、メイドのシシーは、グラッドグラインド家に住み込み、傷心のルイーザに寄り添い、トムが陥れよう

とした職工の救出にも大きな役割を果たした。注意したいのは、シシーがグラッドグラインドの教育を受けなかったこと、およびグラッドグラインドの対極に
 いることである。ディケンズはこれまで、たとえば『ドンビー父子』のフローレンスは、病弱の弟を助けるべく教養を身に付け難解な勉強の指導にあたり、『荒涼館』のエスタはグリーンリーフ学校（Greenleaf）で受けた教育が彼女の存在価値を決定づける礎となり、さらには、『デイヴィッド・コパフィールド』のエミリーやマーサに至っても学校教育を受けたことが付されているように、女性にとって「教育」は必要であるとする考えを示していた。ところが、シシーはグラッドグラインドの学校教育に馴染めず教育を断念してしまい、これまでの女性像と比較すると、少し後退したイメージが見受けられる。ところが、この物語ではディケンズはそのシシーのあり方こそ、人間のあるべき姿として肯定的に描いているのである。

ユーレイニア慈善を開始して以来、ディケンズが入居者たちの更生をめぐってクーツとは異なる見解を示してきたことはすでに論じてきた。作家は、先のフローレンスやエスタそしてエミリーやマーサの生き方に見てきたとおり、それまでの作品においては、女性の新たな生き方の可能性を登場人物のそれぞれに投影させ、時代を一步先んじたような女性像さえそこに提示してもいた。そしてそこには、ユーレイニアにおいて女性たちの教育に新たな教育システムの導入を含めて懸命に取り組もうとするディケンズ自身の意気込みが投影されていたということもできるだろう。対して、クーツの推奨する生き方とは、“an

industrious discharge of the duties of that position in life is a social and religious obligation.” (Orton 160, *Osborne Papers*, Vol. VII, Add. MS. 46406B, f. 6) と、それぞれが分相応の生活をするものであり、第四章で述べたように、クーツは女性に高い教育の必要性はないと考えていた。ダイアナ・オートン (Diana Orton) は、財界や政界などの有力者たちに常に囲まれていたクーツの環境が彼女を“in many ways very conventional”にさせたと見ている (160)。そして、そうしたクーツの姿勢が、ユーレイニアにおける売春婦たちの更生システムに関する彼女の主張においても反映されていたのである。

『ハード・タイムズ』でメイドの役割に徹するシシーの造形にはまさにクーツが推奨するような女性の生き方が投影されているように思われる。もちろん、「頭」と「心」、事実と想像力の対立を語るこの物語において、サーカスの子であるシシーは、想像力の重要さを主張する点で、作家は自身の価値観の体現者であると考えていただろう。シシーが道化の父親の傷ついた心を物語の読み聞かせによって和ませるというエピソードは、彼女が小説家ディケンズに通じる役割を担っていることの証でもある。しかしそうした考えを持つ一方で、すでに見てきたように、ディケンズは息子のチャーリーやユーレイニアの女性たちの教育において、相手のためと信じながらも、じつはグランドグラインドに似た実利的な方針を用いてきていたことになる。そしてその結果、ユーレイニアの女性たちの教育において自身の思い描いていたものとは異なる効果を生み出してしまったのである。こうした自身の教育方針の失敗に対する認識が、本来自身の価値

観を体現するはずのシシーという人物を、むしろクーツ的な価値観を体現する女性としてグラッドグラインドに対置して、その彼に自身の教育方針の誤りを認識させると同時に、最終的に彼自身に改心をもたらすというプロット展開を余儀なくさせたのではないか。そうだとすると、グラッドグラインドのルイーザに対する謝罪には親としてまたユーレイニア慈善の提供者としてディケンズ自身が強いてきた教育方針への自責の念のような思いが含まれていると言えるのである。

ディケンズの学校教育における見解を、息子への教育そしてユーレイニアでの更生システムに照らし合わせて本作品に迫ってきた。長男チャーリーは、その後、ディケンズの離婚を機に母親との生活を選択した。こうしてチャーリーは、父の抑圧からようやく解放されたとも言える。銀行での職務は長続きせず、培った商人としての腕をお茶や印刷業などのビジネスで試すものの成功することではなく、あげくの果てに彼は破産にまで見舞われた。しかし、ディケンズの晩年には、ディケンズが立ち上げた『オール・ザ・イヤー・ラウンド』誌 (*All the Year Round*) の編集に加わり、父親の遺言によってそのビジネスを引き継いだ。少年期に、ラテン語の詩に勤しんだ彼は、父親であるディケンズの意向で遠回りをしたあげくに、ようやく、自身が興味を抱いていた文字に携わる仕事に従事できることになった。他方、雲行きが怪しくなってきたユーレイニア・コテッジでの慈善事業において、その後もさまざまな出来事や事件に対峙しながらもディケン

ズはその任務に労を割いている。しかしながら、かつて貧民学校を訪問しクーツへ助言をしていた頃の作家の自信は少し薄れ、ここにきてクーツへの歩み寄りが見受けられるのも興味深い。そのことは、たとえば、『ハウスホールド・ワーズ』誌へ掲載したユーレイニアの広告をクーツの指示する文言通りにしたこと
 で“A considerable correspondence” (*Letters* 7: 83) を呼び、同誌が大きな注目を浴びたことから理解できる。そこにもまた、ディケンズ自身のユーレイニアにおける教育方針の誤算が反映されているとも言えそう。¹⁵ ディケンズの教育(更生)方針が孕む様々な矛盾と、自身の教育方針に対する作家自身の反省が、本作品をとおして見えてきたわけであるが、このことはまた社会小説を書く作家にとって大きな打撃でもあれば、自己や他者に対するさらなる認識の深まりをもたらす事柄だったのではないだろうか。そんな作家の心の痛手は次作品『リトル・ドリット』で、常に後めたい思いに苛まれている紳士アーサー・クレナムと数々の慈善家の偽りに満ちた善意の形に引き継がれてゆくのである。

¹⁵ 掲載記事は“Home for Homeless Women.” April 12, 1853, 169-75. もともと、ディケンズは彼女たちに向けて“An Appeal to Fallen Women”と題した手紙を作成していた (Johnson 98)。この手紙は施設の概要や目的などにおいては掲載されたクーツのものとはほぼ同じであるが、親しみが感じられるディケンズの文面とは異なりクーツが指示して掲載された文面はかなり事務的なものである。しかし、大きな反響を呼んだ。

第 六 章

『リトル・ドリット』 (*Little Dorrit*, 1855-57)

—— 善意の視点 ——

『リトル・ドリット』は、クリミア戦争時の政府への批判が込められた作品と言われる。“How Not To Do It!” をモットーにする「迂言省」は、船底に付着して速力を減退させる“Barnacle”と命名され、一族による役職の占有とその仕事の流儀とが、貴族の出身者で人員を固め戦況の悪化を招いた当時の首相パーマストン (3rd Viscount Palmerston)¹ の政治形態を反映するとされる。また、迂言省と対立する中産階級の紳士ミーグルズ (Mr Meagles) が自身を“practical”と主張するのも、伝統に束縛され戦いに必要な知識が欠如していた時代遅れの指揮官たちに代わって、その必要性が叫ばれていた“a practical hero”を言い表したものとされる (Philpotts 3-5)。

しかし、本作品には、クリミア戦争のほかに、時事的な背景としてもう一点注目すべき事象がある。ユーレイニア・コテッジとの関連である。ユーレイニア・コテッジに関する慈善は、準備期間を含めると 1846 年の春頃、作品では『ドンビー父子』のころに始まり、およそ 11 年の間、ディケンズはその事業に深くか

*本章は、『ディケンズ・フェロウシップ日本支部年報』 第 41 号 (2018 年 12 月) に掲載された論文「善意の視点－『リトル・ドリット』とユーレイニア・ホームー」を補正、加筆したものである。

¹ 1855 年 2 月着任。ディケンズはクーツへの書簡で“Lord Palmerston to be the emptiest impostor and the most dangerous delusion.” (*Letters* 8: 177) と批判的だ。

かわってきた。しかし、本作品の『リトル・ドリット』を最後に、彼はこの事業から撤退することを決めた。何故だろう。慈善の問題は、ディケンズ作品内に頻繁に挿入されるテーマだが、とりわけ『リトル・ドリット』の二つ前の作品にあたる『荒涼館』（1852-53）では主人公エスタの成長を語る物語の主筋にユーレイニア・コテッジの出来事が据えられていたことは既に本論の第四章にて論じた通りである。『リトル・ドリット』の序章で作家がこの作品を『荒涼館』の“next successor”（6）と位置付けたことを考えれば、『リトル・ドリット』にもユーレイニア・コテッジの慈善の影響を認めることは可能ではないか。本作品に描かれる慈善のプロットを辿ることで、作家が慈善を止めるに至った経緯、あるいは理由を考察し、本作品の意義を見出したい。

1. 慈善の変容 －『荒涼館』から『リトル・ドリット』へ

1) 『リトル・ドリット』－「見せかけ」の善意

『リトル・ドリット』には、前作の『荒涼館』と同じように、多くの慈善家、あるいは慈善事業が登場する。たとえば、温厚な容姿から人々の信頼を得ているブリーディング・ハート・ヤード（Bleeding Heart Yard）の不動産管理人で“a father to the orphan and a friend to the friendless!”（160-161）と紹介されるお金持ちのクリストファー・キャスビー（Christopher Casby）。彼の外見は、すべすべした額に落ち着いた青い目、禿げた頭の横から出ている白髪のはげは生涯ハサミを入れたことがなく、その姿は画家や彫刻家たちから宗教画のモデルになってほしいと

依頼されるほど柔和で博愛精神に満ちている。その上その外見は10歳のころから殆ど変わらず、まるで穢れなき心を持った人物と見える。ところが、そんな表層とは裏腹に、キャスビーは集金人のパンクス(Panks)には、“squeeze them”(831)と容赦のない取り立てを強要し、貧しい賃借人たちが苦しんでいることなど気にもかけない。にもかかわらず、住民たちはキャスビーを守護神のように“The Last Patriarch”(160)と呼んで信頼を寄せているのである。

彼はまた、貧しいエイミー(Amy Dorrit)にクレナム夫人宅(Mrs Clennam)でのお針子の仕事の口利きをし、病にふさぎ込むクレナム夫人を定期的に見舞い、親のいないウェイド嬢(Miss Wade)の後見人になったとされる。しかし、じっさいに彼は仕事の紹介などしておらず、クレナム夫人のお見舞いもパンクスや娘のフローラ(Flora Finching)が行っている。しかも、キャスビーは自身の慈善の代行者である彼らの博愛行為を不必要だと不満さえ漏らす始末で、ウェイド嬢についても彼女に遺されたお金を預かっているにすぎない。彼は自身と異なる世界の人物には全く興味がない、慈善的精神とは程遠い人間なのだ。他方、彼の娘で出戻りのフローラは父親と対照的に描かれている。20年前の彼女は、天使のように美しい姿の女性だったが、よく太りつまらないことをよく喋る女性に一変してしまっている。しかし、欲張りで愚鈍といった見た目の印象とはあべこべに、彼女は気難しい義母の世話をし、エイミーの境遇を知るやいなや彼女をお針子として雇い、その上クレナム夫人を見舞うというように、その外見とは異なる気立てのよい行動的な女性であることが示される。この親子の対比は、慈善

行為に潜む嘘を読者に印象付けることになる。

2) 『リトル・ドリット』－ 一方的な善意

こうした慈善の否定的な側面は、キャスビーのような偽善者のみならず、二人の善良な紳士が行う慈善行為にも示されている。先ず、何事も実践が肝心だと説く自称プラクティカルな紳士ミーグルズは、一家で孤児院を訪問した際に、ハリエット・ビードル (Harriet Beadle) と呼ばれる孤児を娘ペット (Minnie, 愛称 Pet) のメイドとして引き取る。彼は、鼻持ちならない教区の役員に我慢がならず、ハリエットの名前を“Beadle”から新たに「ぼろの、くたびれた」という意味が含まれるタティコラム (Tattycoram)² と名付けるが、その奇妙な名が本人にとって嫌なものであることに気づかない。娘のペットの言うことなら何でも聞き入れるが、娘より年下の彼女に対しては「癩癩もち」として、「25 数えなさい」と繰り返し注意するミーグルズ氏にタティコラムは不満を募らせ、彼らは自分たちのことしか考えていないと言ってミーグルズ家を出て行ってしまふ。一見したところ、立場を弁えないタティコラムの恩知らずな行動と映るが、未だ 10 代前半であろう孤児のタティコラムにミーグルズ氏に対する不満、彼女自身の内なる声を披瀝させているところに、ミーグルズ氏に対する作者の批判がうかがえる。

² 「ぼろの、くたびれた」という意味合いが Tatty で、coram は 1739 年ロンドンに孤児院 (Foundling Hospital) を設立した慈善家 Thomas Coram (1668-1751) の苗字を思い起させることから、“Tattycoram”は「孤児院出身のタティ」と意味づけたものと察せられる。

同様に、もう一人の紳士アーサー（Arthur Clennam）の善行も受益者側からは感謝されない。彼は、長年監獄で生活しているドリット一家を救うべくパンクス氏に一家の調査を依頼し、一家がじつは大きな遺産の相続人であることを突き止める。ところが、エイミーの父ドリット氏（William Dorrit）は、アーサーに感謝するどころか、監獄にいた経歴を知っているアーサーとの付き合いを絶とうとするのだ。ドリット氏は、4半世紀近くも監獄に居住し外の世界を見ていない。たしかに監獄という特殊な場所ではあるが、周りからはそこに住まう人々の中で唯一の紳士と尊敬され、娘の深い愛情に包まれて自身の城を築き、本来の自分自身でいられる場所を確立していた。娘のエイミーは、もし父が外に出ることになった場合、彼がうまく生きてゆけるかどうか心配だと一抹の不安を抱いていたのだが、じっさいドリット氏は監獄を出てからというもの、誰に対しても不信任感を抱くようになり、最終的に惑乱状態に陥って宴の最中に “I am [...] the Father of the Marshalsea.”（678）と自身の過去を声高々に告白し、死を迎える。

エイミーは、アーサーに、たとえ光すら入らない監獄でも自分にとっては「ホーム」だと頑なに主張し、母に代わって父に仕えることこそ自らの務めと断言していた。その彼女は、監獄から旅立つ日には着古した服を着替えようとせず、生活が一変してヨーロッパに移り住んでも、いつも故郷マーシャルシー監獄を名残惜しく思う。そして、父親に仕えるという務めもヨーロッパでの生活では取り上げられ、彼女には虚無感だけが残るのである。このように結局のところアーサーがドリット家のために行った慈善行為は、彼らのアイデンティティを奪い、彼

らに否定的な効果をもたらすにすぎない。

アーサーにとって監獄とは世間から隔離された暗い孤独な場所ではない。その監獄のイメージは、実は彼が幼少期に体験したトラウマに由来するものだった。アーサーの父親の不貞を穢れとみなすクレナム夫人は、息子も同罪とし、罪の子として厳格に彼を育てた。“I have no will” (35) という言葉が示すように、アーサーは自身の境遇を、監獄に住み家族の犠牲となっているエイミーに重ねていたのであって、エイミーのおかれた現実を本当の意味で理解することはなかったのである。つまり彼の慈善もミーグルズの場合と同様に、勝手な思い込みから生じたいわゆる独善的なものとして描かれているのだ。

3) 『荒涼館』－ 慈善と家庭放棄

もちろん、こうした慈善の失敗、あるいは誤った慈善の在り方は、前作『荒涼館』でも描かれてはいる。“Telescopic Philanthropy”として登場するアフリカでのコーヒー栽培と現地人の教化へ精魂を傾けていたジェリビー夫人 (Mrs Jellyby) やパーディグル夫人 (Mrs Pardiggle) の慈善である。彼女たちはその使命に夢中になりすぎて、自らの家族を顧みず彼らを犠牲にしていた。³

ローズマリー・ボーデンハイマー (Rosemarie Bodenheimer) が “Just about every character in the novel’s enormous cast is judged through his or her style of household

³ ジェリビー夫人は、本論文の第三章で紹介したチゾム夫人のモデルとされる人物で、本論文の第四章ではジェリビー夫人とその娘キャディの親子関係について触れている。

management.” (148) と言うように、『荒涼館』では「家政」の良し悪しが「幸福」へのカギであり、主だった登場人物たちの家庭は彼らの人物像を語る重要な要素として詳細に描かれる。無責任な子どもと揶揄されるスキンプール (Harold Skimpole) の散らかり放題の自宅では、妻はあらゆる病気を患い、年頃の三人の娘たちも針と糸の使い方さえ知らず無頓着な様子で父の遊び道具でしかない。対照的に、“duty”を重んじるバグネット夫人 (Mrs Bagnet) の自宅は、食器棚の鍋はピカピカに磨きあげられ、居心地の良い部屋では夫が夫人に感謝し子どもたちも元気で明るい (440)。このように、『荒涼館』では「家政」こそが重要な“duty”と位置付けられている。

とすると、家政を蔑ろにするジェリビー夫人やパーディグル夫人の慈善に対する批判は、“Charity begins at home”という教訓に倣って、物語の主軸であるホーム造りの反面教師として挿入されていることになる。そのことは、『荒涼館』の一方の語り手で主人公でもあるエスタの救済と成長が、彼女に母親の罪の償いを押し付ける伯母バーバリーの死後、後見人となった高德の紳士ジャーネイスの教育によって、彼女が「家政」の力を身につけ、ジャーネイスの館「荒涼館」の有能な家政婦となって周りの女性たちを助けて生きてゆくという物語のプロットに典型的に表されている。『荒涼館』は家の名前がそのタイトルになっていることから明らかなように、ホーム、つまり中産階級的な家庭の設立を軸とした物語であり、家政の力の獲得にこそ慈善の意義と、そうした慈善を受ける対象となる女性の幸せがあると強調された作品であった。

このエスタの贖罪の生き方の背景にあるのが、ディケンズが個人的に携わっていた慈善事業ユーレイニア・コテッジでの日課である。読み書きや算術、針仕事に洗濯、そして料理といった家事全般を包括する売春婦たちの家政の訓練である。「堕ちた女性」の烙印を背負った彼女たちの救済を、ディケンズは家政の手腕を持って社会に貢献し、そこに復帰することに見出そうとしたことは、本論文の第一章にて述べたとおりである。物語は、そんなディケンズのペルソナであるエスタが私的な領域の語り手として、もう一方の語り手で公的な領域の声を反映する三人称の語り手と対立的な構造をとるという特殊な構成を成していた。そしてそこにユーレイニア慈善における出資者のクーツ（Angela Burdett-Coutts）と、運営に携わったディケンズとの意見の対立や主張が反映されていることは、すでに本論文の第四章で論じたとおりである。

しかし、『リトル・ドリット』では、そうした家庭の確立という意義自体が疑問視されているのだ。慈善の対象となるタティコラムやドリット一家にとっては、彼らが慈善を通して住まうことになった小奇麗な屋敷は決して居心地の良いホームとはならない。そもそも、この物語においては、他の登場人物たちも家族間の意見のくい違いがあったり、居住地を持たず転々としたりするなど、まともにホームと呼べる家すら出てこないのである。ここに、作家の意識の変化が見られる。『荒涼館』の場合は、人を助けるという行為の根源に「家政」が据えられ、その行為自体を否定したり疑問視したりする視点は描かれなかった。ところが、『リトル・ドリット』では、家政を軸とした慈善の危うさが強調されると同

時に、慈善をする側の人間の欺瞞や独善的な視点が際立つように描かれる。そこから見えてくるのは、「慈善」の難しさであり、それを行う側への警告でもあり、慈善を受ける側の人々への作家のより慎重で同情的な見解でもある。しかも『荒涼館』と同じく不義の子として、罪の償いをおしつけられて育った『リトル・ドリット』の主人公のアーサーは、40歳にして過去の罪から逃れられず、最終的には、彼自身が破産してマーシャルシー監獄の住人となり、慈善を施す側から受ける側へと立場の逆転を経験する。どうしてこのような変化が起こったのだろうか。

2. 慈善における視点の変化

1) 相対する視点

ディケンズの意識の変化を辿るにあたって重要な意義を持つのが、当時作家が深く関わっていた慈善活動、つまり資本家クーツとともに設立した売春婦たちの更生施設ユーレイニア慈善である。二人の共同設立とはいえ、二人はその出自や境遇がそもそも異なるため、入居者である売春婦たちへの理解度や彼女たちの更生方法をめぐっては当初から意見の対立が生じていた。

『荒涼館』で繰り返し説かれる「家政」の重要性が、作家が理想とする更生方法の正当性に対する密かな主張であった。ところが、それから約2年の時を経て連載が開始された『リトル・ドリット』では、前作における作家の主張の正当性が問い直されているのだ。そこにはどのような意味があるのか。

『リトル・ドリット』の執筆の時期には、すでにユーレイニア・コテッジの開設から8年が経過していたが、その連載中にもクーツとの意見の対立はあった。クーツがユーレイニアの作業服に“Derry”と呼ばれる土色の布地を支給したことに、ディケンズが強く抗議したのだ。1856年11月15日付けのクーツへの手紙で、ディケンズはその生地を“a mortal dull colour” (*Letters* 8: 223) と呼び、単調で厳しい日課を繰り返すユーレイニアの女性たちには、明るい色調のカラフルな作業服を支給することこそ生産性を向上させる鍵だと、クーツの配慮に欠ける行為を強く非難している。ディケンズは、土色は土色しか産み出さず、これでは「クエーカ教徒」だと皮肉を交え攻撃する。しかし、物欲を制するためにも採色は邪念と解するクーツの強い宗教心がそれを許さない。興味深いことに、この揉め事は二人のホームにおける方針の違いを明らかにしてもいる。当事者である女性たちを中心に考えるディケンズは機能主義的、対して管理的な立場のクーツは形式主義的といえるだろう。そして、この二人の意見の相違が、二人の関係に“a deeper significance” (133-34) を招いたとジェニー・ハートリー (Jenny Hartley) は言い、エドガー・ジョンソン (Edgar Johnson) はディケンズの“unceasing emphasis” (328) と、双方の妥協の難しさを語る。そして、その二人の確執の深さを物語るように、クーツの秘書オズボーン (Charles Churchill Osborn) は、長引いたこの対立をディケンズの“protest” (396) と称し1931年10月号のコーンヒル・マガジン誌 (*The Cornhill Magazine*) で取り上げた。

実は、クーツ提案の作業着を言い表す「クエーカ教徒」という言葉は物語のなかで金持ちの慈善家キャスビーの自宅に据えられた家具の描写に用いられている（159）。彼の部下で家賃の集金人パンクスは、主人キャスビーと生活苦に喘ぐブリーディング・ハート・ヤードの賃貸人の間で微妙なバランスを保って働いているが、キャスビーは間を取り持つパンクスの仕事の難しさを考慮することなどなく、パンクスに賃貸人の生活状況を尋ねることもない。それどころか、彼はパンクスに“You are paid to squeeze,”（831）と平然と言い放つ。このパンクスの仲介役としての職務、さらにはキャスビーの秘書的な役割は、ユーレイニア・コテッジにおける主宰者クーツと入居者たちの間を取り持つディケンズの立場を思い起させる。本作品の連載が開始されたのは1855年12月であるが、その直前の11月にディケンズはクーツからある依頼を受けた。それはクーツの個人的な秘書としてディケンズのように従事してくれる人物を探してほしいというものだった（*Letters* 7: 746）。⁴

クーツとディケンズは、出会いからこれまで約15年間にわたって、とりわけユーレイニア慈善をとおして、確かな信頼関係を築いてきたはずである。ユーレイニアにおいては、ディケンズは場所選びから積極的に関わり目的に合う

⁴ ディケンズは、この依頼に対して、自身が編集する『ハウスホールド・ワーズ』誌の副編集長を務めていた William Henry Wills を“very eligible and trustworthy”（*Letters* 7: 746）として紹介している。ディケンズはウィルズ氏への手紙に、“The duties would not be inconvenient at all – the connection would be extremely valuable and pleasant to you”と、秘書の仕事を引き受けるべきだとアドバイスをしているが具体的な仕事内容については記していない（*Letters* 7: 746-747）。Edgar Johnson が、“he did not cease to take an active part in her work.”（310）と指摘するように、ディケンズはこの一件によってユーレイニアから引き下がることはなかった。

ように改築を指示し、施設の概要をまとめるだけでなく、寮母や教師の選定から会計簿の管理、月に一度は必ず訪問し会議に出席、何か問題が起こればその都度対処して、クーツへの報告も欠かさなかった。また、第二章で述べたが、ディケンズは自分の作品において考えている登場人物の死をクーツにだけ知らせるなど、創作上の秘密でさえ打ち明けていた。そこへ、ここに来てディケンズのような秘書をもう一人加えるということは、たとえ、この依頼がディケンズの負担を軽減させようとしたクーツの配慮があったとしても、ディケンズにとってはこの思わぬ申し出に複雑な思いを抱いたのではないだろうか。⁵

さらに、「見せかけ」の最たる例として描かれる「迂言省」もまた、その徹底した形式主義において、クーツのスタンスに通じるとも言える。アーサーはドリット家の系譜の調査依頼のために、またミーグルズはドイス (Daniel Doyce) の発明品の認可を求めて迂言省に何度も足を運ぶが、応じられることはない。迂言省のファーディナンド (Ferdinand Barnacle) が説明する“everything shall be left alone. That is what it means. [...] it's only a form.” (769) という方針は、上流階級のマナーを教える指南役のジェネラル夫人 (Mrs Geneal) がエイミーに言う、もっとも美しく見える口の形をつくるのが大切で、意見など持つべきではないというお説教にも通じるだろう。そこに上流社会のレイディであるクーツに対するディケンズの密かな批判を読み取ることができる。

⁵ じっさい、この頃にディケンズは“I am in a state of restlessness.” (*Letters* 7: 613) と、多忙は伝えてはいるものの、あくまで創作上の苦痛や忙しさであり、ユーレイニアにおける仕事の軽減を申し出てはいない。

しかし、『リトル・ドリット』における慈善への批判は、自身の方針を受け入れてくれないクーツへの不満の表明に止まらない。本作品のなかでディケンズが批判するもうひとつの慈善、つまり紳士たちによる独善的な慈善に注目してみよう。なぜ、ディケンズは、このような一方的な善意の在り方を描いたのだろうか。先ず注目したいのが、この物語の主人公ともいうべきアーサーの存在である。私生児として生まれ、罪の償いを押し付けられて育ったアーサーは、前作『荒涼館』の主人公で、ディケンズの分身として慈善の体現者でもあったエスタに通じる人物だ。20年ぶりに中国からロンドンの自宅へ戻った彼はすでに40歳の中年男性である。よって、それまでの経緯は自己あるいは語り手による回想として語られる。ロンドンへ戻ってきた彼は、みすぼらしい服装にボロボロの靴、その上成長が止まったかのような貧弱な体型をしたエイミーを母親の家で見つける。厳格な母とエイミーのちぐはぐな組み合わせに、彼はエイミーの跡を追って彼女が監獄を住処としていることを突き止めて、その責任がじつはクレナム夫人にあるのではないかと思ひ込む。監獄を訪ねた彼は、兄のエドワード (Edward) は定職に就かず、姉のファニー (Fanny) はダンサーと、思いのままに生きている中で、エイミーが家族の犠牲となって一家の生活を支えていることを知るのである。このエイミーの境遇はディケンズ自身のものと重なる。物語はその冒頭で “Thirty years ago” (15) と時代設定がなされる。この作品が刊行される31年前の1824年は、ディケンズの父ジョン (John Dickens) が債務者監獄マーシャルシーに収監されていた時期で、当時12歳だったディケンズは教育を中断され、靴墨

工場でボトルのラベル貼りの仕事に就かされて、家族が仮住まいをする監獄へ通う日々だった。勉強好きで将来への期待を抱いていたディケンズ少年の夢は砕かれたが、奇しくもエイミーの姉ファニーと同名であるディケンズの姉ファニー（Fanny Dickens）は王立音楽アカデミーで引き続き学んだ。つまり、ディケンズもエイミーと同様家族の犠牲になっていたわけである。しかも、ディケンズは、本作品を執筆していた当時は40代前半でアーサーと同年代であった。つまり、アーサーがエイミーの状況を見つめる視線というのはディケンズが自らの辛い時代を見る視線に重なる。当初、アーサーはエイミーを“poor child”（281）と呼び、ドリット家の「家族の犠牲」と認識しており、遺産を相続してヨーロッパにいる彼女を思い浮かべる場面では、彼女の境遇の変容を懐かしく優しい気持ちで思い浮かべる（543）。二人が物語の最後に結婚しひとつのユニットとなることを思えば、アーサーとエイミーの両者を通して、ディケンズはこれまでの自身の経緯を自省の気持ちを込めて見つめ直し、過去との折り合いをつけようとしたと言える。

ところが、すでに述べたように、善意に支えられたはずのアーサーの善行は、この作品においては自身の勝手な思いを投影した独善的なものとして描かれ、慈善の対象となったエイミーの思いが全く彼には通じていなかったことが明らかになる。しかも最終的に彼は両親の罪の償いへの焦りから、投機に失敗して破産し、慈善を与える側から受ける側へと転落することになるのである。このアーサーの慈善の失敗は、どこから生じているのだろうか。ユーレイニア慈善に關す

る肝心な出来事をもうひとつ見てみたい。

2) 視点の揺らぎ

『リトル・ドリット』執筆の時期は、丁度ディケンズの慈善事業への成果が判明し始めた時期でもある。ユーレイニア・コテッジは 1847 年の開設から 1862 年の閉鎖に至るまで約 15 年にわたって運営されていた。その間入所した女性たちの数は、コテッジの所在地シェパーズ・ブッシュ (Shepherd's Bush) の地域史研究誌 *Around the Bush – A History of Shepherds Bush* が国税調査を基に算出した報告書によるとおよそ 150 名 (28) と言われる。またハートリーは、ディケンズが編集者を務めた『ハウスホールド・ワーズ』誌を基に算出し、その数を約 130 名 (245) と記している。地域史研究誌は、職業に就いた内 10 名の名前と住所、出身地などを掲載している。一方のハートリーは 30 名ほどが“flourishing emigrants” (245) として海外移住したと言う。

その入居者の声を知る手がかりを与えてくれるのが、彼女たちからの直筆による手紙である。ただし、文字を書けることが前提となるため、彼女たちからの手紙の数は少ないだろうと推測される。⁶ 先ず、“Madame”そして“Honoured Madame”と記され公開されている手紙が 2 通ある。⁷ 次に、“Honoured Ladies”宛

⁶ 入所期間一年を通しての彼女たちの読み書きの成果というものは、“dreadful” (Hartley 210) と報告されている。

⁷ 2 通の内 1 通の差出人は、Mary Ann Stonnell, 1856 年 5 月 13 日付で彼女は書くことを成し遂げたものの、退所後は監獄に逆戻りした。もう一通は Louisa Cooper, 1854 年 10 月 20 日付) からで南アフリカへ移住したが 1856 年にホームへ戻り求職している (Hartley 185, Janes

てのもの。⁸ これはアフリカのケープタウン（Cape Town）に移住し 1850 年 7 月頃には生活も落ち着き始めたキャロライン・カンロン（Caroline Canlon）からのもので、“Many of the emigrants did write to the ‘Honoured Ladies’ and send presents. Miss Coutts preserved them in a special box, but it vanished long ago.”（Hartley 224）とあるため、この手紙以外にも消滅したものがあるようだ。そして、差出人が不明なものが 1 通あり、⁹ この手紙をクーツから転送されたディケンズはその感想を次のように語っている。

I have indeed read this letter with great emotion. If you had done nothing else in maintaining the Home – instead of having done so much, to which is to be added all the chance and bye-way good that has sprung out of it in the lives of these women: which I believe to be enormous – what a great reward this case alone would be! (*Letters* 8: 118)

ハートリーは、この手紙に関して、“Dickens read it ‘with great emotion’ and wrote back to her the same day. For him, one was enough.”（239）と解釈する。しかし、本当にそうか。上に述べたような状況を考慮に入れても、彼女たちの反応はあまりに少なすぎないか。枚数はもとより、それらがすべてクーツ宛であったという点も気にかかる。先に述べた作業着の一件のように、ディケンズは彼女たちの将来

28-29)。

⁸ “Honoured Ladies” 宛て（クーツとコテッジに常駐していた女性監督者宛）の手紙はケープタウン、アフリカに移住した女性たちが差出人（Hartley 224, Janes 46）。

⁹ 差出人不明の手紙は紛失している（Johnson 316）。

の幸福を第一に考え、実用的な更生方法を主張してクーツとも対立してきた。彼の更生方法は、作家自身が貧困の辛い時期を経てそこから這い上がってきた経験からくるもので、何よりも、同じ差別と侮蔑の視線を浴びた体験を持つ同士として、彼はクーツよりも自分の方が彼女たちに近い存在だと考えていたのではなかったか。ところが、そんな事情を何も知らない彼女たちは、ディケンズではなくてクーツに感謝をしているのである。『リトル・ドリット』で、ディケンズは「見せかけ」の慈善家キャスビーを通して、見た目や肩書きによる思い込みに人々が如何に左右されているかを表しているが、その背後には、じつは入所者たちの反応へのディケンズの密かな失望感があったとはいえないだろうか。

また、クーツから予め依頼を受けていた、出所者の移住先の教会の主教や関係者などの手紙にも言及したい。彼らは、移住地に到着した出所者を迎えて当面の生活の支援や仕事の斡旋をする役割を担っていた。先ず、1849年1月、ホームから最初に旅立った3人の女性達が売春婦に戻ってしまっていたという残念な結果について、ディケンズの反応は、“heavy disappointment and great vexation” (*Letters* 5:639) とある。船上で彼女たちを監視する人はいなかったし、彼女たちはホームの労役によって得た給金を所持していたことから自由にアルコールが飲めた (Hartley 210)。彼女たちの給金はディケンズが提唱したマークシステムによって得たものであり、ユーレイニアでの1年は常に監視されている状態で自由に外へ出ることはもちろん許されなかった。そんな生活から解放されて漸く手にした自由である。さらには未開の地に向かう彼女たちの計り知れない

精神的な不安や心配もあっただろう。

反対に喜ばしいユーレイニア女性たちの報告もある。アフリカのケープタウンに移住した3人の女性たちは、仕事も“Domestic Service”に就いて教会にも通っていることが、1853年4月23日『ハウスホールド・ワーズ』誌に紹介されている。同様に、カナダに渡ったユーレイニアの女性たち3人の肯定的な報告もある。この内の一人は、レナ・ポラード（Rhena Pollard）で、ハートリーがその面影をミーグルズに引き取られたタティコラムに見る女性だ（127）。海外移住はユーレイニア・コテッジの入居条件であったため、これらの好ましい結果が130名から150名のうちの30名ほどあったことになる。

期待外れや期待通りの知らせが届く中、ディケンズが『リトル・ドリット』の構想段階にあった1855年6月に届いたカナダからの手紙に目を向けたい。そこには、民間船による長期の船旅における危険が次のように記されている。

The great danger lies in the acquaintances they make during the voyage. Several young girls from another Institution were sent out here about a month ago – I am sorry to say the greater part have been led astray by companions they made during the voyage, and have been conducting themselves so ill that it will considerably damage the prospects of any others who may be sent out. (Hartley 214)

これでは、元の木阿弥ともいえる事態である。

ディケンズ作品を通して登場する海外移住のプロットを追ってみると、代表

的な作品に 1849 年から 50 年にかけて刊行された『デヴィット・コパフィールド』がある。ここではオーストラリアへの移住が肯定的に紹介されていた。英国で堕ちた女性と烙印を押されたマーサやエミリ、そして失業という悪循環から抜けられずにいたミコーバー氏が、オーストラリアへ移住することによって幸せを掴む。つまり、英国内では日の当たらない定めにある人々への「解決策」として新天地が楽観的に描かれていた。ここでは長い期間にわたる渡航の最中に起こり得る難儀は描かれていない。

英国政府の移住政策については本論文の第三章にて述べたとおりである。ただし、留意したいのは、政府は女性の海外移住に向けて委員会を立ち上げて試行錯誤を繰り返し、安全な船旅の水準を確立していったことである (Rushen i-v)。にもかかわらず、ディケンズは民間船に拘り、政府支援の London Emigration Committee (LEC) の船を利用することはなかった。それは、クーツへの手紙のなかで、政府の海外移住政策において政策そのものについては賛同しているものの

But I have (with reason) a doubt of all Governments in England, considering such a question in the light, in which men undertaking that immense responsibility, are bound, before God, to consider it. (*Letters* 4: 553)

と伝えているように、ディケンズが政府に対して不信感を募らせていたことが要因だろう。ハートリーはこのディケンズの選択を誤った判断としつつも、当

時の宗教事情に鑑みてユーレイニアの女性たちが団体船に乗ることでカトリックへの改宗が起こることを心配したと説明している（205-15）。

『リトル・ドリット』では少し異なった様相で、移住に纏わる「拘束」や「解放」への言及がある。第2章の“Fellow Travellers”でマルセイユの港に外国から戻ってきた乗客たちが検疫拘留所で疫病の検査を受ける場面だ。一定の期間不快な思いを強いられ、拘束状態になった人々に、不満や苛立ちそして怒りが募る。しかし、その後やっと自由の身になった彼らの喜びに沸く解放感を、語り手は“the new pleasure of recovering their freedom”（36）と言うのである。中でもミーグルズは誰でもどんな場所であろうと離れた途端にそこを許し始めるものだから、監獄に対しても同じような思いを抱くものだという。すると、その場に居合わせたウェイド嬢は、“If I had been shut up in any place to pine and suffer, I should always hate that place and wish to burn it down, or raze it to the ground.”（37）と厳しい口調で返す。後にウェイド嬢は自らの不幸な生い立ちと境遇をしたためた手記をアーサーに手渡すが、その手記は三人称で語られるこの物語のなかで、唯一彼女の一人称の独白の形を取る。注目すべきは、その手記もまた慈善のあり方に関わっていることだ。手記によると、ウェイド嬢は物心がつき始めたころ、周りの人々の不自然な視線と態度によって、自身が孤児であることを知った。それからは、人々の欺瞞に満ちた言動やうわべだけの善行に敏感になり、人々に対する不信感のみを抱いて生きてきた。彼女の手記は、親切心や思いやりが、たとえそれがミーグルズやアーサーのように本心からのものであっても、決して通じること

はないということ、つまり慈善の意義の否定を表していると言えるだろう。

そしてそれは、ユーレイニアの女性たちにも当てはまる。心に刻印された冷たい視線や辛い体験しか持ちあわせていないだろう彼女たちにとって慈善は有効ではなかったと、それをウェイド嬢の手記を通してディケンズは伝えようとしていたのではないか。だからと言って、先に述べたクーツの更生方法が功を成したかと言えども疑問である。ハートリーはディケンズの退いた理由を“it was not because he was disillusioned or judged it a failure.” (243) と考察する。一方で、オズボーンは、1931年10月『コーンヒル・マガジン』誌に次のコメントを掲載している。

There were gratifying cases of redemption with new starts in life; and some successful effort at emigration. But, on the whole, the work proved even more difficult than Dickens had foreseen and after many discouragements and failures the scheme was given up. (396)

『リトル・ドリット』の主人公アーサーが、作家自身と重なることはすでに述べたが、自らの辛い体験をエイミーに重ね合わせた結果、アーサーの慈善行為は失敗し、家庭の意義も完全に否定される。ここに家政の重要性を主張した『荒涼館』からの変化の源がある。『リトル・ドリット』の慈善が示すこれらの変化は、ユーレイニア慈善におけるディケンズの失望感と自省の気持ちが投影されたものだったのだ。

おそらく、この時分には、ディケンズもユーレイニアの女性たちがなぜ元の生活に戻ってしまうのか、その理由を察していたのではないだろうか。ディケンズは、彼女たちに別の人生を歩ませようと暗い過去と決別させようとした。物語では、本人のアイデンティティである「名前」や「ホーム」を奪われたタティコラムやドリット氏が新たな境遇に馴染めない生き苦しさが浮き彫りとなっていた。そのことは、じつは主人公であるアーサーも同じで、「自分には意志がない」と不幸な家庭環境から自分という主体性を失ってしまった彼の孤独な生き様として描かれている。そんなアーサーが自身の子ども時代と重ねて見ていたエイミーと結婚することは、彼が失ってしまった自己を取り戻そうとしていたことを物語る。エイミーは、他人がどう見るかではなく、何よりも自分がどうありたいかを象徴する人物なのだ。ユーレイニアの女性たちも、過去については語ることを禁じられ、友人関係を築くことも出来ず、孤独が募っていたとしても不思議ではない。彼女たちは、元に居た場所、人々と交流することによって本来の自分自身でいられる安らぎを求めたのではないか。

この頃のディケンズの私的な出来事にも言及したい。それは、1855 年の夏に売りに出されたギャズヒル・プレイス (Gad's Hill Place) の屋敷の購入である (Johnson 314)。じつは、この屋敷は売りに出されてはいたものの、住人はすぐに退去するつもりはなく、ディケンズは “to treat him with all handsome consideration.” (*Letters* 8: 50) と、わざわざ出かけて行き交渉を持ちかけた。粘りの甲斐あってか、ついに 1856 年 3 月には正式にディケンズが手にすることが叶

った。この屋敷は、ディケンズ一家が転落する以前に、ディケンズの父ジョンが息子のディケンズに頑張ればきっと住めるようになると励ましてくれた父と子の幸せな日々を象徴する大切な記憶の産物である。それを是が非でも手に入れようとした作家の胸中には、どのような思いが潜んでいたのだろうか。

じっさい、ディケンズが妻キャサリンとの生活について亀裂が生じていたことを語り始めたのもこの頃である。本作品の連載が終了してからのことではあるが、ディケンズは妻キャサリンとの生活について、“for years and years as miserable a one as ever was made” (*Letters* 8: 558) とクーツに打ち明けている。自分の「ホーム」でありながらも、何年にもわたってディケンズは“under false pretences” (*Letters* 8: 632-34) の状態で過ごしてきたというのだ。つまり、ディケンズも偽りの自分を演じていたわけである。とすれば、そのことはまた、ディケンズがたとえコテッジを「ホーム」と呼び変えようと、本来の自分ではない人間として生きることを訓練されたユーレイニアの女性たちにも当てはまる。窮屈な思いに苛まれた入居者たちは、先に述べたとおり、元の自分の居場所へと帰っていった。¹⁰ 彼女たちのそのような行為はディケンズにとってはじつは残念なことであっただろう。しかし、そんな彼女たちの残念な行動が、皮肉にも、自分

¹⁰ Schlicke 編集の *Oxford Reader's Companion to Dickens* によると、10 代後半に売春婦へと陥った女性たちの多くは厳しい低賃金による経済的な理由からの転落で、そんな売春婦たちも宿泊施設で働くことによって、ある程度の独立性を持つこともできたという。また、宿泊施設の女将や他の売春婦たちと仲間同士助け合う関係もあったことから、売春婦たちも厳しい路上生活を送るだけだけではなく、しばらくすると結婚して家族を持つ者もいたという (475)。

をだまして生きることの辛さをディケンズに気付かせたのではないだろうか。

ギャヅヒル・プレイスの屋敷の購入には、彼女たちと似たような、安らぎを求めるディケンズの意識が働いていたのかもしれない。

さらに、この時期にあった別の出来事にも注目したい。それは作家の素人演劇活動である。ディケンズが役者としてまた舞台監督として演劇活動に打ち込んでいたことはよく知られている。クーツはディケンズの演劇における情熱を理解してはいたものの、観劇の誘いに快く応じることはなかった。ディケンズがクーツに観劇の誘いを熱心に行っている 1856 年 12 月 13 日付けの書簡 (*Letters* 8: 237) に、ジョンソンは、

Miss Coutts's objections, not to the theatre, but Dickens's engaging in amateur theatricals, was deep-rooted and persistent – it was expressed as early as 1851, [...]. It is possible though unprovable that she had an uneasy suspicion of what was indeed the fact, that he used the excitements of these dramatic enterprises as an emotional safety valve of distraction from the increasing unhappiness of his relationship with his wife. (332)

と補足し、作家の演劇活動は、“charitable purpose”のためと繕っていたものの、1855 年 6 月の *The Lighthouse* のころには堂々とのめり込んでいったと説明している (332)。

アーサーは父クレナム氏が楽団で歌手だった女性との間に生まれた不義の子である。信心深いクレナム夫人はその楽団を怠惰の館と蔑み、芸術を呪わしい

畏、つまり悪魔の誘惑と決めつけ憎悪を募らせていた。彼女の身に危険が迫ってアーサーが助けを申し出ても夫人は決して受け入れることはなく、二人が和解をすることもなかった。この描写は、ディケンズが素人演劇活動にのめり込む過程でクーツとの関係が乖離していったことを反映しているとも読める。

このアーサーとクレナム夫人の仲介をするのがエイミーである。彼女は監獄に入れられたアーサーの介護をするだけではなく、クレナム夫人の最期にも付き添い夫人の告白を聞く。このエイミーの特徴として思い起されるのが自身の素性への拘りであり、ここに自身の出生を封印して過去を振り返らずに前を向いて生きてゆく決意を固めた『荒涼館』のエスタ像との大きな違いがある。エスタは実用的な慈善方法を提唱したが、エイミーは過去に向き合いながら、同時に過去を癒すという善意を体現した。これは、それまでのディケンズとクーツのユーレイニアでの慈善のいずれにも見出せなかった新たな慈善の形と言える。しかし、ディケンズはユーレイニア慈善にそれを導入して続けてゆくことはなかった。続けてゆくためには、当事者の女性たちからの励みや感謝の声がもっと必要だっただろうし、素人演劇に加え妻キャサリンとの別居を通して拡がるクーツとの距離感を埋めてゆくことも難しくなっていたからであろう。¹¹

ディケンズの慈善における意識の変化を『荒涼館』のころと本作品を比較しな

¹¹ ディケンズの離婚および再婚については、Tomalin の *The Invisible Woman: The Story of Nelly Ternan and Charles Dickens* に詳しい。

がら辿ってきた。そこから見えてきたものは、作家が自身の体験を基に築いた慈善の世界の崩壊である。それは、作家がユーレイニア慈善に直接関わることによってもたらされたもので、最後はその慈善事業を離れるといった残念な結末を迎えてしまった。しかし、この慈善を通して作家は封印していた自身の過去と向き合い、辛い記憶を作品のなかに取り入れることになった。『リトル・ドリット』は、そんな作家の大きな意識の変化が組み込まれた意義の深い作品なのである。

終 章

本論文では、ディケンズの個人的な慈善活動が作家としての創作活動にどのような影響を及ぼしていたのかを、作品ごとに追ってきた。その影響は、ディケンズの各作品に見て取ることができる。まず、ユーレイニア・コテッジ開設の準備段階にあった『ドンビー父子』では、世代の移り変わりに女性の跡継ぎを示唆するという新たな時代の幕開けが予感されており、そこに影響の一端を窺うことができる。また半自伝的な『デイヴィッド・コパフィールド』で、ディケンズは、不運に見舞われる人々のハッピーエンドを模索し、彼らを「海外移住」という新たな生き方へと導いたが、それもこの影響なしには考えられない。つづく、『荒涼館』では社会の秩序を踏み越えた女性の問題に男性作家としての視点を介在させ、作家が“I had never had so many readers.” (BH Preface X)¹と記しているように、当時の読者から大きな反響を呼んだ。そして、国が大衆の教育に介入しつつあった時代に時勢の教育システムに切り込む『ハード・タイムズ』では、ユーレイニアにおけるディケンズの更生システムがその背景にあった。さらには、ユーレイニアの慈善事業を去る前に書かれた『リトル・ドリット』では善意の在り方が前景化され、ユーレイニアにおける慈善を施す側と受ける側のそれぞれの思いが具体化されていた。加えて、この作品は“In the Preface to *Bleak House*

¹ 本論文では、*Bleak House* からの引用に関しては、出版年が2003年のものを用いているが、ここでの引用は1853年版 (BH Preface X)を用いている。

I remarked that I had never had so many readers. In the Preface to its next successor, *Little Dorrit*, I have still to repeat the same words.” (LD Preface 6) と作家が述べているように、再び大きな反響を呼んだ。

これらのことから、作家が常に社会の動向や情勢を意識しながら、慈善活動と創作活動においてその労力を注いできたことは確かである。何よりも各作品の話題性や売れ行きとして結実したことがその証左であろう。そして、そのことはまた個人的な慈善ワークと小説の創作がうまく調和していたことを裏付けるものでもある。したがって、ユーレイニアの慈善事業はディケンズに作家としての大きな可能性や貢献をもたらしてくれたと言える。

しかしながら、各作品のプロットのうちユーレイニアとの関連性が伺えるものを見ると、作品の売れ行きが好調になってゆくのと逆行するかのように、作家の視点や主張には、むしろしだいに揺れや翳りが生まれてゆくのである。たとえば、ディケンズは当初、『ドンビー父子』では女性たちの連携が社会を転覆させるような力に発展する可能性や、『コパフィールド』では「新天地」への期待を描いていた。しかし『荒涼館』のころになると、デドロック夫人の行く末やエスタの痘痕に暗示されるように、作家の視点には「揺らぎ」のような姿勢が表れはじめる。さらに『ハード・タイムズ』や『リトル・ドリット』の頃になると、ディケンズの主張は「批判」と「自省」といった苦い思いへと変化をしていることである。好調な波に乗っていたはずの創作活動の裏側で、ディケンズには一体何が起こっていたのだろうか。

翳りの兆しが表れ始めた『荒涼館』は、とりわけユーレイニアの色合いが濃く映し出されている作品である。すなわち、それ以前の『ドンビー父子』の連載のころはユーレイニアの設立に向けて骨組みをまとめていた時期で、じっさいの運用期間も半年ほどでしかなかった。そして次の『デイヴィッド・コパフィールド』では、開設からしばらく経ってはいたものの、ユーレイニアの関連性が見られる登場人物たちやプロットは主人公の成長を語る物語の副筋として描かれていたにすぎなかった。ところが、『荒涼館』になると、「堕ちた女性」の問題は物語の中枢に据えられて、主人公エスタの生き様に投影されていた。エスタの生き方とは、日々の日課に懸命に取り組み、周りの人々を助けながら強く賢く生きることである。そうすることで負の烙印をもつ女性の「結婚」も可能であるとする、ディケンズのユーレイニアの女性たちへ向けたメッセージとも取れる見解が示唆されていた。しかし、この烙印を負った女性たちの「結婚」は、ユーレイニアにおいて、クーツが異を立てていた事柄である。ほかにも、女性に高い教育は不要と考えるクーツへの皮肉だろうか、エスタは秀でた教育性を持つとともに、クーツが苦手とする「書ける」技術が得意とされていた。つまり、『荒涼館』はディケンズのユーレイニアにおけるクーツとの対立点が散見される作品となっていた。つづく『ハード・タイムズ』においても、ディケンズは自らが考案した更生方法を享受したユーレイニアの女性たちの人間性に関わる問題点を、作品内ではグラッドグラインド学校の教育システムに投影していた。そして、『リトル・ドリット』になると、慈善行為そのものが物語の中心に据えられて、施す側とそ

れを受ける側のかみ合わない様子が詳述されていた。それぞれの胸中が浮き彫りとなり、そこには、慈善行為を問う作家の視点がみられた。すなわち、ユーレイニアで入居者たちの心理を洞察した作家の実体験が本作品に投影されたのである。その結果、自身の慈善行為は主人公アーサーに、真の善意はもう一人の主人公エイミーに託されて、物語の中で慈善の意義が追求された。

『荒涼館』や『リトル・ドリット』がそれまでのディケンズ作品において記録的な読者数を獲得したことは先に述べたが、そのことはまた、読者数が好調であればあるほど、作家はユーレイニアの内情にまで分け入り、クーツとの対立や入居者たちの習性や反応といった、より現実味を帯びた内容を自身の創作に取り込んでいたことになる。

しかしながら、こうしたことがじつは皮肉な因果関係を生んでしまったのではないだろうか。なぜならば、作品内でユーレイニアの更生システムや出来事に言及すればするほど、それはまた施設におけるディケンズの運営管理や更生方法を作家自身が見つめ直すことにつながるからである。ジャーナリストとしての視点を持つ作家にとって自身の運営方針や更生方法はどのように映っていたのだろうか。ユーレイニアのシステムが立体的に見えてくるにしたがって、自身のマネジメントに対する正当性には疑問が生じていたのではないか、作品の成り行きからはそう読める。とすれば、それら作家の内面で起こっていた苦い思いはユーレイニアを作品に取り入れることへの限界を作家に悟らせてしまったのではないだろうか。

かつて、中流の家庭に生まれながら父の負債の滞りからそれまで住んでいた家や生活を失ったディケンズ少年は懸命に努力を重ねて自ら生きる糧を身に付けた。速記術を習得し新聞記者を経て小説家へと転身した。ジャーナリスト的な視点で描くロンドンの街の描写は彼を一躍有名にし、資産家のアンジェラ・バーデット＝クーツとの出会いにつながった。順風満帆な時を迎えた作家は、24歳で結婚、翌年には長男が誕生した。自らの家庭を持った作家は「ホーム」造りにも懸命で、とりわけ子どもたちの教育には熱心で、早くからフランス語を学ばせ、長男に至っては就学前からスイスで学ばせるといった、英国では他の子どもたちから秀でる存在となるよう理想的な環境を整えた。

同様に、名声を手にした作家は、慈善家としてその視線を孤児や貧民の子どもたちにも注いでゆく。教師の育成や学ぶ科目の選定など、子どもの教育に向けた貧民学校の改善にはクーツとともに熱心に取り組んだ。その間、10代や20代といった若い売春婦たちの更生施設ユーレイニア・コテッジの慈善事業には長期にわたって携わり、ディケンズはユーレイニアが刑務所から出所した女性たちの「ホーム」となるべく奔走した。それは、当たり前のように存在しながら、どこにもない特別な場所としてのホーム造りであった。そのホームでは音楽がながれ、真白なシーツにくるまれる心地の良い寝床があり、ディケンズは更生施設でありながらも有機的な空間を生み出すために内装にはこだわり理想的な環境を整えた。

しかし、これら二つの理想的な環境のもと、作家の家庭ではディケンズ自身が自らに降りかかった少年時代の辛い過去を披歴することはなかったし、ユーレイニアでは、入居者たちが自らの辛い記憶を振り返って語り合い慰め合うこともなかった。

ディケンズの慈善事業としてのユーレイニアの意義は、途中で退いてしまったことを踏まえると、曖昧に終わってしまったのかもしれない。しかし、作家の入居者たちを主体とするホーム造りは、ヒューマニズムに立脚すべくクーツと協力し、時には対立しながら取り組み続けてきたことは作品をとおして見てきたとおりである。その後、ディケンズはユーレイニアの慈善を撤退、延いては離婚と、自ら築いてきた二つの「ホーム」を後にしてしまったわけであるが、ユーレイニアはヴィクトリア朝を代表する作家の人生に揺るぎない名声と挫折をもたらした大きな出来事だったのである。

引用文献

Ackroyd, Peter. *Dickens*. Sinclair-Stevenson, 1990.

Acton, William. *Prostitution Considered in Its Moral, Social, and Sanitary Aspects, in London and Other Large Cities; with Proposals for the Mitigation and Prevention of its Attendant Evils*. John Churchill, London, 1857.

Ager, Adrian. "Prostitution in the Medway Towns, 1860-1885." *Local Population Studies*. no.83, 2009, pp. 39-55.

Archibald, Diana C. *Domesticity, Imperialism and Emigration the Victorian Novel*. U of Missouri P, 2002.

Arnold, Walter. *The Life and Death of the Sublime Society of Beef Steaks*. Bradbury Evans, London, 1871.

Around the Bush – A History of Shepherd's Bush. Shepherd's Bush Local History Society. Shepherd's Bush Local History Society, 1998.

Atkinson, Diane. *The Criminal Conversation of Mrs Norton*. Preface Publishing, 2012.

Barber, Frederick Hugh. *The Influence of Reformed Doctrine on English Charity in the Sixteenth Century*. Hugh Barber, 1971.

Blackstone, William. *Commentaries on the Laws of England*. vol.1. The Eighth Edition. Clarendon Press, Oxford, 1778.

Blake, Kathleen. *Pleasures of Benthamism: Victorian Literature, Utility, Political Economy*. Oxford UP, 2009.

Bodenheimer, Rosemarie. *Knowing Dickens*. Cornell UP, 2007.

Bristow, Edward. *Vice and Vigilance: Purity Movements in Britain since 1700*. Gill and Macmillan, 1977.

Brown, James M. *Dickens: Novelist in the Market-Place*. Barnes and Nobel Books, 1982.

Chesterton, Gilbert Keith. *Charles Dickens*. Methuen Publishing, 1919.

Davidoff, Leonore and Catherine Hall, *Family Fortunes*, Revised Edition. Oxford, Routledge, 2002.

Dickens, Charles. *Bleak House*. Edited by Nicola Bradbury, Penguin, 2003.

---. *Bleak House*. Bradbury and Evans, London, 1853.

---. *David Copperfield*. Edited by Jeremy Tambling, Penguin, 2004.

---. *Dombey and Son*. Edited by Andrew Sanders, Penguin, 2002.

---. *Hard Times*. Wordsworth Editions, 1995.

---. *Little Dorrit*. Edited by Stephen Wall, Penguin, 1998.

---. *Martin Chuzzlewit*. Edited by Patricia Ingham, Penguin. 1999.

---. *Nicholas Nickleby*. Edited by Mark Ford, Penguin, 1999.

- . *Oliver Twist*. Edited by Philip Horne, Penguin, 2002.
- . *Sketches by Boz: Illustrative of Every-day Life and Every-day People*. Oxford UP, 1969.
- . *The Letters of Charles Dickens*. Edited by Madeline House et al., Clarendon Press, 1965-2002. 12 vols. (Abbr. *Letters*)
- . *The Old Curiosity Shop*. Edited by Norman Page, Penguin, 2000.
- . "A Bundle of Emigrants' Letters." *Household Words*, vol. 1, 30 March 1850, pp. 19-24. *Dickens Journals Online*, www.djo.org.uk/household-words/volume-i/page-19.html. Accessed 15 April 2020.
- . "Ground in the Mill." *Household Words*. vol. 9, 22 April 1854, pp. 224-27. *Dickens Journals Online*, www.djo.org.uk/household-words/volume-ix/page-224.html. Accessed 15 February 2021.
- . "Home for Homeless Women." *Household Words*. vol. 7, 12 April 1853, pp. 169-75. *Dickens Journals Online*, www.djo.org.uk/household-words/volume-vii/page-169.html. Accessed 15 April 2020.
- . "Things That Cannot Be Done." *Household Words*. vol. 8, 8 October 1853, pp. 121-123. *Dickens Journals Online*, www.djo.org.uk/household-words/volume-viii/page-121.html. Accessed 28 February 2021.

Dickens: The Critical Heritage. Edited by Philip Collins, Barnes and Noble, 1971.

Eliot, Simon. "Books and their Readers." *The Nineteenth-Century Novel*. Edited by

Delia Da Sousa Correa, London, Routledge, 2000.

Finnegan, Frances. *Do Penance or Perish: A Study of Magdalene Asylums in Ireland*.

Congrave Press, 2001.

Foster, John. *The Life of Charles Dickens*. vol.1 (1812-1847). Chapman and Hall,

London, 1876.

Fradin, Joseph I. "Will and Society in Bleak House." *Critical Essays on Charles*

Dickens' Bleak House. Edited by Elliot L. Gilbert, G.K. Hall, 1989.

Garrett, Peter K. "Double Plots and Dialogical Form in Victorian Fiction." *Nineteenth-*

Century Fiction. vol. 32, no.1, 1977, pp. 1-17.

Gilbert, Elliot Lewis. *Critical Essays on Charles Dickens's Bleak House*. G.K. Hall,

1989.

Gleadle, Kathryn. *The Early Feminists: Radical Unitarians and the Emergence of the*

Women's Rights Movement, 1831-51. Palgrave Macmillan, 1998.

Gordon, Jan B. "The 'Soft Time' of Dickens' Hard Times." 『英語英米文学論輯: 京都

女子大学大学院文学研究科研究紀要』, 第 7 号 (2008 年), pp. 1-29.

Great Britain, General Register Office. *Census of Great Britain, 1851. Population*

- Tables. I. Numbers of the Inhabitants. Report and Summary Tables.* William Clowes and Sons, London, 1852.
- Harrison, John Fletcher Clews. *The Early Victorians 1832-1851*. Panther, 1973.
- Hartley, Jenny. *Charles Dickens and the House of Fallen Women*. Methuen, 2008.
- Healey, Edna. *Coutts and Co 1692-1992 The Portrait of a Private Bank*. Hodder and Stoughton, 1992.
- Hibbert, Christopher. *The Great Mutiny India 1857*. Penguin, 1980.
- Hilton, Boyd. *A Mad, Bad, and Dangerous People? England 1783-1846*. Clarendon Press, 2006.
- The Histories of Some of the Penitents in the Magdalen House*. Edited by Jennie Barchelor and Megan Hiatt. Pickering and Chatto, 2007.
- House, Humphry. *The Dickens World*. Oxford UP, 1960.
- Janes, Pamela. *Shepherd's Bush The Dickens Connection*. Malden and Copy Centre, 1992.
- John, Juliet. *Dickens's Villains: Melodrama, Character, Popular Culture*. Oxford UP, 2001.
- Johnson, Edgar. *Letters from Charles Dickens to Angela Burdett-Coutts 1841-1865*. Jonathan Cape, 1953.

---. *Charles Dickens - His Tragedy and Triumph*. Revised and Abridged. Penguin, 1979.

Knight, Mark and Emma Mason. *Nineteenth-Century Religion and Literature*. Oxford UP, 2006.

Larson, Janet L. *Dickens and the Broken Scripture*. U of Georgia P, 1985.

Lawson, John. and Harold Silver. *A Social History of Education in England*. Methuen Publishing, 1973.

Leavis, Frank Raymond. "Hard Times: An Analytic Note." *The Great Tradition: George Eliot, Henry James, Joseph Conrad*. George W. Stewart Publisher Inc., 1950.

Leavis, Frank Raymond and Queenie Dorothy Leavis. "Chapter 4. Hard Times: The World of Bentham." *Dickens the Novelist*. Chatto and Windus, 1973.

Logan, William. *The Great Social Evil: Its Causes, Extent, Results, and Remedies*. Hodder and Stoughton, London, 1871.

London, April. *Women and Property in the Eighteenth-century English Novel*. Cambridge UP, 1999.

MacDonagh, Oliver. Introduction. *Emigration in the Victorian Age. Debates on the Issue from 19th Century Critical Journals*. Gregg International Publishers, 1973.

Mackenzie, Eneas. *The Emigrant's Guide to Australia. With a Memoir of Mrs Caroline Chisholm*. Clarke, Beeton, London, 1853.

Maconochie, Alexander. *The Mark System of Prison Discipline*. J. Hatchard and Son, London, 1846.

Magdalen Hospital. *Magdalen Hospital 1758-1925*. The Hospital, 1925.

Madgwick, Robert Bowden. *Immigration into Eastern Australia 1788-1851*. Longmans, 1937.

Mahood, Linda. *The Magdalenes: Prostitution in the Nineteenth Century*. London, Routledge, 1990.

Marsh, Nicholas. *Charles Dickens: Hard Times / Bleak House*. Palgrave Macmillan, 2015.

Mitchell, Sally. *The Fallen Angel: Chastity, Class, and Women's Reading, 1835-1880*. Bowling Green University Popular Press, 1981.

Molesworth, William. *Speech on Transportation, etc*. H. Hooper, London, 1840.

Moore, Grace. *Dickens and Empire; Discourses of Class, Race and Colonialism in the Works of Charles Dickens*. Ashgate, 2004.

More, Hannah. *Coelebs in Search of a Wife*. E-book ed., Derby and Jackson, 2006.

---. *The Story of Sinful Sally*. J. Marshall, London, 1796.

Morton, Arthur Leslie. *Life and Ideas of Robert Owen*. Lawrence and Wishart, 1962.

Naidu, Suresh, and Noam Yuchtman. "Coercive Contract Enforcement: Law and the

- Labor Market in Nineteenth Century Industrial Britain.” *American Economic Review*, vol. 103, no.1, 2013, pp. 107-44.
- Orton, Diana. *Made of Gold: A Biography of Angela Burdett Coutts*. H. Hamilton, 1980.
- Osborne, Charles Churchill. “Letters of Charles Dickens to Baroness Burdett-Coutts.” *The Cornhill Magazine*, New Series, vol. LXXI. John Murray, 1931.
- Osborne Papers*, Vol. IV. [1792-1907], Osborne Papers, British Library, London, Add. MS. 46405A, ff. 1-224.
- Osborne Papers*, Vol. VII. [1792-1907], Osborne Papers, British Library, London, Add. MS. 46406B, ff. 1-226.
- Owen, David Edward. *English Philanthropy, 1660-1960*. Oxford UP, 1965.
- Oxford Reader's Companion to Dickens*. Edited by Paul Schlicke, Oxford UP, 2000.
- Patterson, Clara Burdett. *Angela Burdett-Coutts and the Victorians*. John Murray, 1953.
- Paxman, Jeremy. *The Victorians*. BBC, 2010.
- Peace, Mary. “Figuring the London Magdalen House: Mercantilist Hospital, Sentimental Asylum or Proto-Evangelical Penitentiary?” *Prostitution and Eighteenth-Century Culture: Sex, Commerce and Morality*. Edited by Ann Lewis and Markman Ellis, Pickering and Chatto, 2012.
- Perera, Suvendrini. “Wholesale, Retail, and for Exportation: Empire and the Family

Business in *Dombey and Son*.” *Reaches of Empire: The English Novel from Edgeworth to Dickens*. Columbia UP, 1991.

Philpotts, Trey. *The Companion to Little Dorrit*. Helm Information, 2003.

Plumb, John Harold. “Chapter V: George IV, Regent and King.” *The First Four Georges*. B. T. Batsford, 1956.

Pope, Norris. *Dickens and Charity*. Columbia UP, 1978.

Prochaska, Frank K. *Women and Philanthropy in Nineteenth-century England*. Clarendon Press, 1980.

The Public Readings of Charles Dickens. Edited by Philip Collins, Clarendon Press, 1975.

Reid, Marion. *A Plea for Woman*. Polygon, 1988.

Russell, Francis Albert Rollo. *London Fogs*. Edward Stanford, London, 1880.

Rushen, Elizabeth. *Single and Free: Female Migration to Australia, 1833-1837*. Australian Scholarly Pub., 2005.

Salotto, Eleanor. “Detecting Esther Summerson's Secrets: Dickens's *Bleak House* of Representation.” *Victorian Literature and Culture*. Cambridge UP, 2009.

Schor, Hilary M. “Part III. The Daughter's Portion: 4 *Bleak House* and the Dead Mother's Property.” *Dickens and the Daughter of the House*. Cambridge UP, 2007.

Shuttleworth, James Kay. *Public Education*. Longman, Brown, Green, and Longmans, London, 1853.

Simon, Brian. *The Two Nations and the Educational Structure 1780-1870*. Lawrence and Wishart, 1974.

Sketch of the System of Education, Moral and Intellectual, in Practice at Bruce Castle School. Third Edition, Bruce Castle. C. Knight / Henry Hooper, London, 1839.

Slater, Michael. *Dickens and Women*. Dent, 1983.

The Speeches of Charles Dickens; A Complete Edition. Edited by Kenneth J. Fielding, Harvester Wheatsheaf, 1988.

Stephens, William B. *Education in Britain, 1750-1914*. Macmillan, 1998.

Stewart, W. A. C. *Progressives and Radicals in English Education. 1750-1870*. Macmillan, 1972.

Taylor, Brian W. "Jeremy Bentham and the Education of the Irish People." *The Irish Journal of Education*. vol. 14, 1980, pp. 19-32.

Taylor, Harriet. "The Enfranchisement of Women 1851." *The Disenfranchised: The Fight for the Suffrage*. Edited by Marie Mulvey Roberts and Tamae Mizuta, London, Routledge/Thoemmes Press, 1993.

Thomson, John and Adolphe Smith. *Street Life in London*. Sampson Low, Marston,

Searle and Rivington, London, 1877.

Tomalin, Claire. *The Invisible Woman: The Story of Nelly Ternan and Charles Dickens*.

Viking, 1990.

Walkowitz, Judith R. *Prostitution and Victorian Society: Women, Class and the State*.

Cambridge UP, 1980.

Weeks, Jeffrey. *Sex, Politics and Society: The Regulation of Sexuality since 1800*.

Longman, 1981.

Williams, Raymond. *The Long Revolution*. Penguin, 1965.

Wilson, Angus. *The World of Charles Dickens*. Penguin, 1972.

Winnifrith, Tom. *Fallen Women in the Nineteenth-century Novel*. Palgrave Macmillan,

1993.

川北稔 / 秋田茂 / 村田邦夫 / 梅津實. 『イギリス史：3－近現代－』．世界歴

史体系．木畑洋一 / 村岡健次編, 山川出版社, 1991 年.

木畑洋一. 『大英帝国と帝国意識：支配の深層を探る』．ミネルヴァ書房, 1998

年.

小西千鶴. 「Urania Cottage－ディケンズとクーツの慈善－」 『神戸市外国語大

学研究科論集』．第 18 号 (2015 年), pp. 1-18.

---. 「新旧の遭遇－*Dombey and Son* とユーレイニア慈善」 『神戸市外大論叢』．第 5 号 (2015 年), pp. 147-63.

---. 「『荒涼館』とユーレイニア慈善－二人の語り手をめぐって－」 『ディケンズ・フェロウシップ日本支部年報』．第 39 号 (2016 年), pp. 20-30.

---. 「善意の視点－『リトル・ドリット』とユーレイニア・ホーム－」 『ディケンズ・フェロウシップ日本支部年報』．第 41 号 (2018 年), pp. 19-33.

武井暁子. 「慈善活動家としてのディケンズ－ユーレイニア・コテッジへの評価」『ディケンズ・フェロウシップ日本支部年報』．第 30 号 (2007 年), pp. 183-200.

玉井史絵. 「第 10 章『ハード・タイムズ』教育の（暴）力」『ディケンズ文学における暴力とその変奏－生誕二百年記念－』．松岡光治編, 大阪教育図書, 2012 年.

新野緑. 『小説の迷宮: ディケンズ後期小説を読む』．研究社, 2002 年.

ベイカー, ケネス. 『英国王室スキャンダル史』．樋口幸子訳, 河出書房新社, 1997 年.

マルクス, カール / エンゲルス, フリードリッヒ. 『共産党宣言』．大内兵衛 / 向坂逸郎訳, 岩波書店, 1971 年.

モートン, アーサー. 『イングランド人民の歴史』．鈴木亮 / 荒川邦彦 / 浜林

正夫訳, 未来社, 1972 年.

ラエルティオス, デイオゲネス. 『ギリシア哲学者列伝 (中)』. 加来彰俊訳,

岩波書店, 1989 年.

ワイズ, サラ. 『塗りつぶされた町ーヴィクトリア期英国のスラムに生きる』.

栗原泉訳, 紀伊国屋書店, 2018 年.